





後記

パシー海峽の黒潮を蹴り、比島の戦野に日章旗を翻した世紀の大進軍、比島派遣軍の赫々たる戦果は、御稜威の下、今や輝かしく新比島建設の礎となり、その戦蹟は燦として不滅の光りを放つてゐる。

茲にかつての日の戦場を回顧し、いよいよ以て承諾必謹を儆にすべく記念寫真帖「比島派遣軍」を編纂する所以である。

本帖作成にあたり、本間前軍司令官閣下より題字をいただき、又、前報道部員三木清、石坂洋次郎、火野葦平、上田廣、安田貞雄の諸氏に解説の勞を煩したることに對し、深く謝意を表する次第である。

尙、出版の時期は昨年末であつたが、當時折よく内地より新活字が到着する運びになつてゐたので、これが到着を待つて印刷することにした。處が御承知の通りの輸送困難の爲、本年二月漸く入手した仕末である。それより直にこれが印刷を開始し、爾後「マニラ」新聞社印刷所の夜に日を織いでの奮闘努力により、漸く五月末日に完成するに至つた次第である。

發行期日の甚大なる遅延に對しては、ここに重ねて各位にお詫びを申上げる次第である。

定價金貳圓也

昭和十八年五月二十七日印刷
昭和十八年六月一日發行

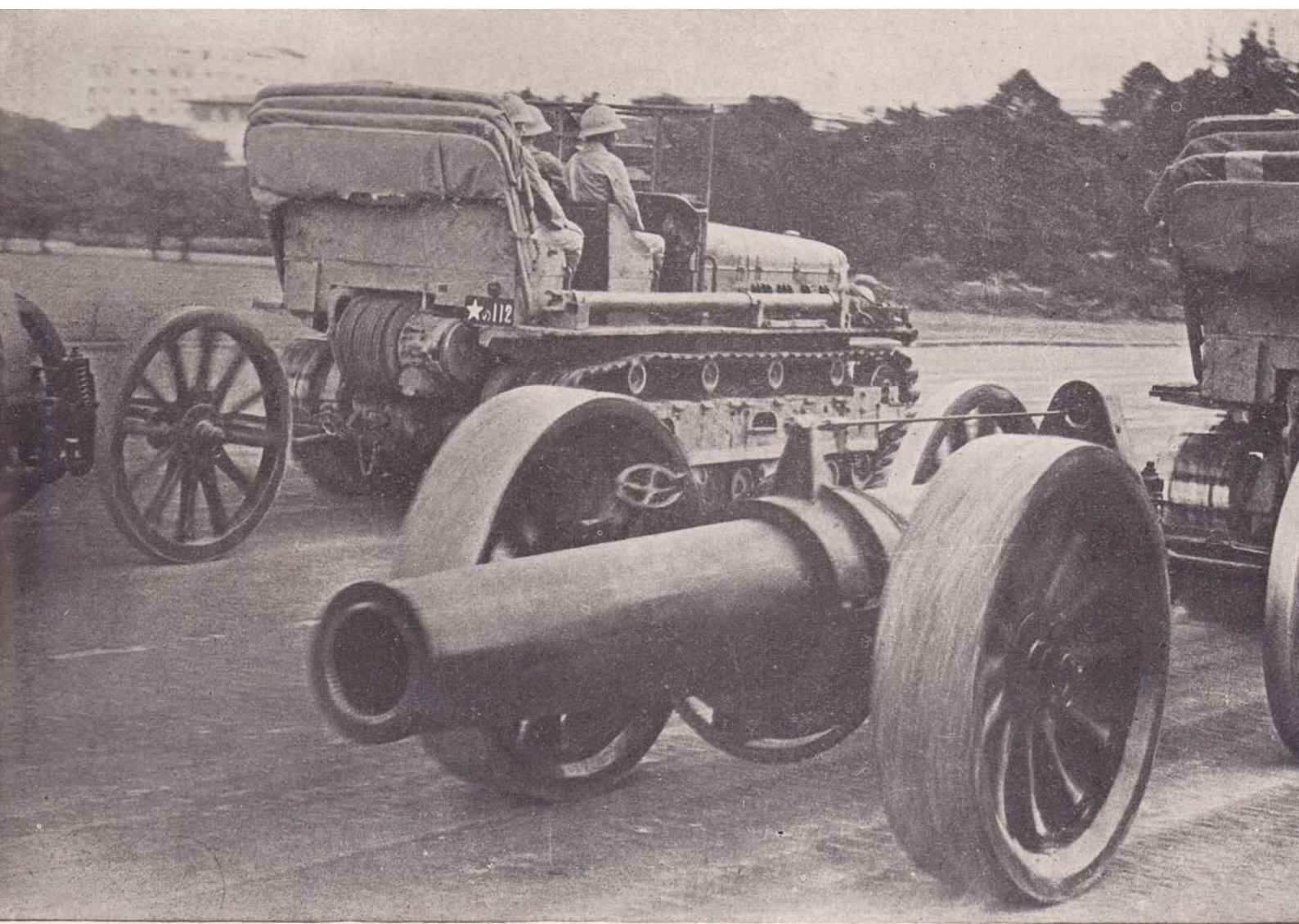
編纂 比島派遣軍報道部
發行

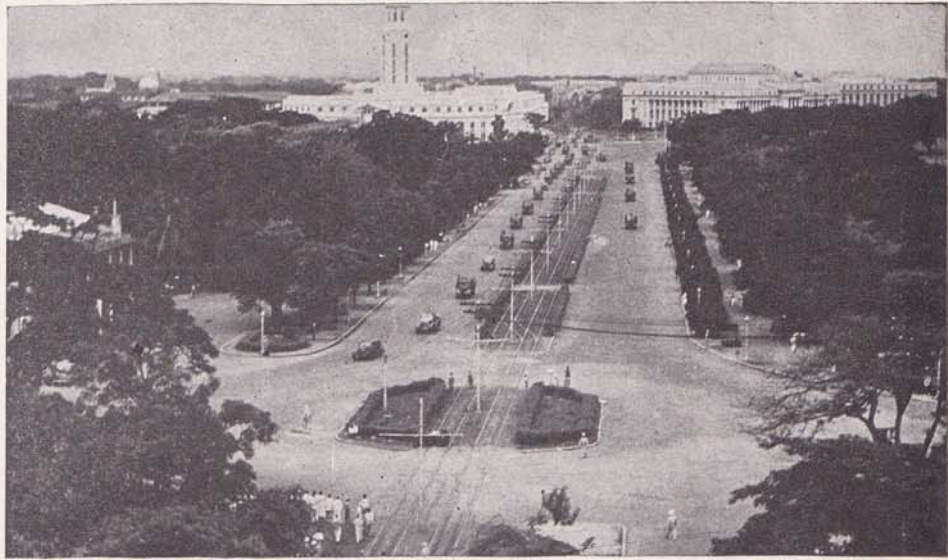
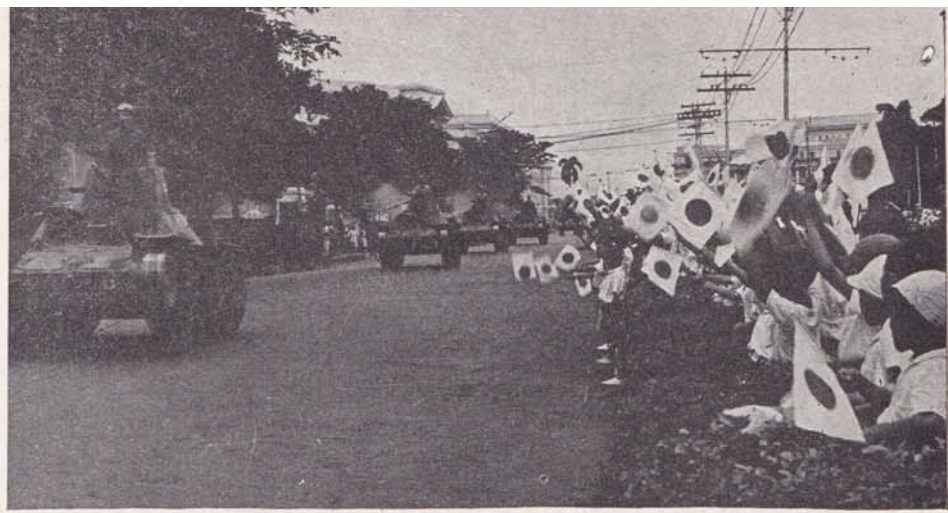
マニラ市バグンバナホン區
ソレル街

印刷所 マニラ新聞社印刷所

印刷人 平野太郎

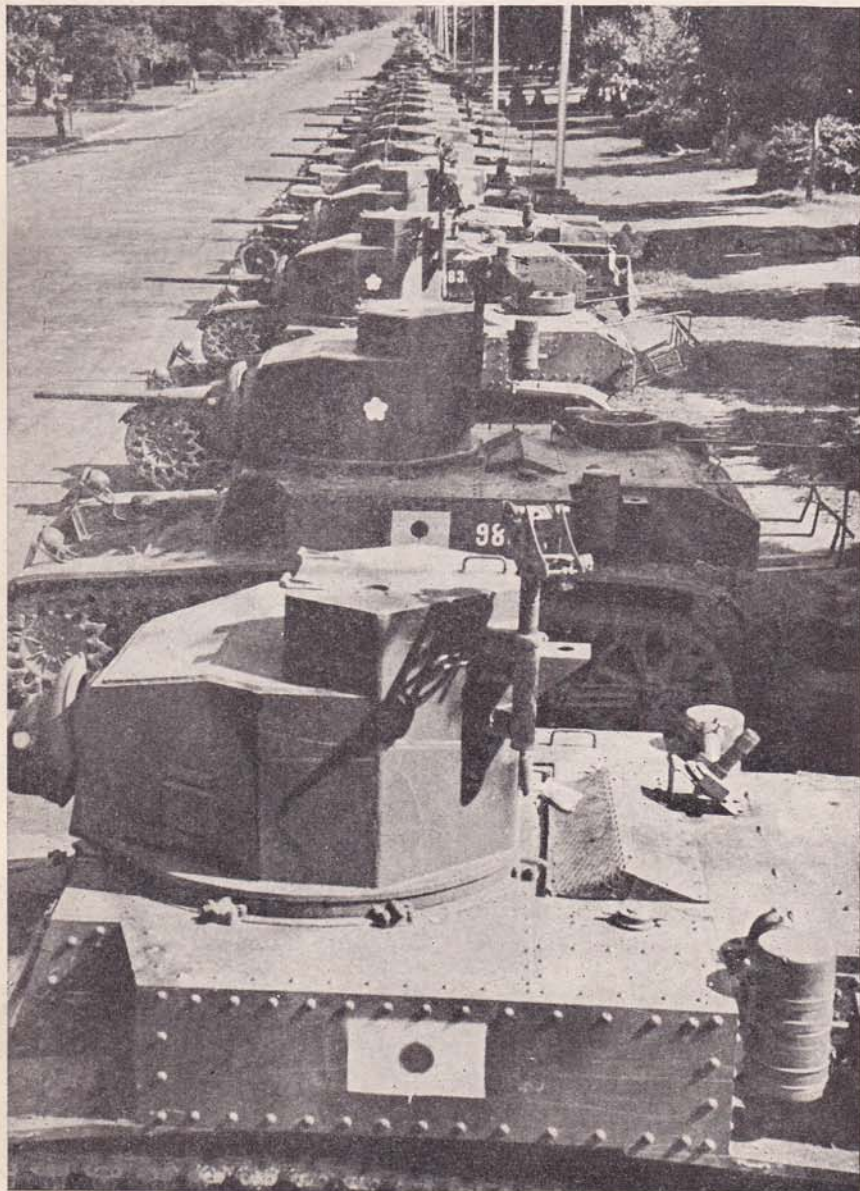
「比島派遣軍司令部檢閲済」





久しく比島の天地を覆ふてゐた妖雲悉く去つて、太平洋のエメラルドの島々は新しい光に映える。大戦捷祝賀観兵式行はれ、精強無比なる皇軍の威容は繪卷の如く繰り展げられる。世紀の感激はマニラ灣を越へて潮の如く全東亞に漲る。三百年に近いスペインの支配、四十年に餘るアメリカの統治、比島の歴史は茲に一大轉換をなし、大御稜威に輝く大東亞共榮圏の一環として、全く新たな出発をなす大いなる日が來たのである。

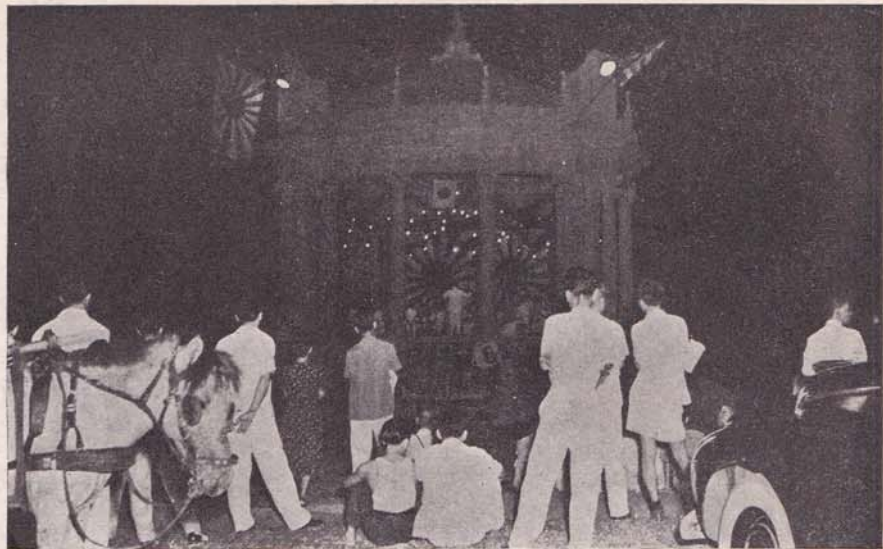




コレヒドール陥落祝

解放された。コレヒドール陥落祝賀観兵式行はる。コレヒドール最後の日は、歐米の物質文化に對する日本精神の勝利の日である。近代兵器に裝備されつつ古武士の面影を有する日本の兵隊の面魂を見よ！今や比島人は歐米崇拜の長い悪夢より醒めて東洋人としての自覺に還り、日本を指導者と仰ぐ誇をもつて、新比島の建設に邁進し得るに至つたのである。

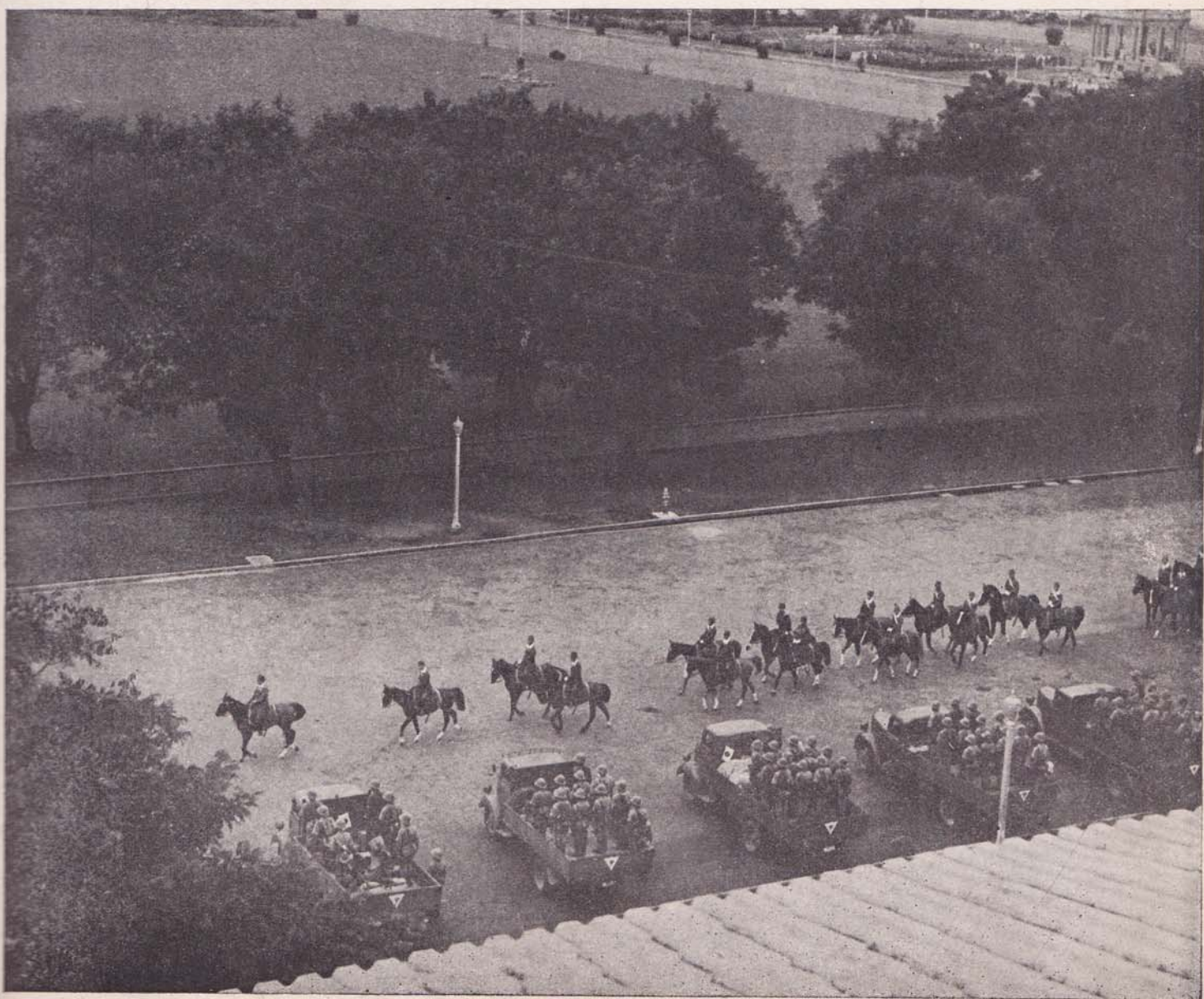
六月三日

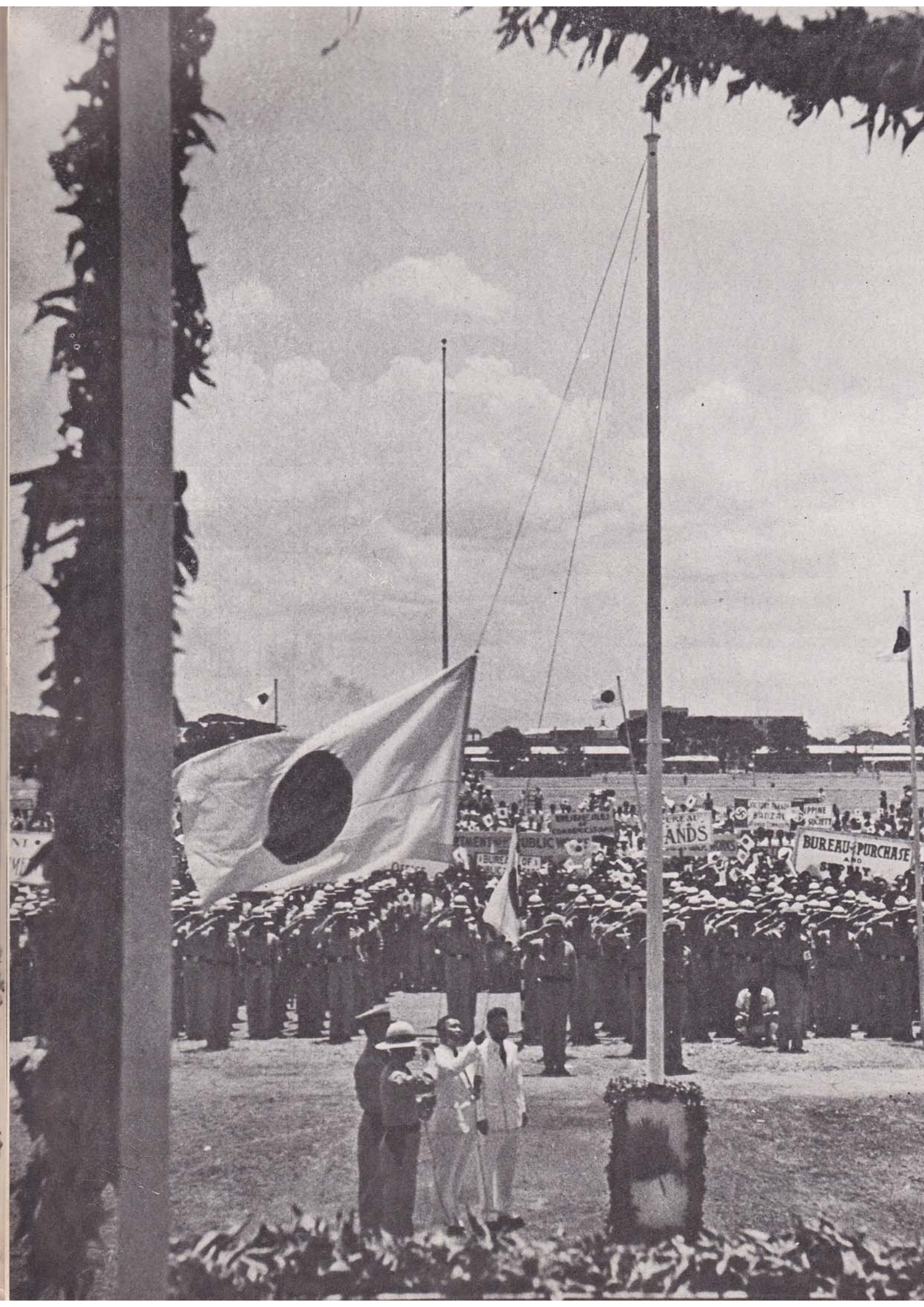


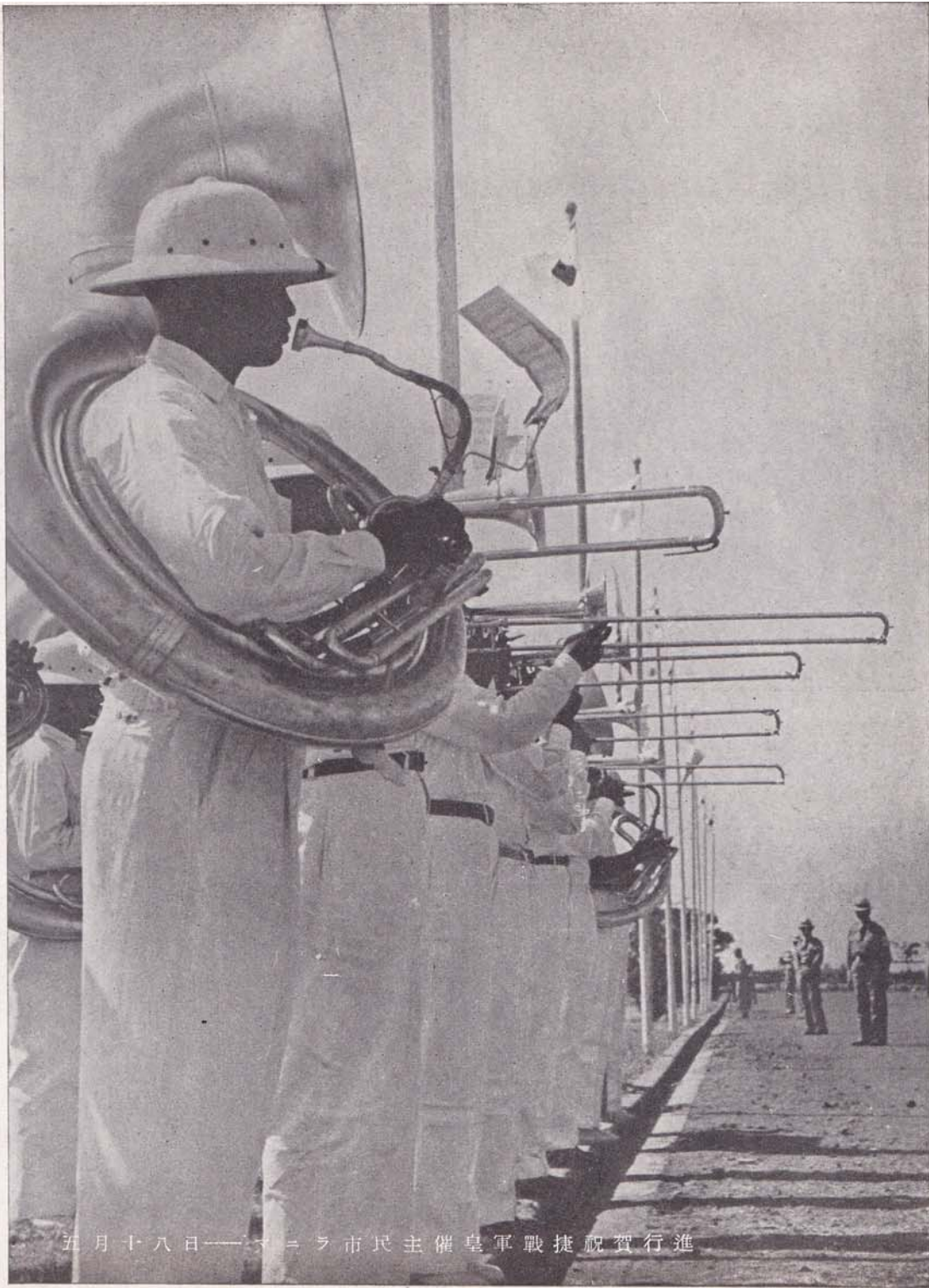
五月廿四日 於ニユールネ夕

海軍記念日の海軍主催音楽會

式



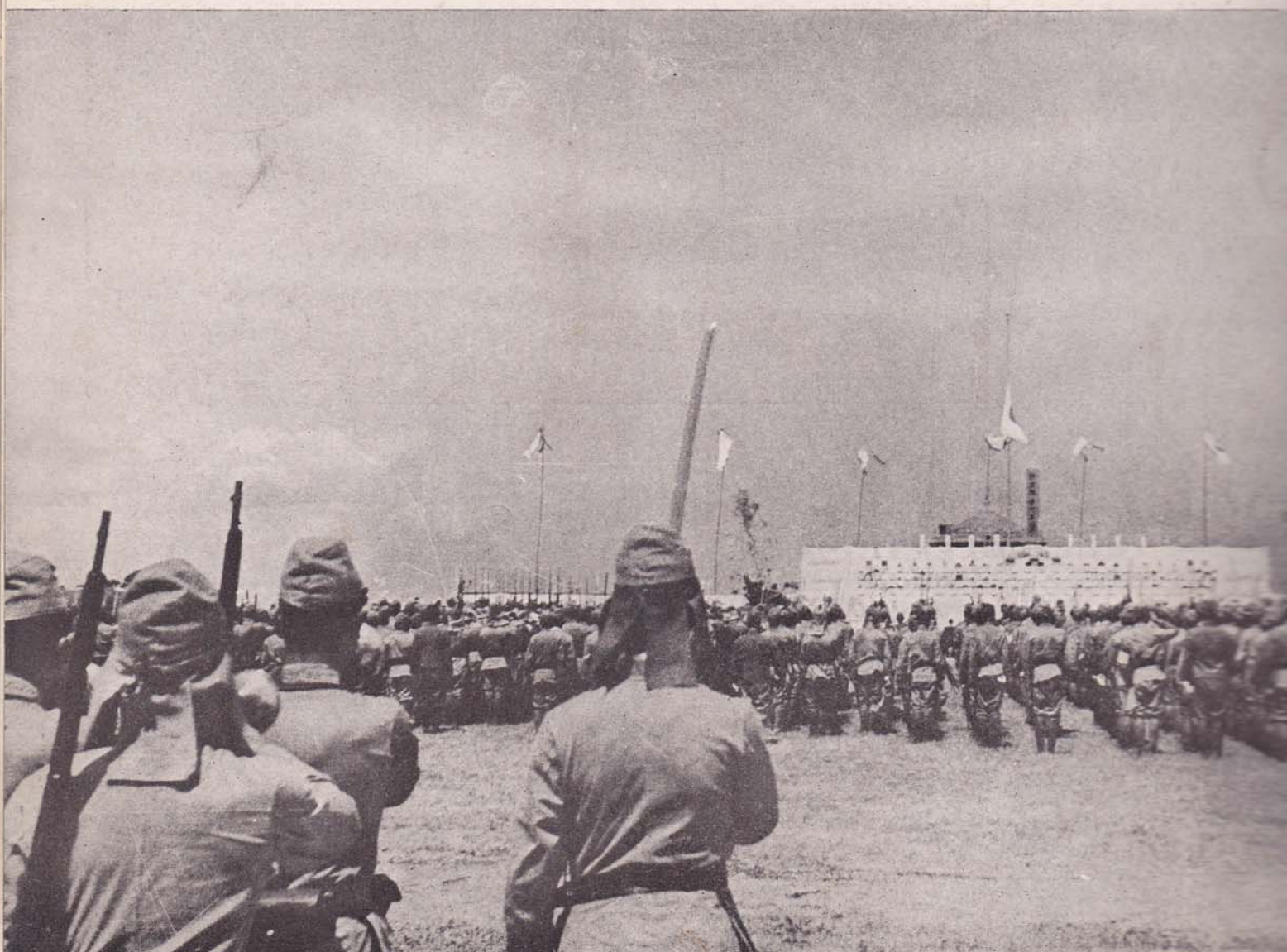
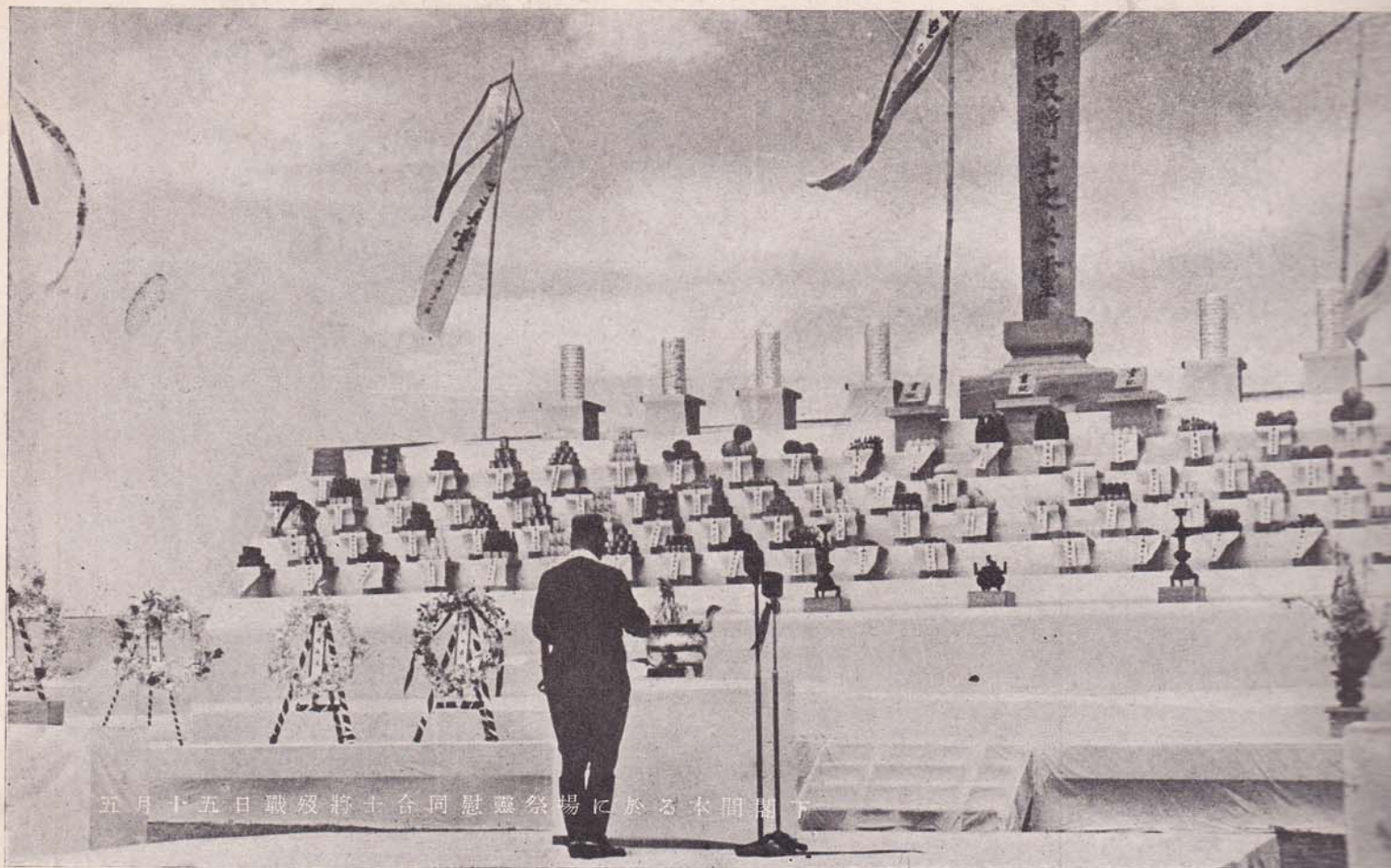


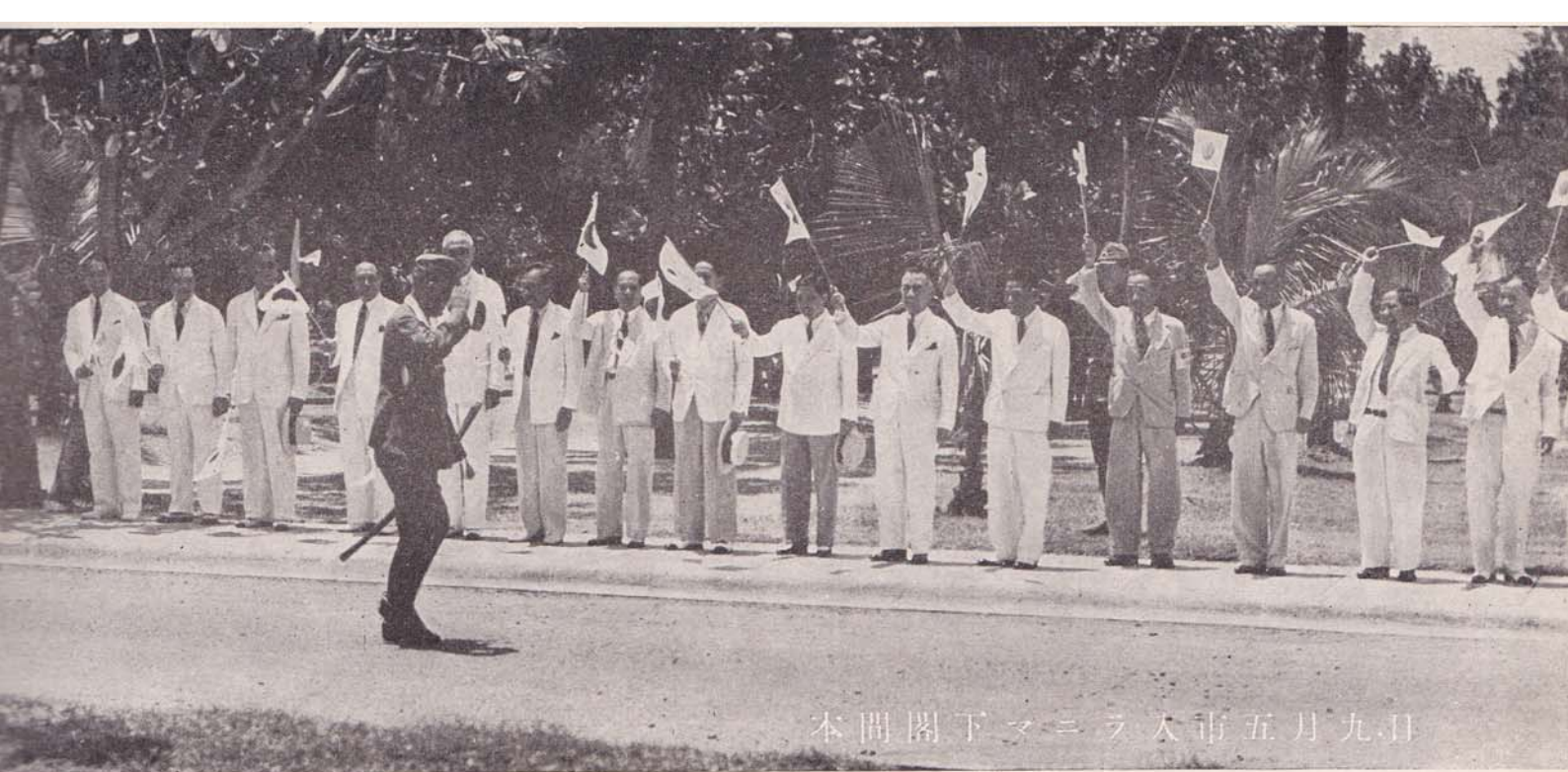


五月十八日——マニラ市民主催皇軍戦捷祝賀行進

マニラ市民によつて戦捷祝賀行進が行はれ、比島の歴史に會て見ざる多數の市民が行進に
 參加した。手に手に打ち振る日の丸の波は、全市を感激の坩堝に投げ込んだ。肅々と掲揚さ
 れる國旗、嘯唳として響きわたる比島樂隊の吹奏。愛國行進曲や國民進軍歌は海を越へて全
 比島人に愛唱されてゐる。日本の歌は今や全亞の東歌となり、世界新秩序創製の歌として到
 る處高らかに唱和される。







本間閣下マニラ入市五月九日



コレヒドールの陥落と共に米比軍は全面的に降伏し、本間軍司令官は、比島要人と市民の熱誠なる歓迎を受けて、歴史的な都マニラに入る、そして戦歿将士の合同慰靈祭は、極めて盛大に、極めて厳肅に、行はれた。護國の柱、東亞解放の戦士として散華せし英靈の勳功は、南十字星と共に永続に輝く。大御稜威のもと比島の平和は克復し、マニラ市民の顔は喜色に溢れ、道ゆくカロマタの音も朗かである。

つはものありて海原をわたり、

神の意志繼ぎて來れり。

あづみづし久米の子ら、

天の矛平らなく大和の劍、

うち振れば醜のもの消えてあとなし。

防人 のころ大らかに、

日本の歌をぞうたふ。

綺爛 のブリキの町に新しき息吹あたへよ。

大氣透る鯉のころぞ、

日本 の防人の歌。

ひるがへれ、比島の空に、

飛翔せよ、亞細亞の空を、

かつ、歌へ、

高らかに、

軒昂 の日本の歌を。



日本の鯉

常夏とこなつのみどりは深く、

眼にいたき青空のうへ、

きらめきて白雪ながる。

曾ての日、暴虐しんぎの筈のもとに、

東洋の矜持をすてし

セメントとブリキの街、ここにあり。

さはれ、いま、この東洋の空ゆ、

慄悍のころみなきる

日本の鯉ひるがへる。

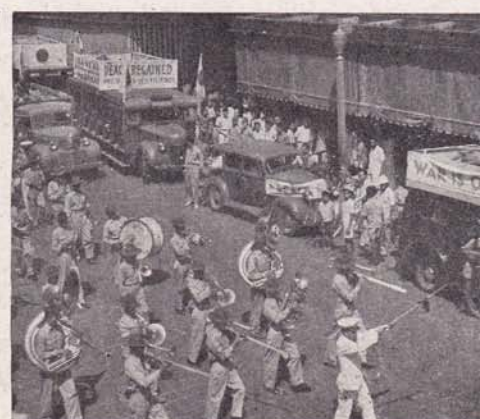
眼光らし、肩をはり、尾をひらめかせて

日本の鯉は東洋の大氣を泳ぐ。





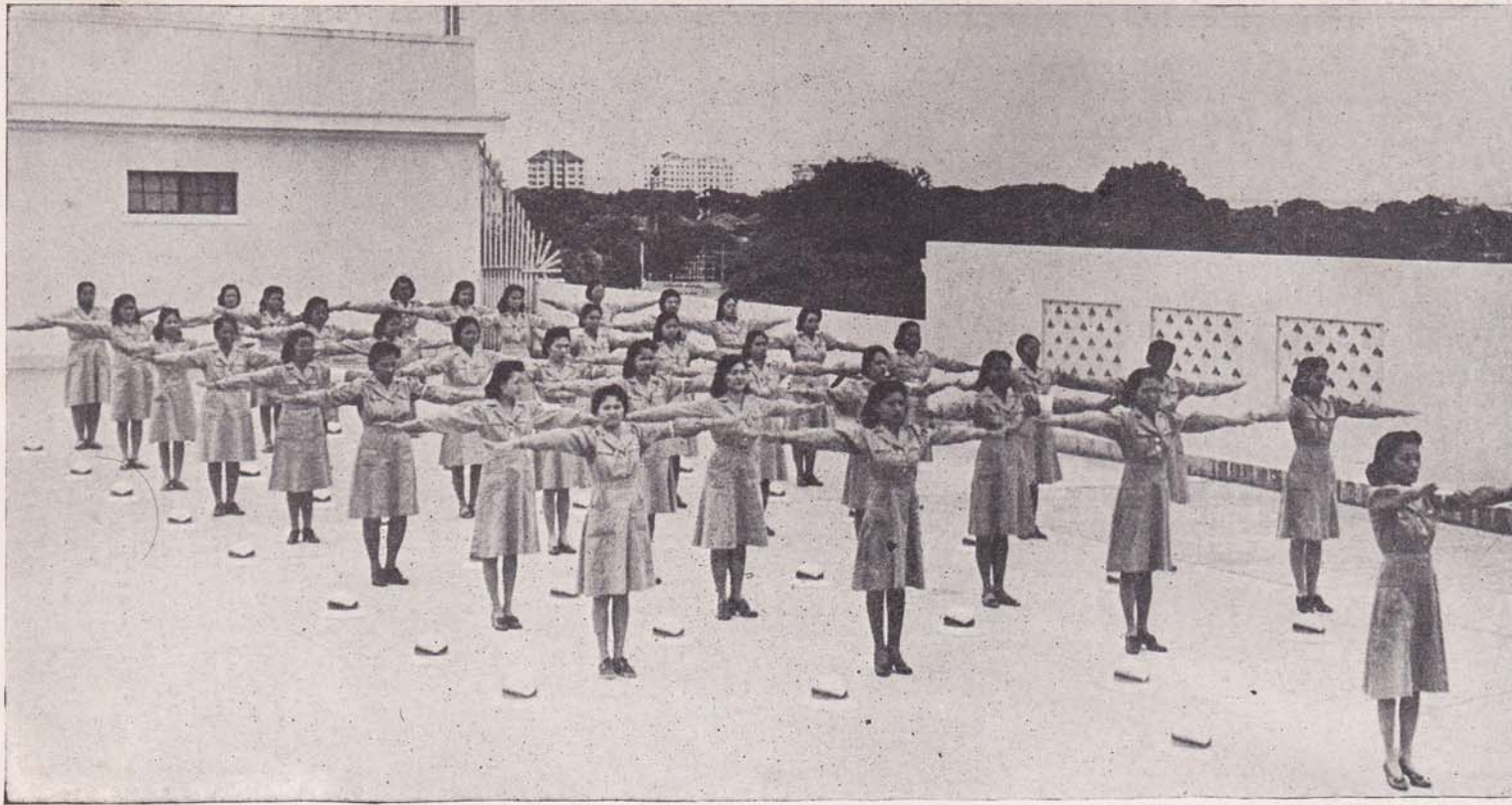
コレヒドール陥落にマブハイ(萬歳)をさけぶ市民 五月九日





烟草工場も復活した。烟草は比島の最も重要な産物の一つである。マニラの葉巻烟草が日本内地に現はれて日比親善に一役を果す日も近いであらう。常夏の國比島は、農産に、鑛産に、林産に、水産に、無限に豊富な資源を藏してゐる。しかもこれらの産業は従來、スペインの近視眼的搾取政策とアメリカの利己的商業主義とに禍されて、未だ多く未發達の段階に止まつてゐて、その開發は勤勉にして優秀なる技術を有する日本人の指導に俟つところが多いのである。





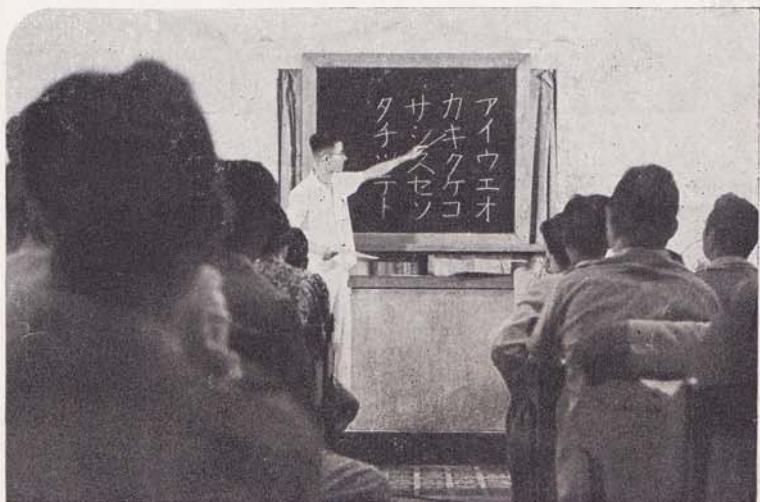
新しい希望と情熱に燃えて、若い女性たちも建設に乗り出した。建設は先づ治安の確保からと、彼女たちは健気にも警察官として厳しい訓練を受けてゐる。彼女たちの建設への進出は、女性が社会的に甚だ高い地位を占める比島においては、特に意義深いものである。





マニラの日本語熱

日本語講習會から街へと日本語は
流れてゆく

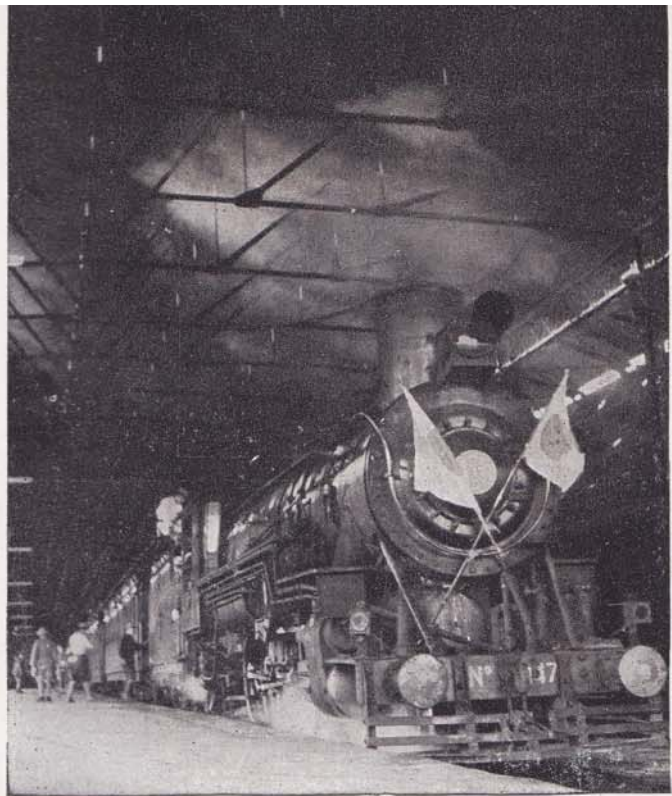




三月 宗教班によるカソリック大晩餐會—これによつてカソリック關係者の皇軍協力は一層強固なものとなる



四月 新教教會初の合同禮拜



米捕虜に向けて放送



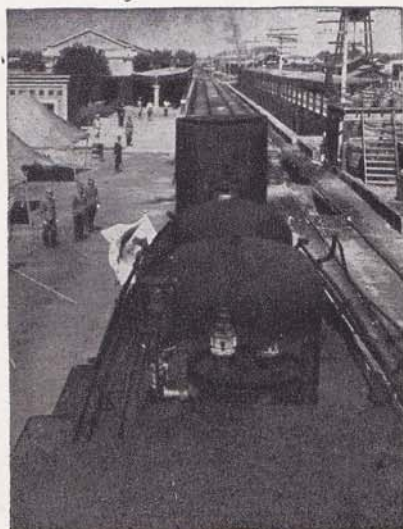
二月十九日新しい生活について放送する行政長官バルガス氏令嬢



對民衆音樂放送

右 一月十四日KZRH放送局開所、對敵對
民衆放送開始

上下 二月十五日マニラ―南サンフェルナン
ド間列車開通、上はサンフェルナンド驛の歡
迎下はマニラ出發





日本の旗をたてて園藝實習



平 和 來 → マ ニ ラ



大 戰 捷 祝 賀 觀 兵 式 に 裨 立 つ リ サ ー ル 街



海を渡つた蓬莱米はかくも
豊に稔り島民に大きな希望
を與へた。

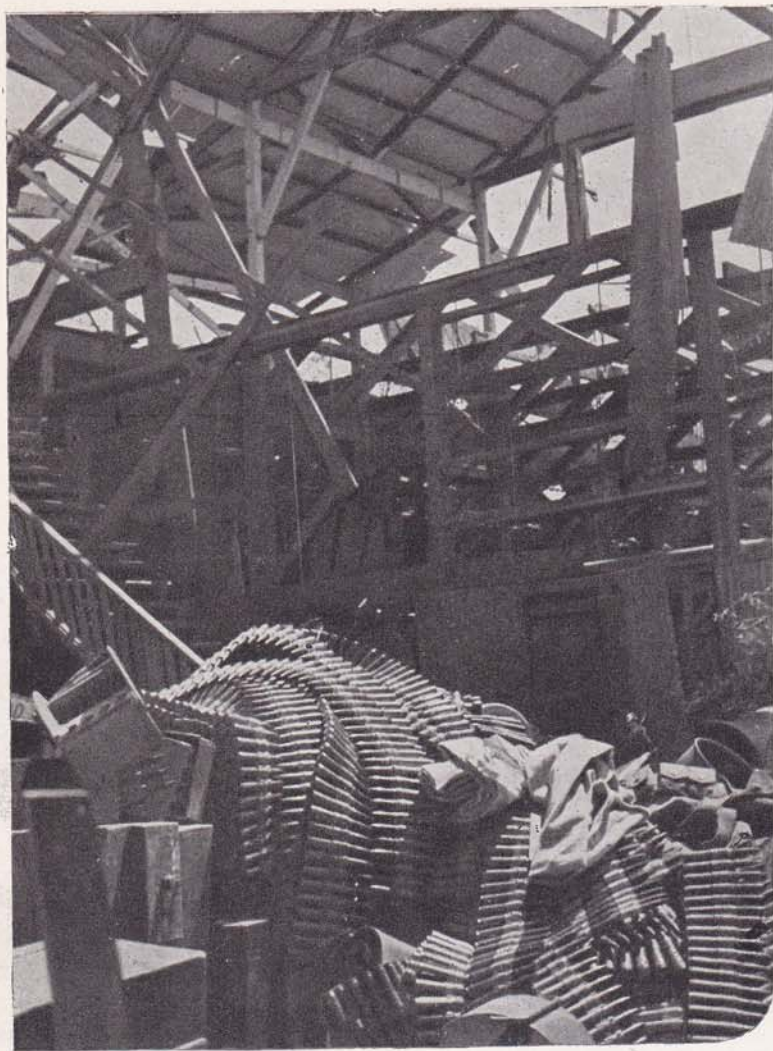


戦は終わった

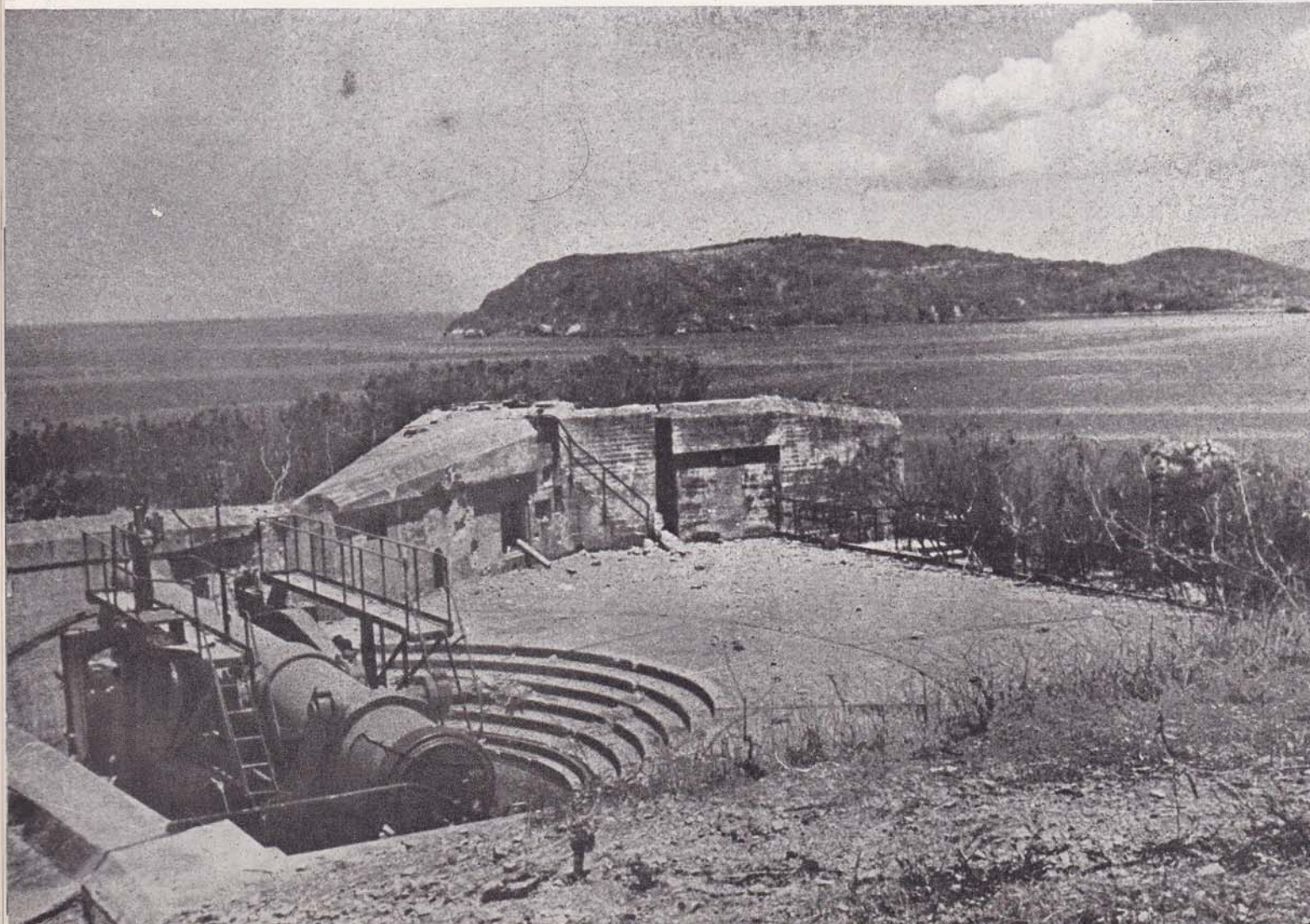
治安は回復して、農民たちは生業にいそしんでゐる。米は比島人の主食物である。稲作は東亞の諸民族を結ぶ紐帯である。蓬萊米の移植はみごとくに成功して、日本の農業に増産の凱歌はあがつた。新比島の建設は、農業立國の旗幟のもとに、雄々しく進んでゐる。働く者の悦びと力、建康と平和！

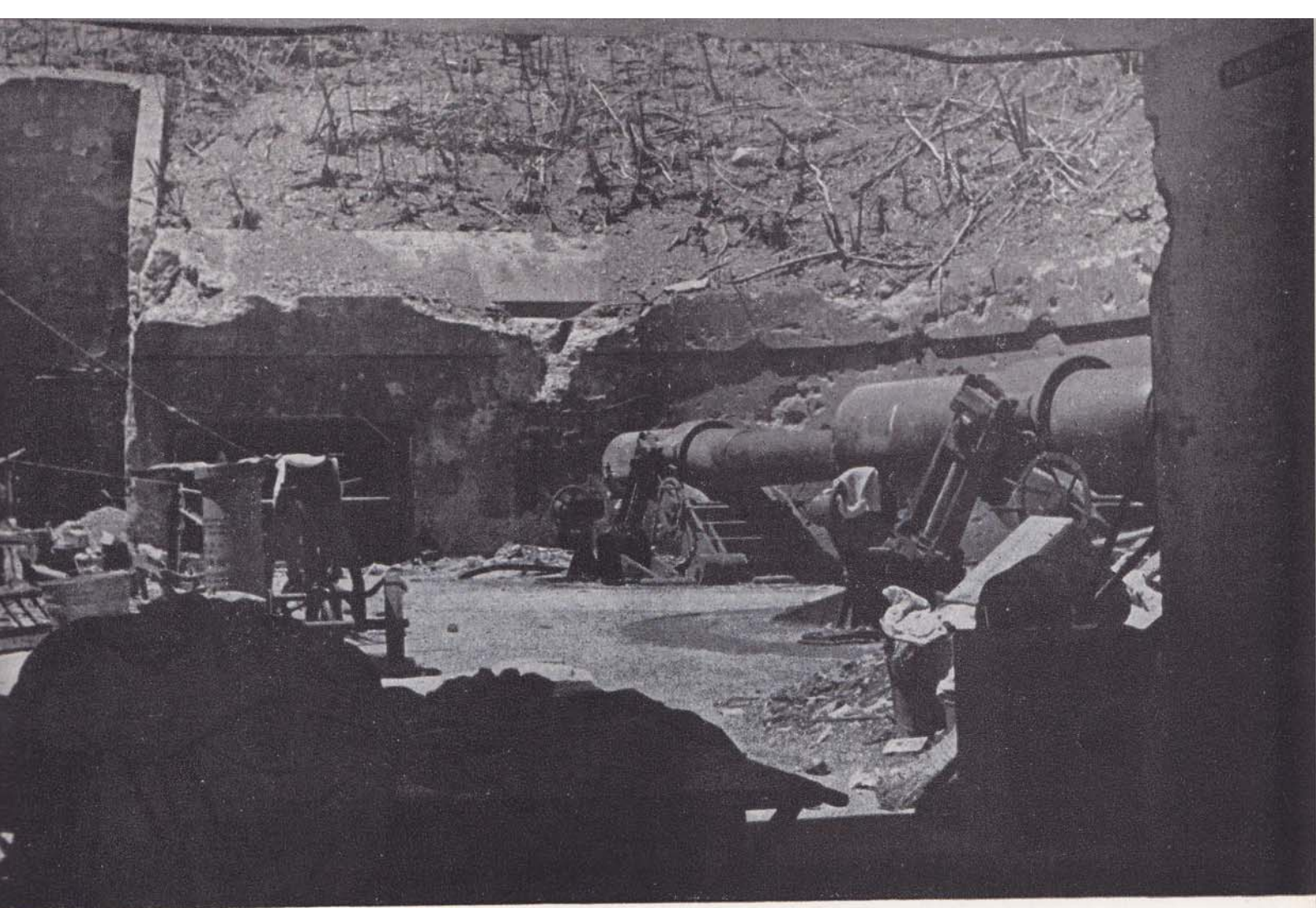


音楽好きの島民は田植にもギターやアコーディオンの伴奏をつけて田植の歌を歌ひつつ働く



砲
死
ん
で
島
の
空
ゆ
く
夏
の
雲





左 カベレオ島よりコレヒドールを望む

上、下 カベレオ島砲台と地下道入口



カバレオ島

なして死ぬべし

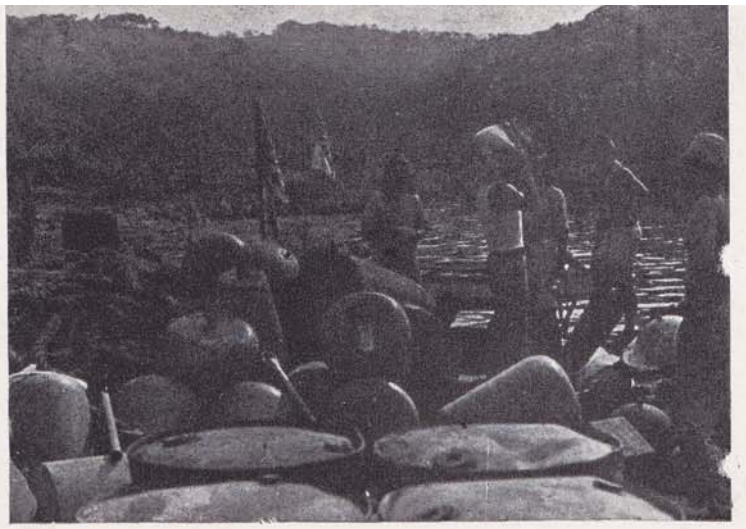
われはわが生命ささげて悔ゆるなき國に生れきてさい
はひこそ

さやけさや兵隊われは自らを厳しさに堪へて今日も經
にける

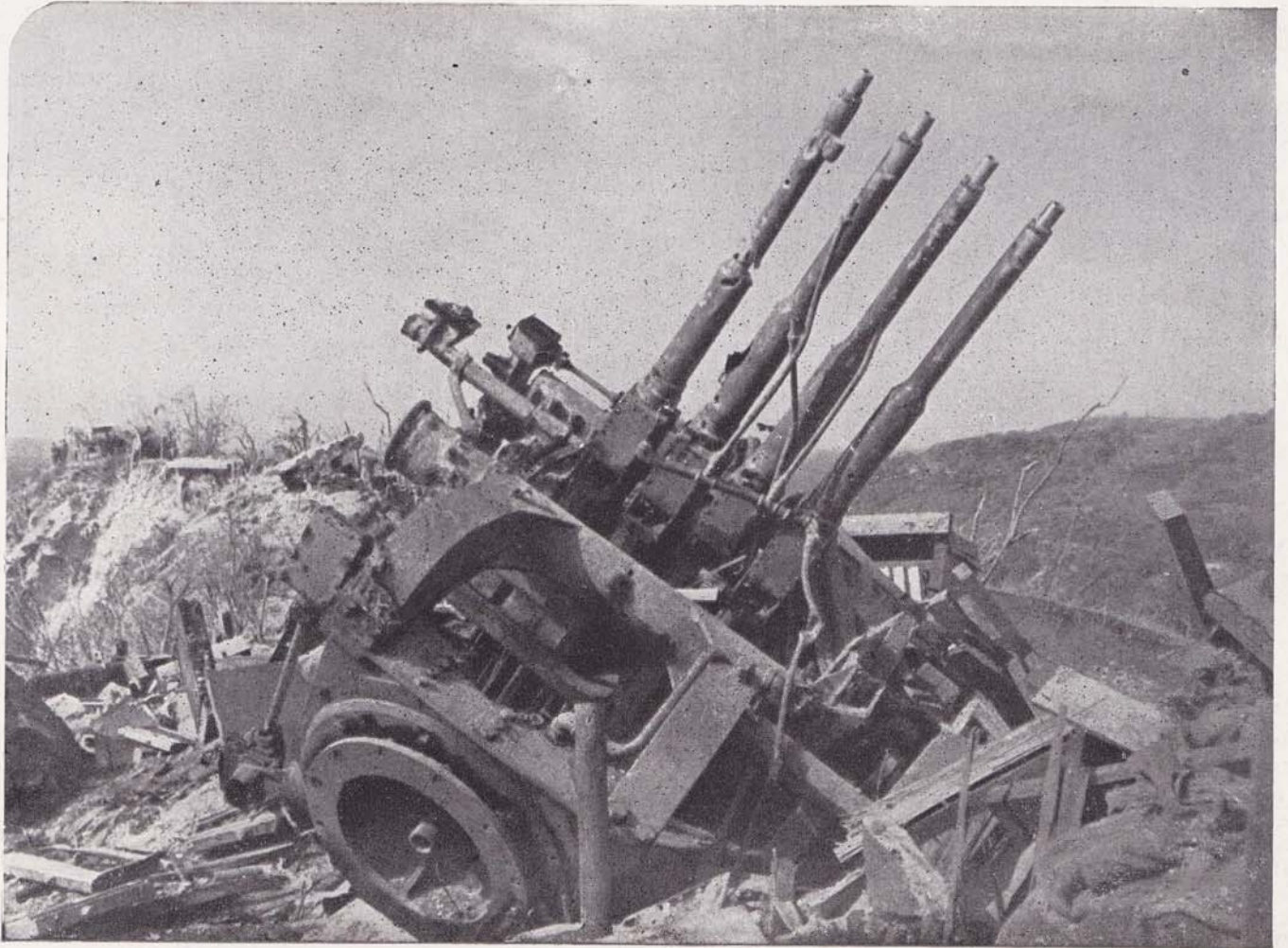
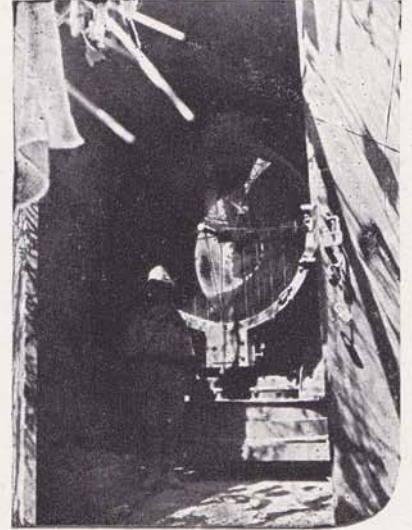
今しこの海のはたてに波る月のさやけさぞわが生命な
るべし



コレヒトールからカバレオ島を望見



鐵の殘骸コレヒドールにも皇
軍の手により新しい生命が吹
き始める。

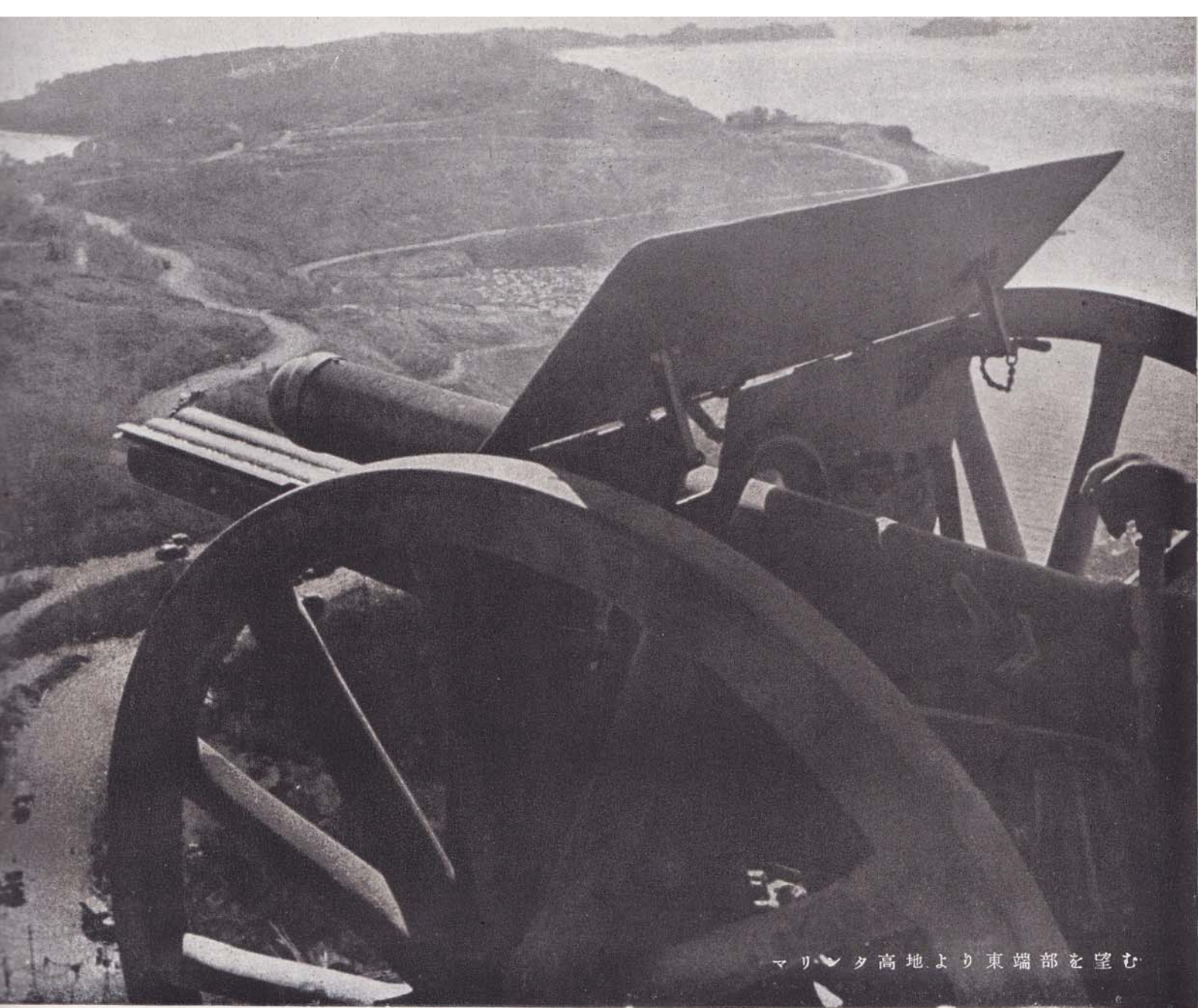




上はテニスコート 下は貯水池

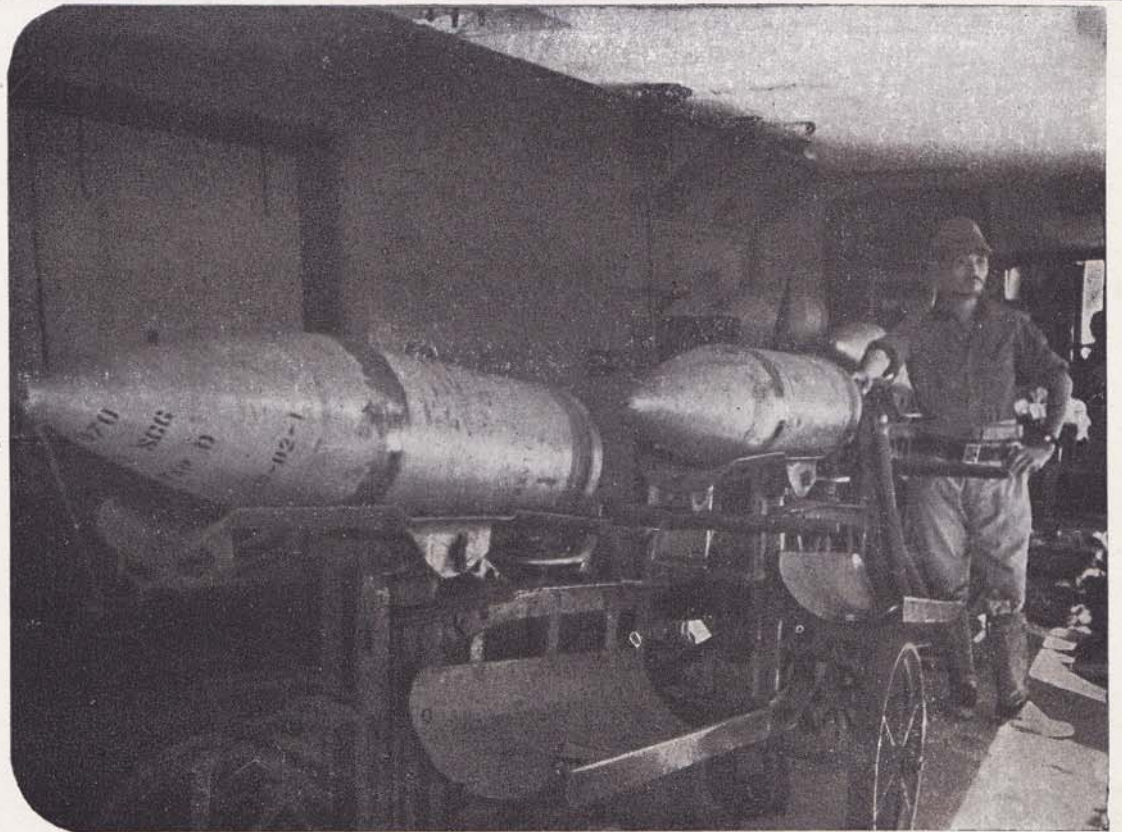


常の世にあらず静けき夏の島



マリタ高地より東端部を望む

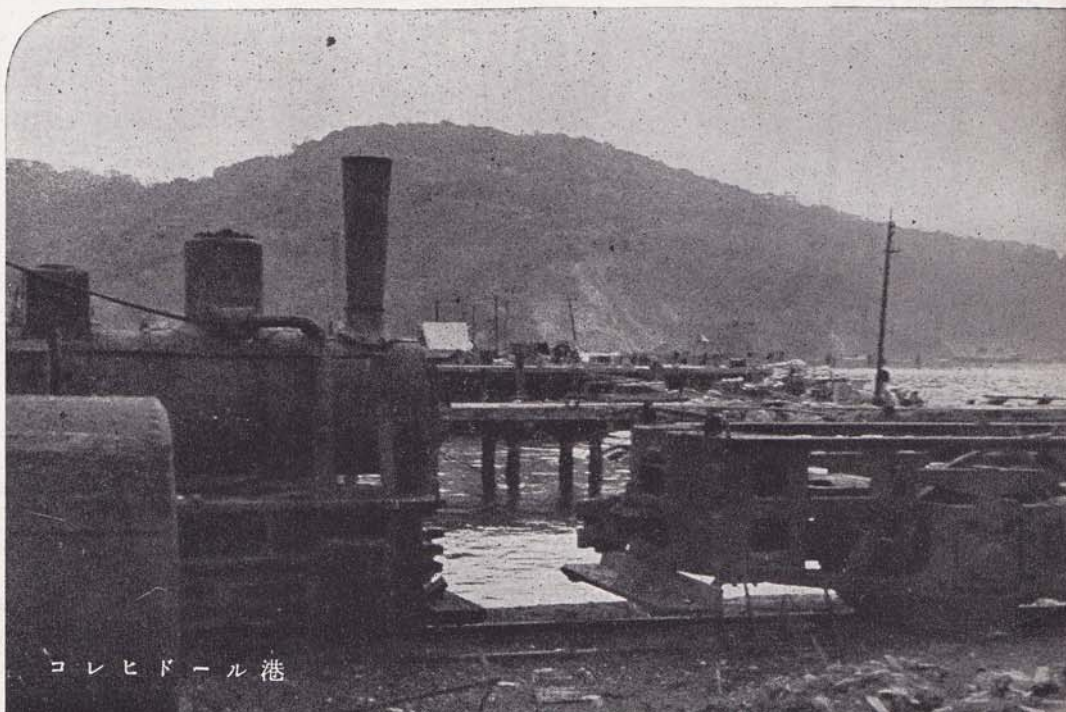
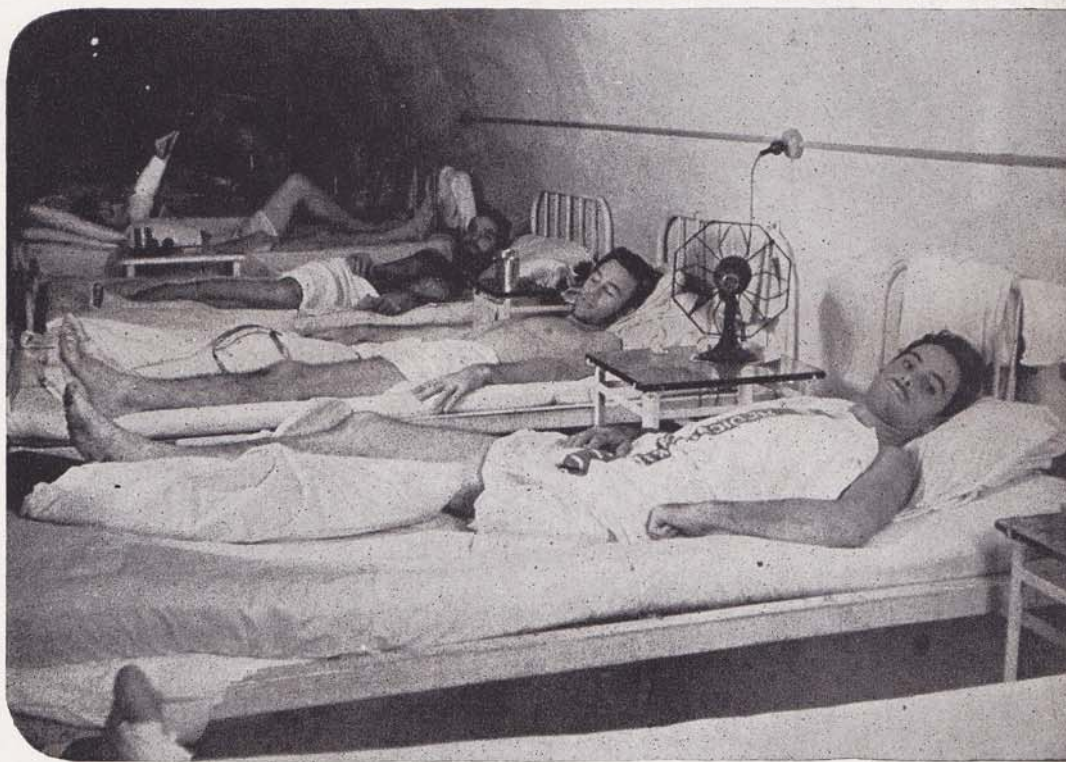
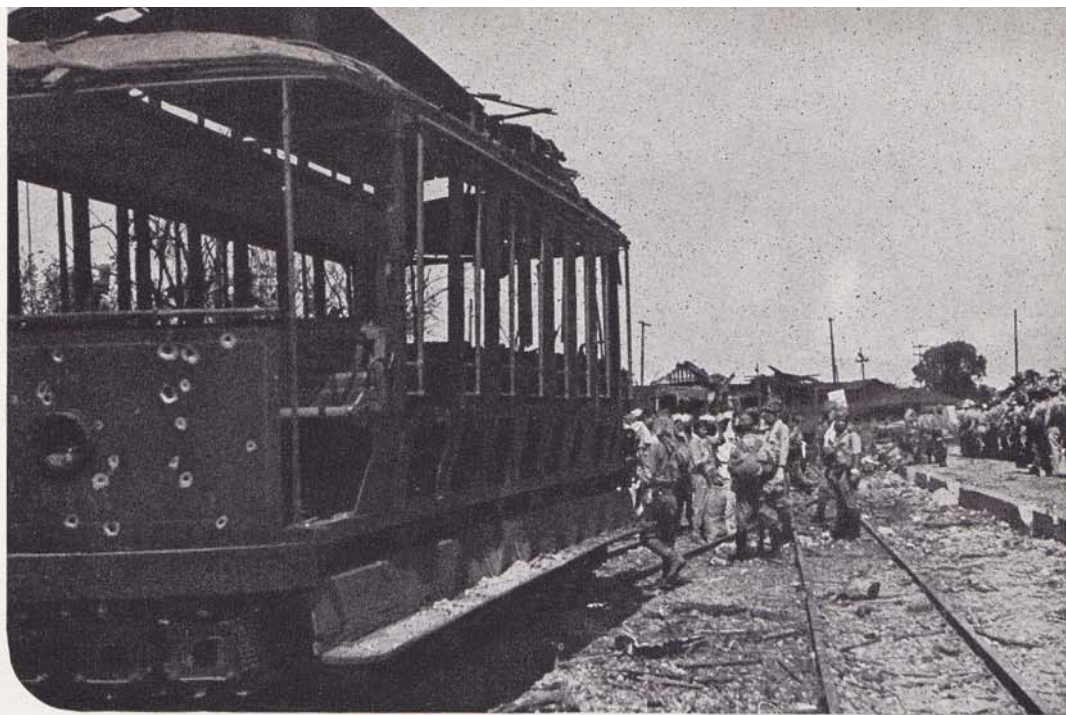
悠
久
の
す
が
た
に
重
し
夏
の
雲





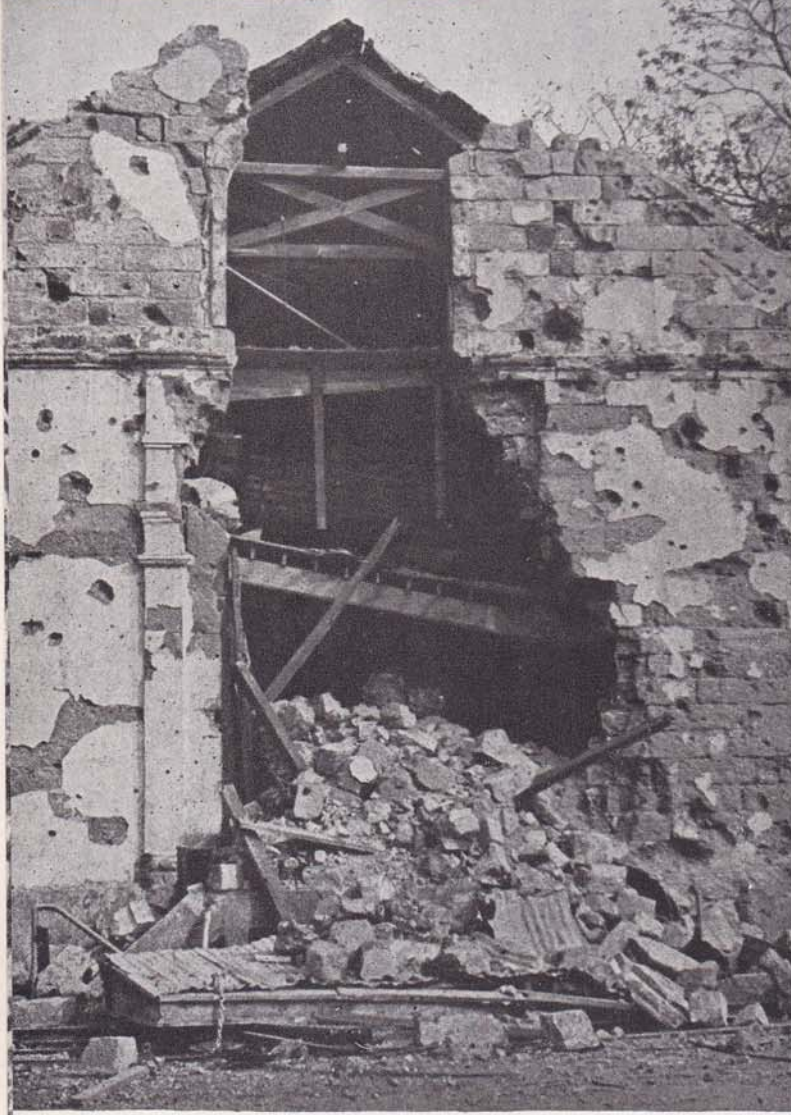


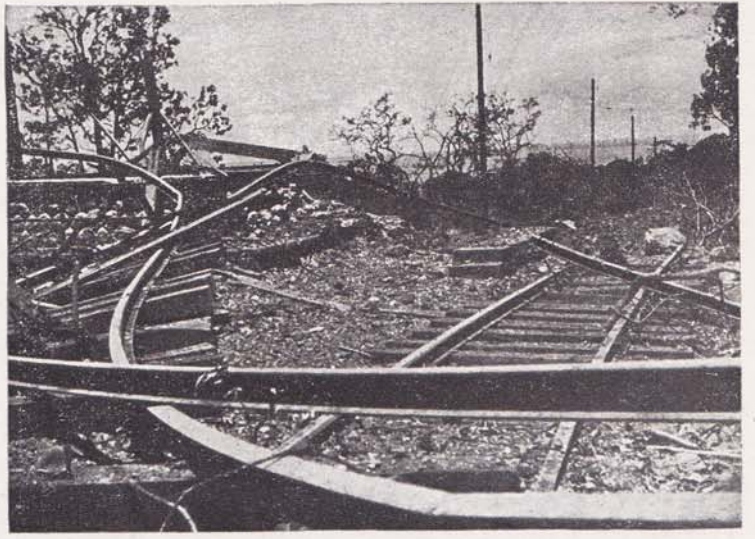
敗戦に負傷の日をくるあつさかな



コレヒドール港

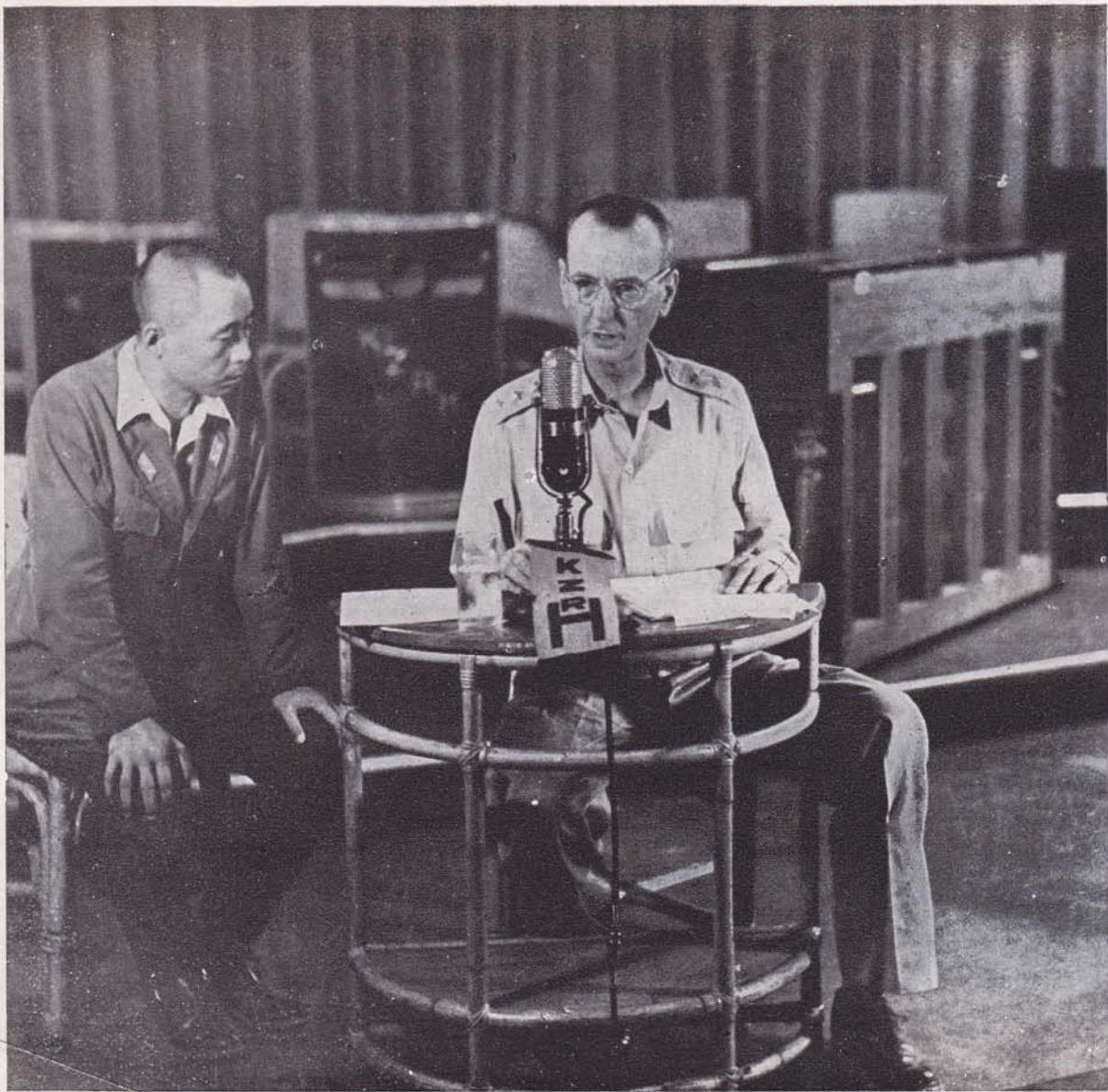
撃をもつてした。われわれ
の鐵槌はおろされた。その
鐵槌の偉力の前には彼等の
何者もなかつた。彼等は自
己の無力に氣づく前にわれ
われの實力に驚異の眼を睜
つた。然しそのときはすで
におそかつた……



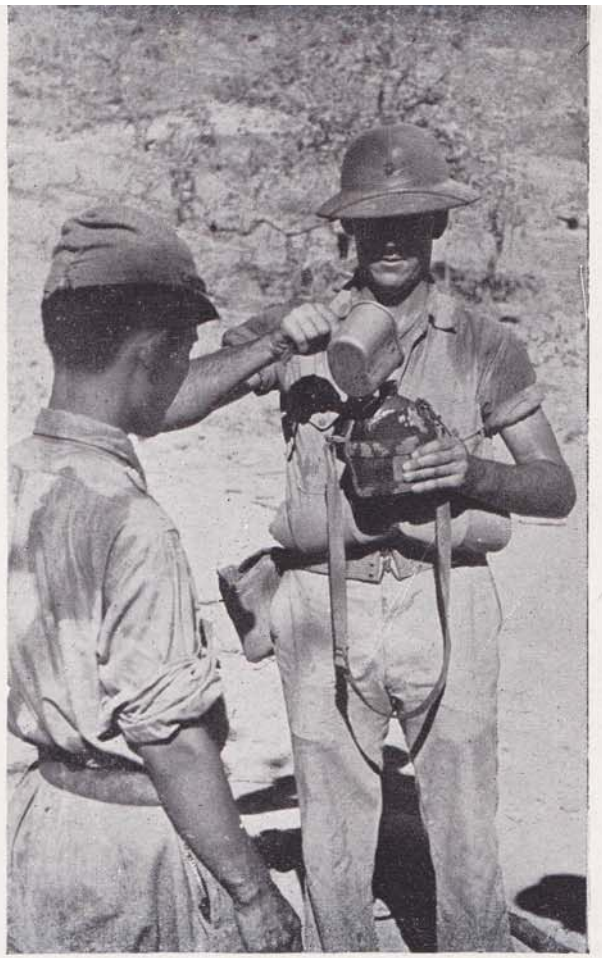


われわれはボタンにあつ
たところから不落を誇る要塞
にたてこもる敵に無益の抗
争をやめよと忠告した。そ
の忠告を受けいれぬ場合の
彼等の迎らねばならぬ運命
についても多く言葉を費
した。彼等はわれわれに答



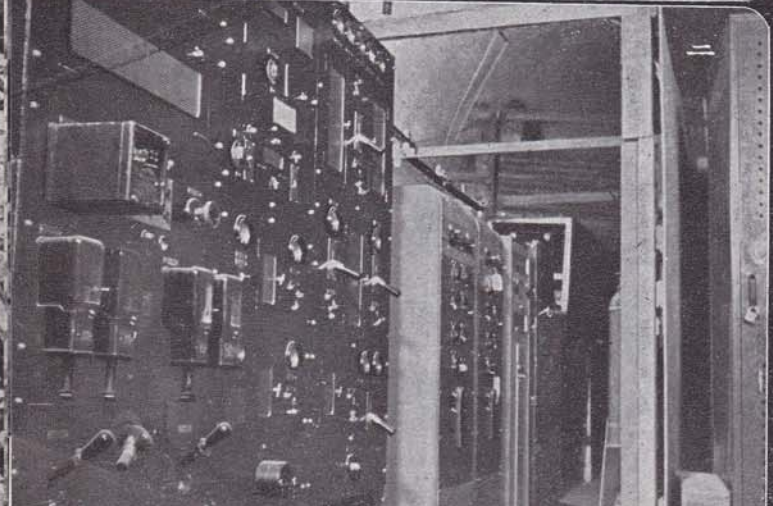
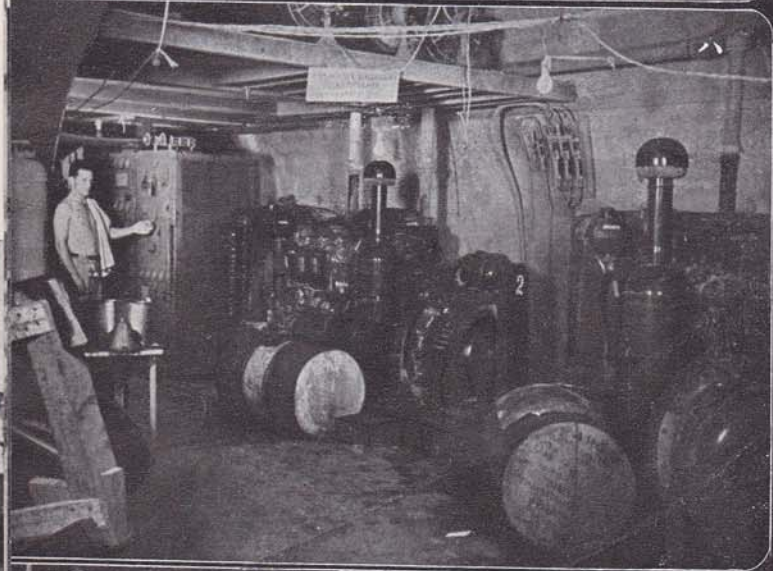
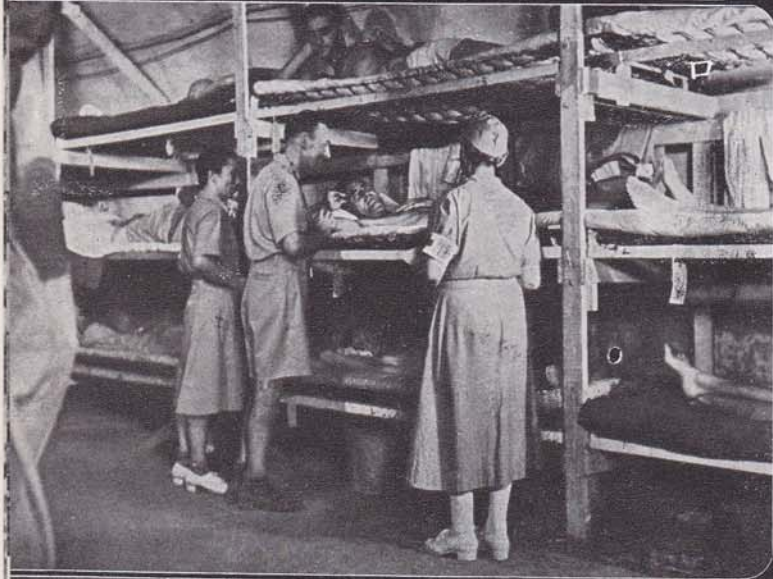


右、地道ウエンライト居室
左、敗將ウエンライト心境を語る



余は余にあたへられたる権限により、ミンダナオ及びビサヤ地区米比軍司令官、ウイリアム・シャープ將軍にたいし、ただちに部下に命じ降服するやう命令する。余は昨六日、大日本軍司令官、本間中将閣下にたいし、降服を申出でたが、貴下指揮下の全軍隊降服を含まざるにおいては、承認しがたしとて拒絶されたり。さはれ人道的見地より、抗戦するの無益なるをさとり、ここに降服を決心せり。米比軍は、ただちに武装を解除し、以て……





あかるみにさらげだされし怪島の正體はかなし。あはれをとどめてむらがる捕虜の風情にさらかなしと云ふべし。彼等が近代科學の粹をほこり、東洋の一角にきづきし城砦なればこそ。彼等いま、何を考へ、何を眼瞼に描いてゐるか。おそらくはただ來るべき日を知らず、その日を迎へた感慨に、東洋の息吹きを感じたにちがひない。東洋をしらず、東洋をおかせしもの、それこそ東洋の敵である。その敵の他愛なき姿よ、

右、地下道入口で使役に使はれてゐる俘虜

イ、一地下食堂

ロ、一地下病室

ハ、一地下モーター室

ニ、一地下無電室





コレヒドールを過ぎて艦隊入港

水上飛行場に收容された俘虜の大群





捕虜もまた陽をさけて島の夏盛る





砲台



我が砲爆撃に根こそぎとなつた樹木





大君のしこのみたてぞ今こそは勇みたつ身の真心の赤きをそふる山櫻紅濃き錦葉の散り敷く宮の内外なる鹿の鳴くねも神さびしやま
みいづをばひろくたたへて四方の海おほわたつみのわたつみのそのはてまでもうちなびくあまねくおほきみいつをばいまだ知るらめ





としまねぞ後にして八重のしほじを波まくらいくたび重ねわたりゆくとつくにびともあだびともふしなびけるおほいくさ榮ゆるみ代のおほきみのたてかがやく旗風ぞいま高くなるらんみいつのひかりかがやきまさる。





星條旗をおろす



五月五日は男の日。夕暮るるマニラ灣の静けさよ。色増す闇の立ちこめて
闇にまぎれて舟艇の出づれば、銃聲叫び砲聲唸る。さはれいくばくもなく、
夜はあけ、島空にはためきをりし星條旗に、代りてたてる日章旗のうるはし
さよ。まさにこれアメリカン東洋に壊滅せる日……

捕虜









兵 舍 前 廣 場



兵隊はよきかな。その姿、その心さらにうるはし。美し。國をおもうてこの日、凱歌あり。そはこれ永遠の凱歌。海ゆかば水つくかばね、山ゆかば、吾むすかばね、決意ぞかたく……いま「火の花消えし島空をわたりゆく風のたかく光りて見ゆるを……」



上陸地點



上 陸

旗 章 の 日 點 地 陸 上 や 風 薰



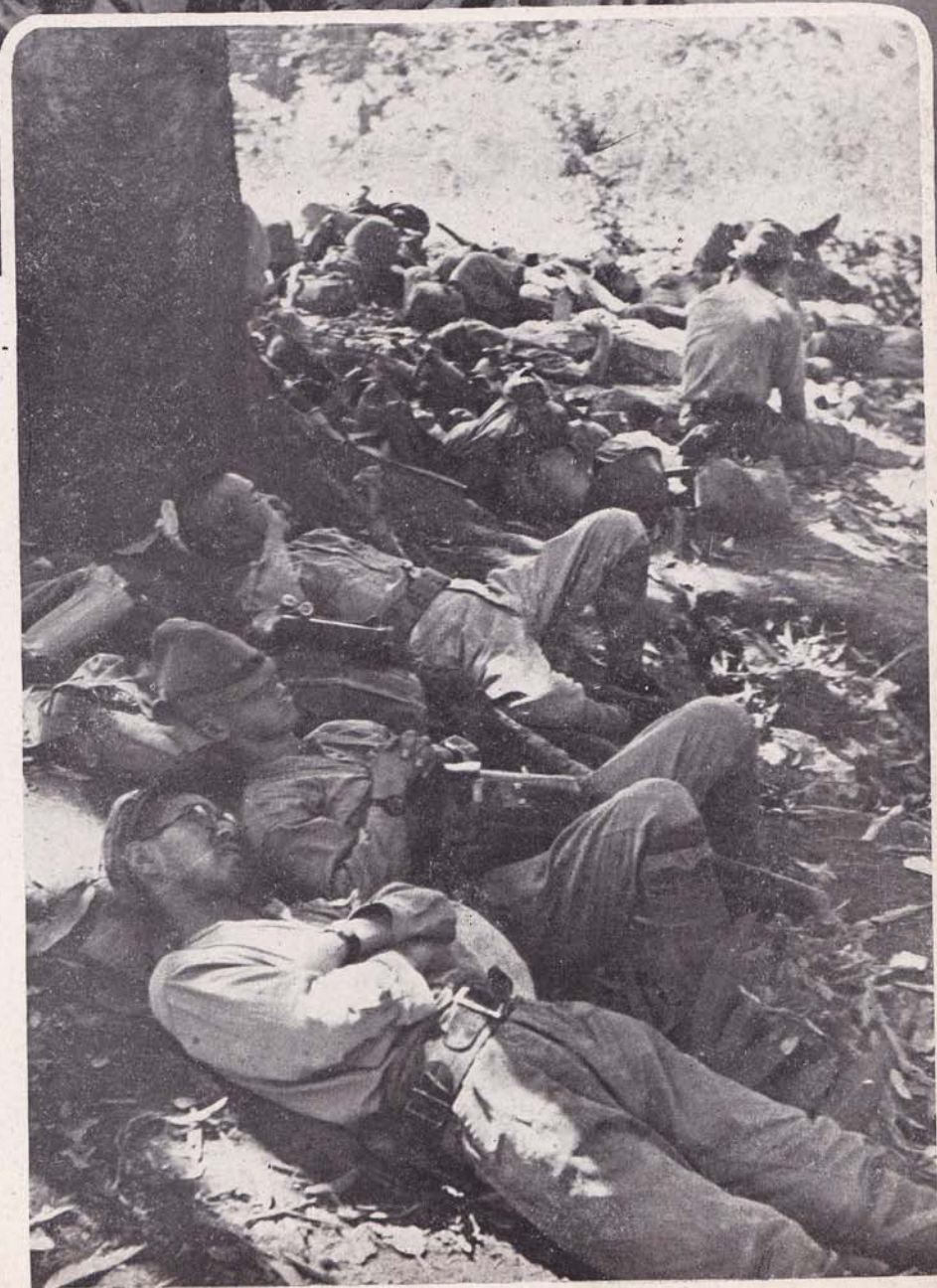


我が砲撃により炎上するコレヒドール









明日の光をおもふ兵隊の心に夢は結ばれる。歴史をつくる次の瞬間にいささかの懸念もなきが如くに、その夢の美しさは、まことに切切と、静謐に、祖國の運命の上にかがやかし、まさにそが永久の光榮を約束し

てゐる。そして更に、その従容たる姿こそ、まがふかたなくわれわれ自身身の姿であり、波荒き東海に起ちあがり、新しき世界史の創造に、黙々となすべきことをなしつつある祖國の姿でもある。

モリソン岬

コレドール湾

6B4:00

6B23:41

6B6:00

6B24:00

6B7:00

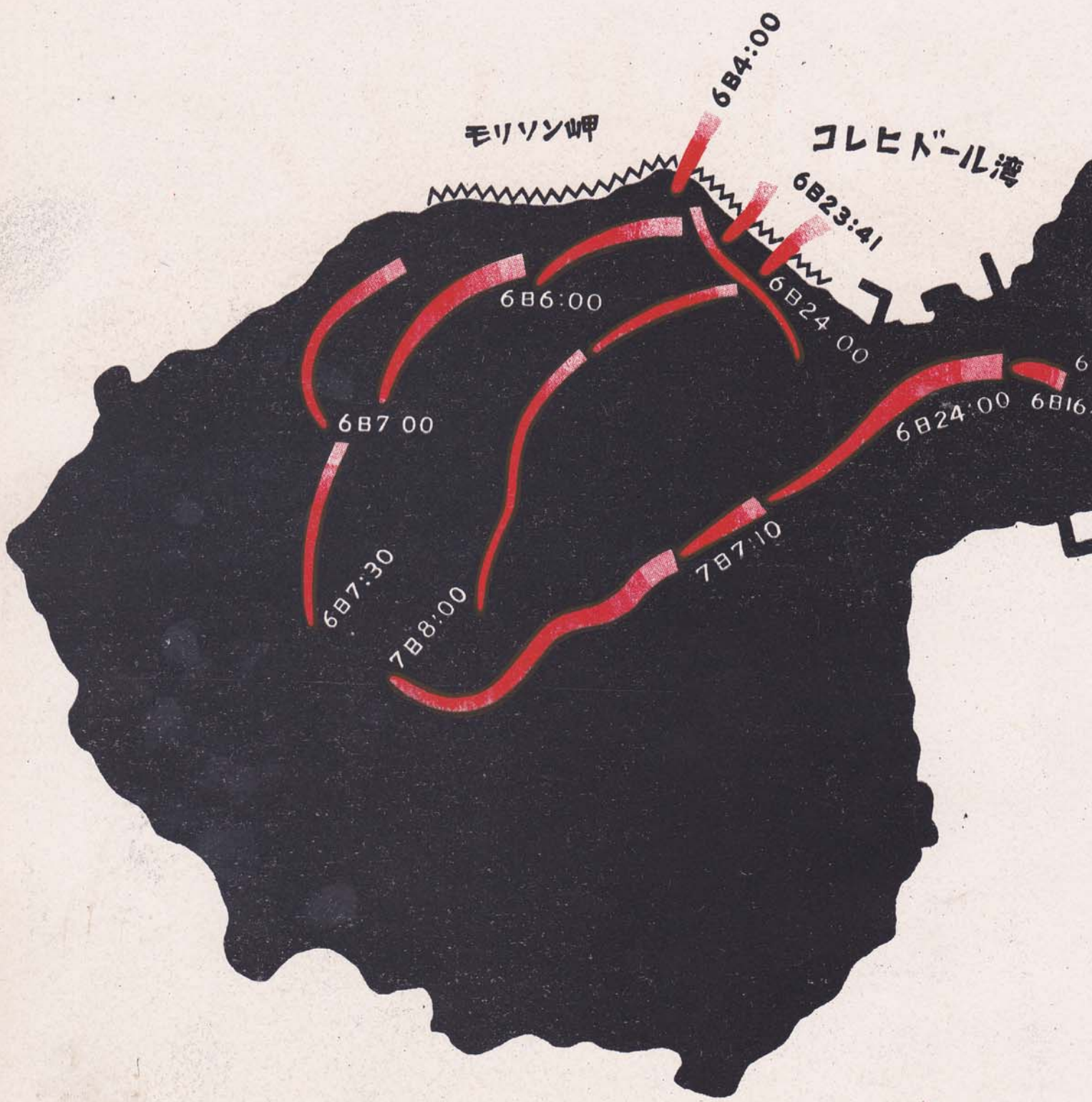
6B24:00

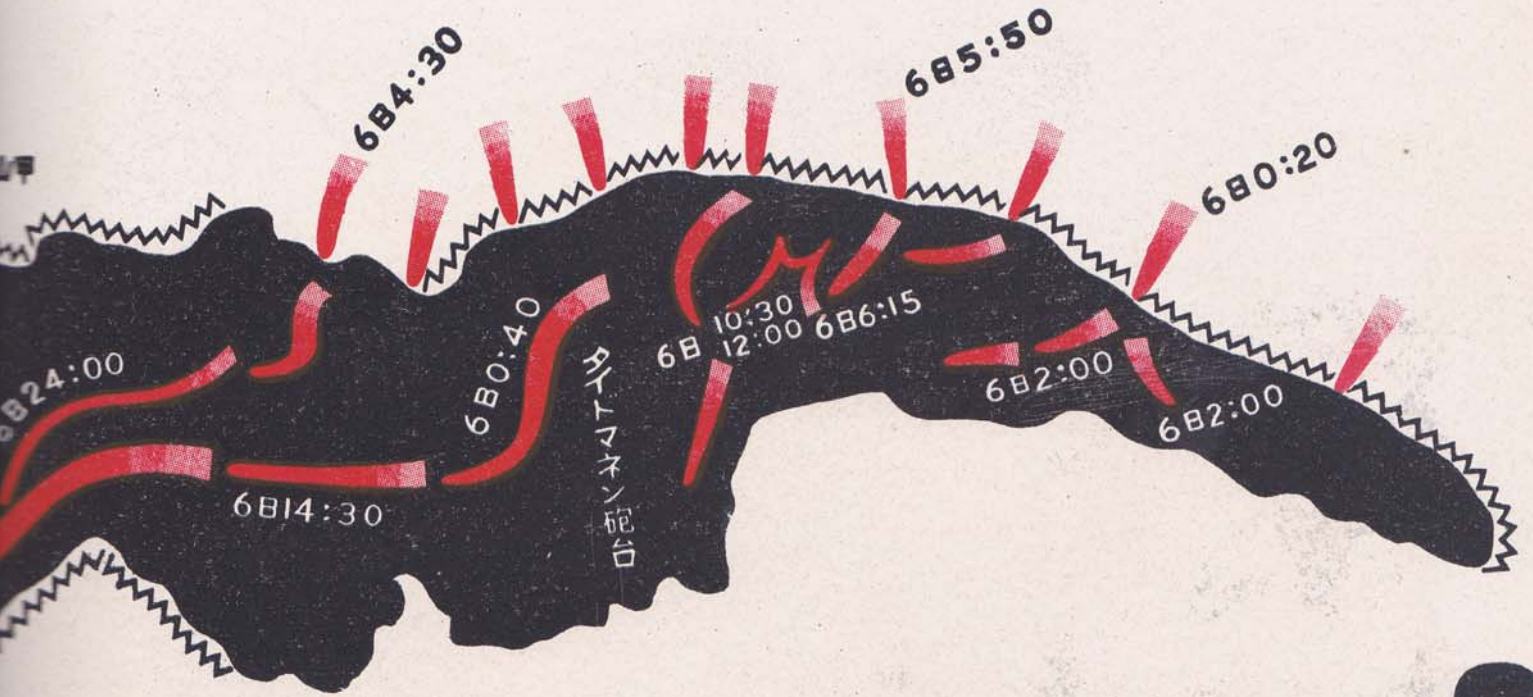
6B16

6B7:30

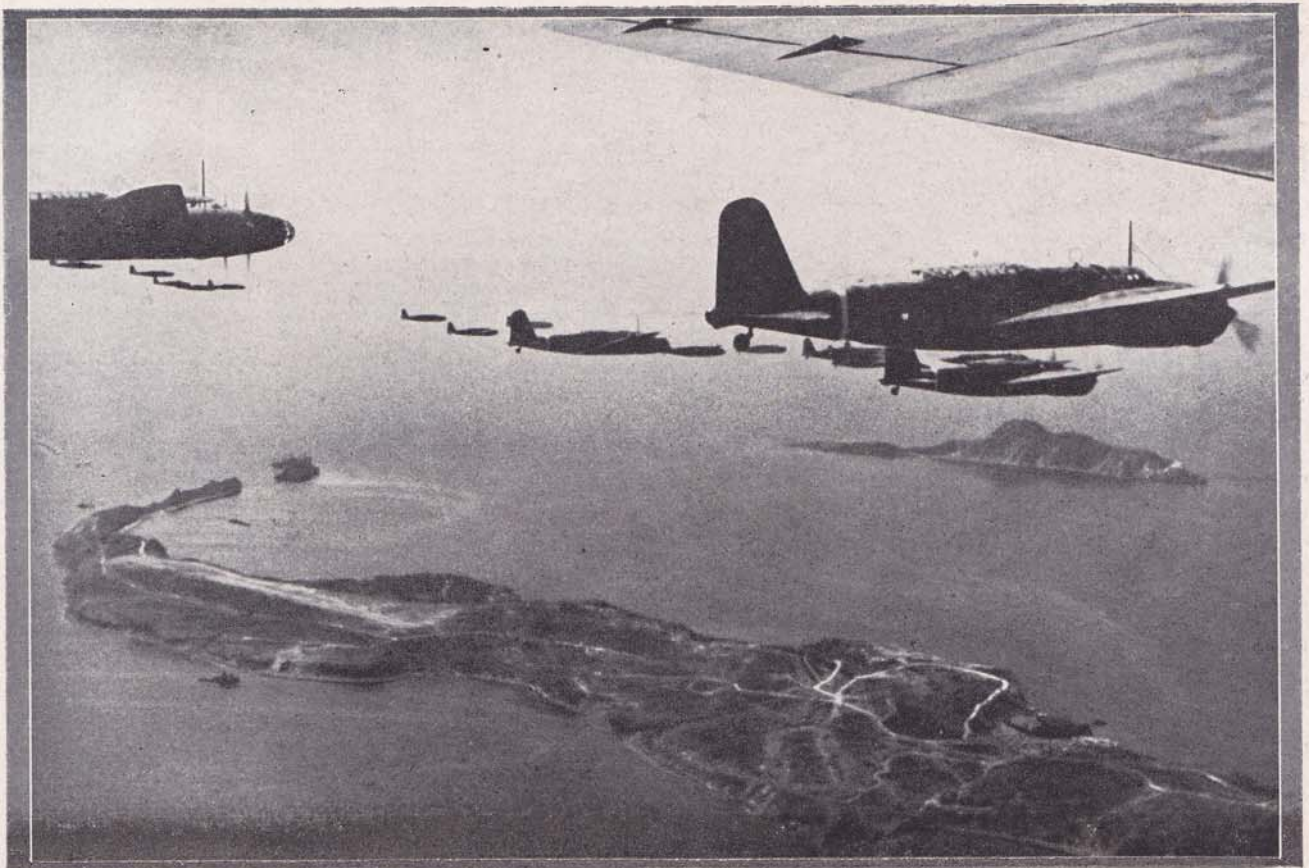
7B8:00

7B7:10





コレヒドール作戦圖



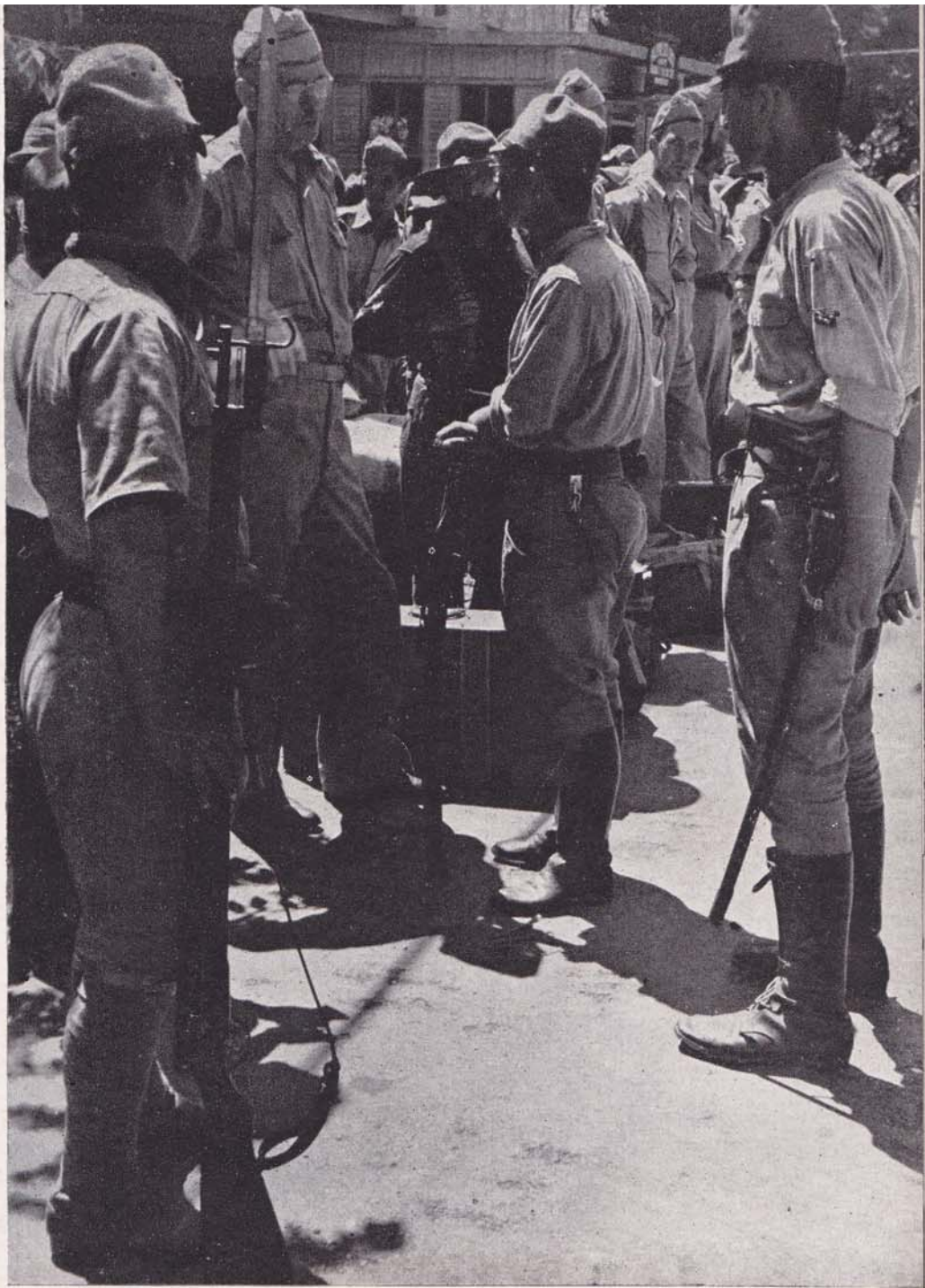


戦時中、オーストラリアのビーチに打ち上げられた壊れた車の残骸



戦時中、オーストラリアのビーチに打ち上げられた壊れた車の残骸

ミンダナオ全島既定作戦は五月八日ブキドノン高原の大砲撃戦をもつて終熄した。同夜月光に濡れた廣漠たる敵陣に向つて、コレヒドール司令官ウエンライト中將の投降勧告の全文が彼の参謀〇〇中佐によつて携へられ、わが宣傳班の擴声器から放送されたのである。翌五月九日ミンダナオ司令官シャープ少將は白旗をかかげてマルコのわが陣門に降つた。以來敵の本據たるマライバライをはじめとして各要衝の米比軍は武器を打ち棄て大舉して投降し來つた。皇軍はこれが收容に大量の活動を續けた。



武装解除により鹵獲せる兵器



投降する敵兵の捕縛



兵隊

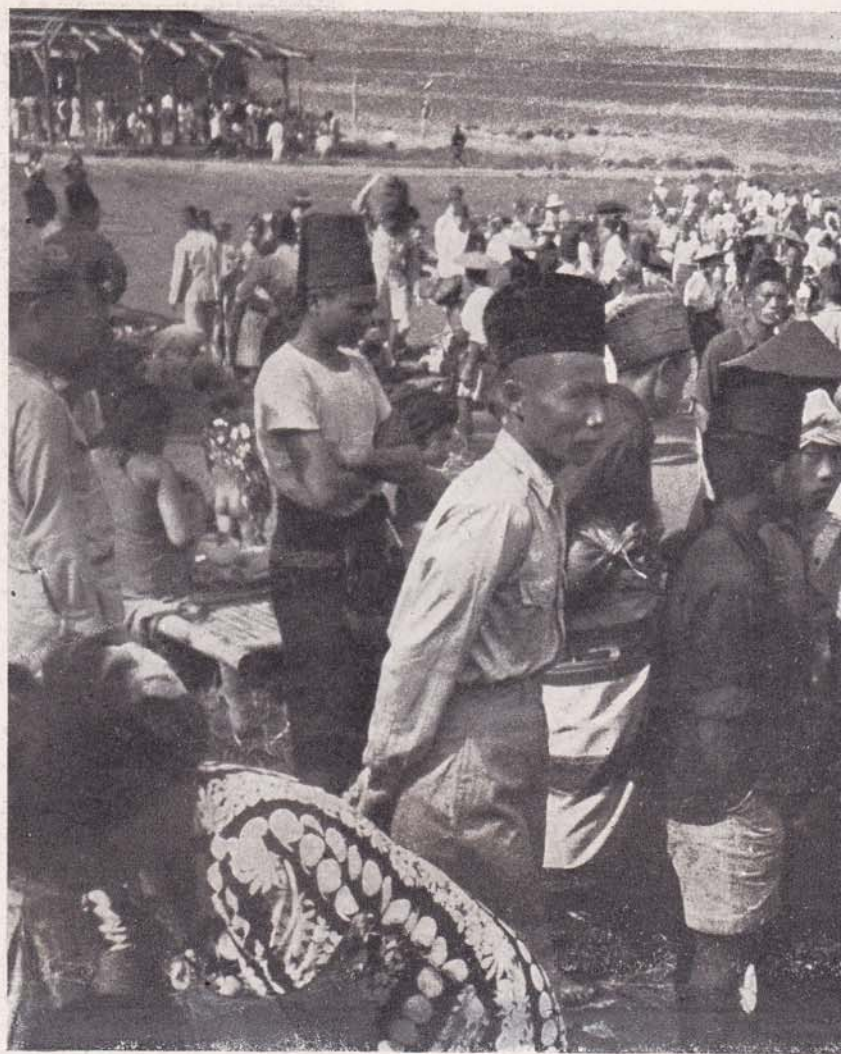
下

破壊橋梁に迂廻路開設中の工

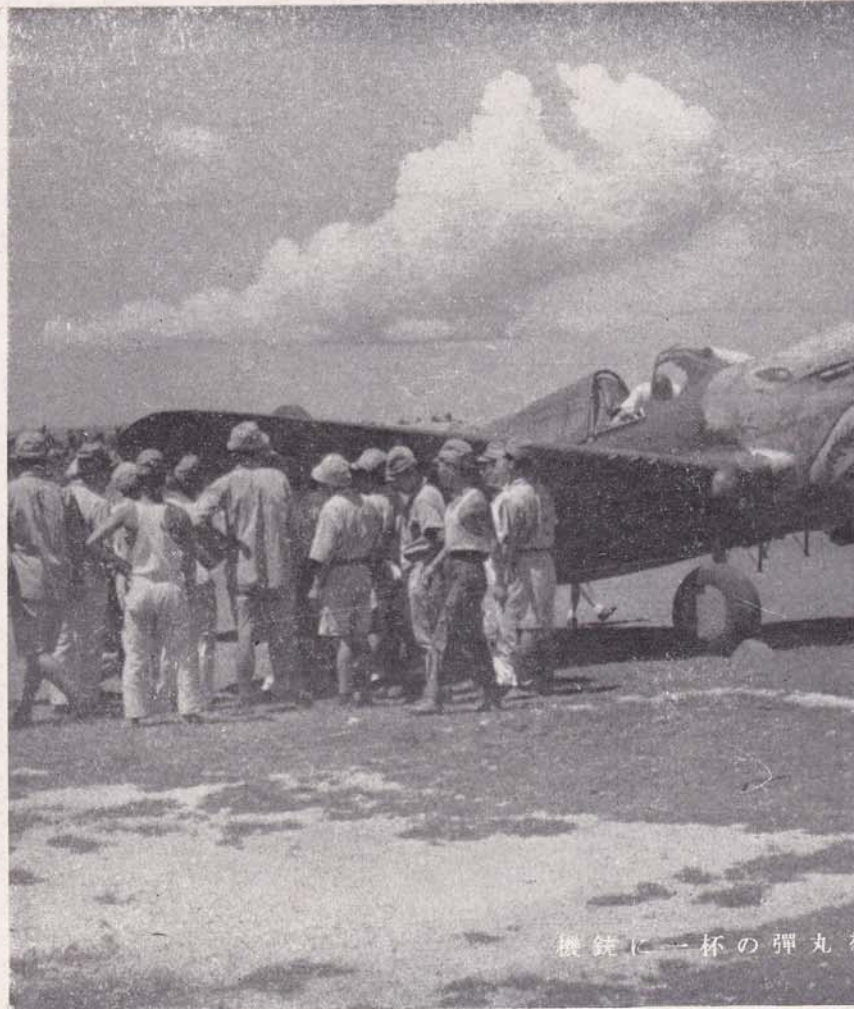
上

込の比軍軍使

於コタバト基點全面的降伏申

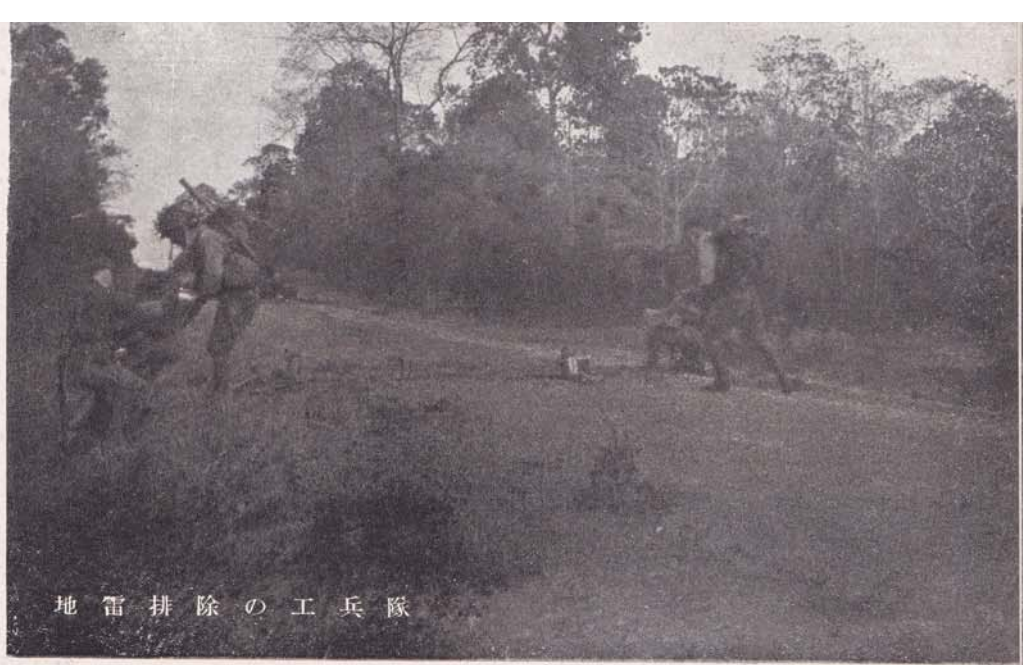


モロの市場



機銃に一杯の弾丸





地雷排除の工兵隊



バタダ河を渡る

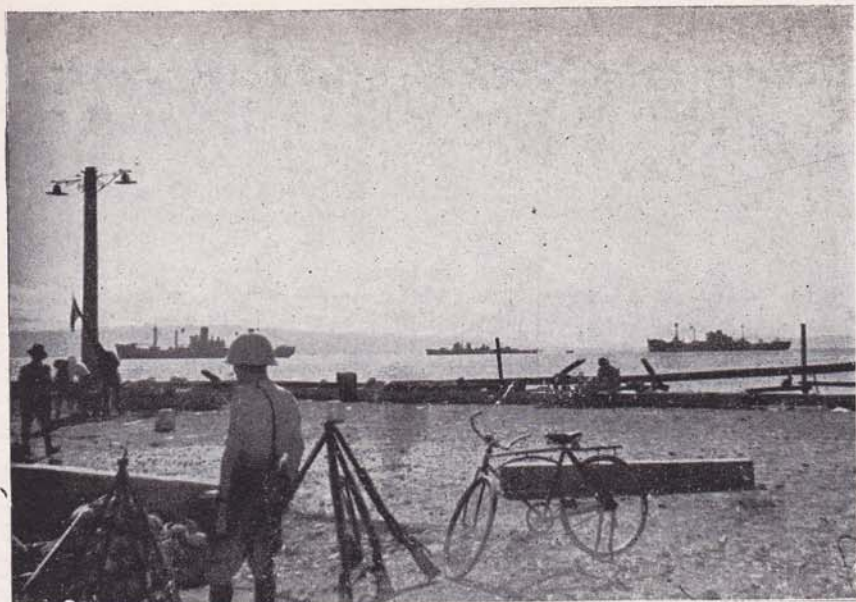


空から降服してきた米機



於デイゴス西方

追撃



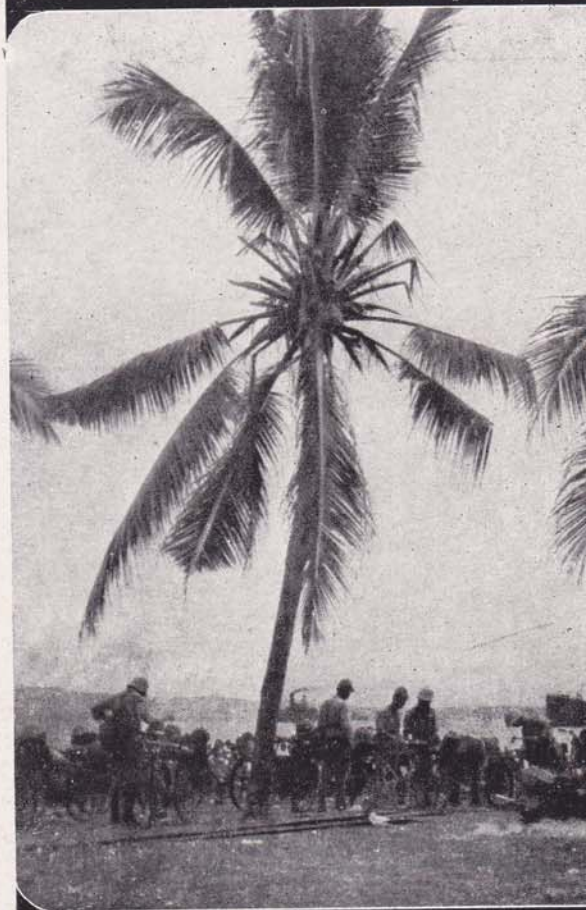
ダバオサンターナ埠頭上陸



上下、敵前上陸地点サフ海岸



ダバオサ



敵前上陸地点ダバ



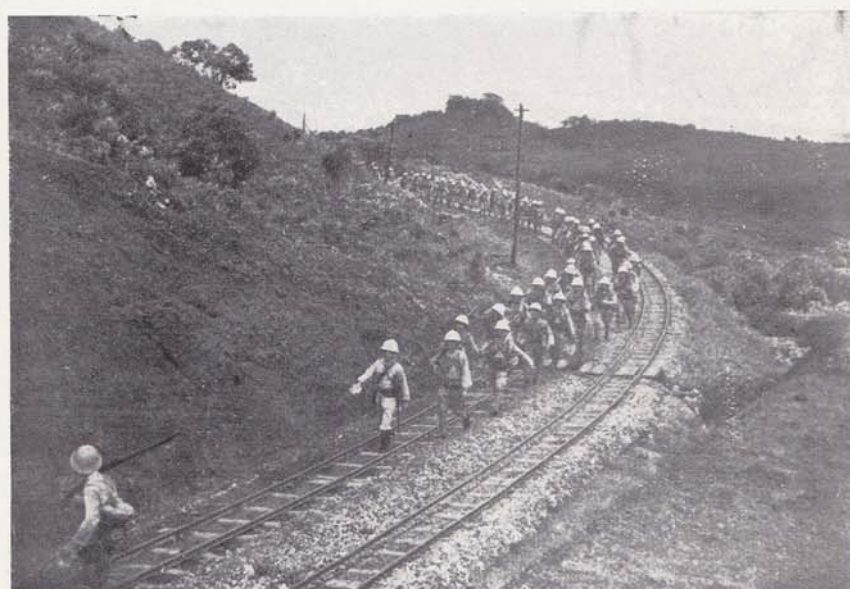
上炎ナター



オンアリアダ海岸モタ

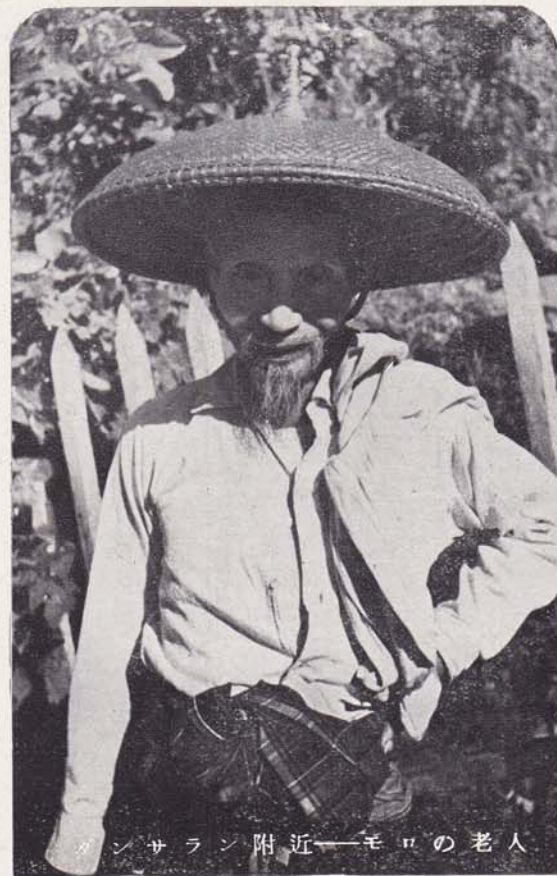


船團の集結中マオガラス島オパラ



族ボコバを歓迎して装盛





ダンサラン附近—モロの老人

左上、中 ジャングルの中ではこんな浅い河が何よりの道

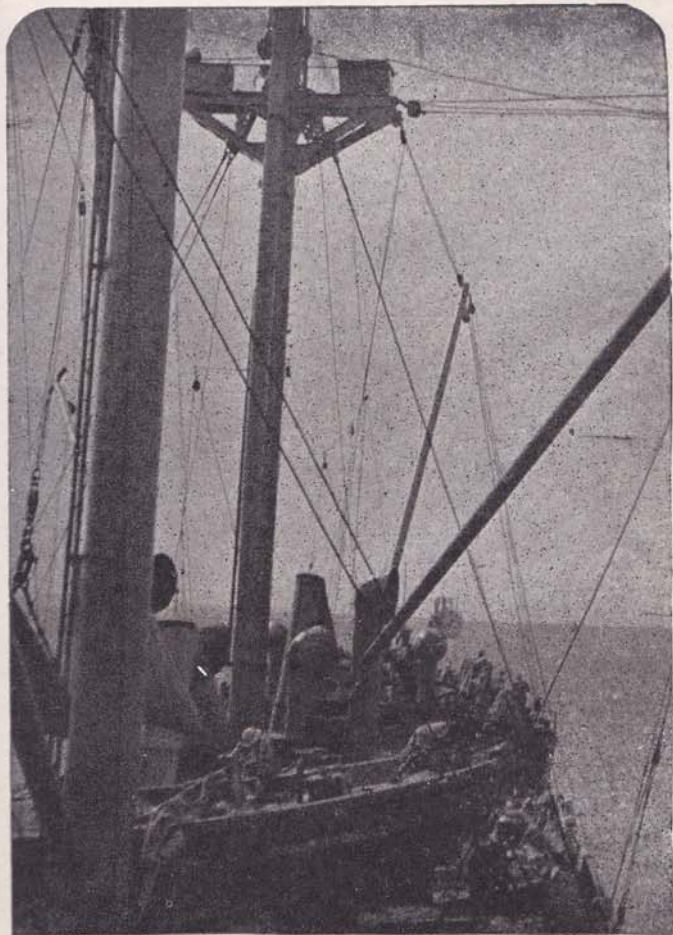
左下 ダンサラン市で米軍は橋を破壊し街をやき去り住民は米軍の宣傳にあやつられ山中に逃げこみ猫の子一匹居なかつたがモロ族だけは平気でその附近を歩いてゐた。

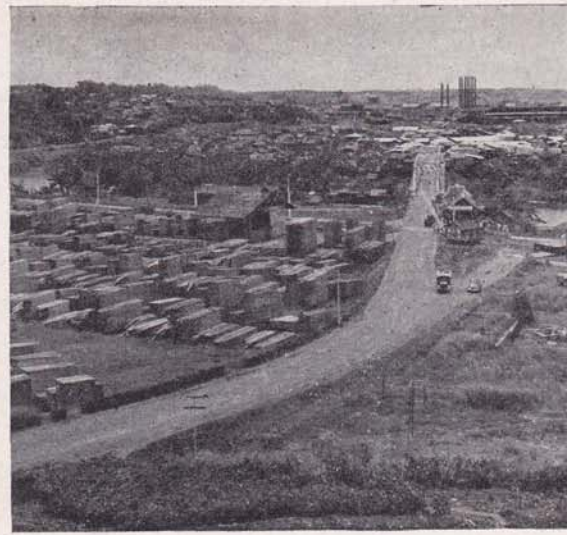
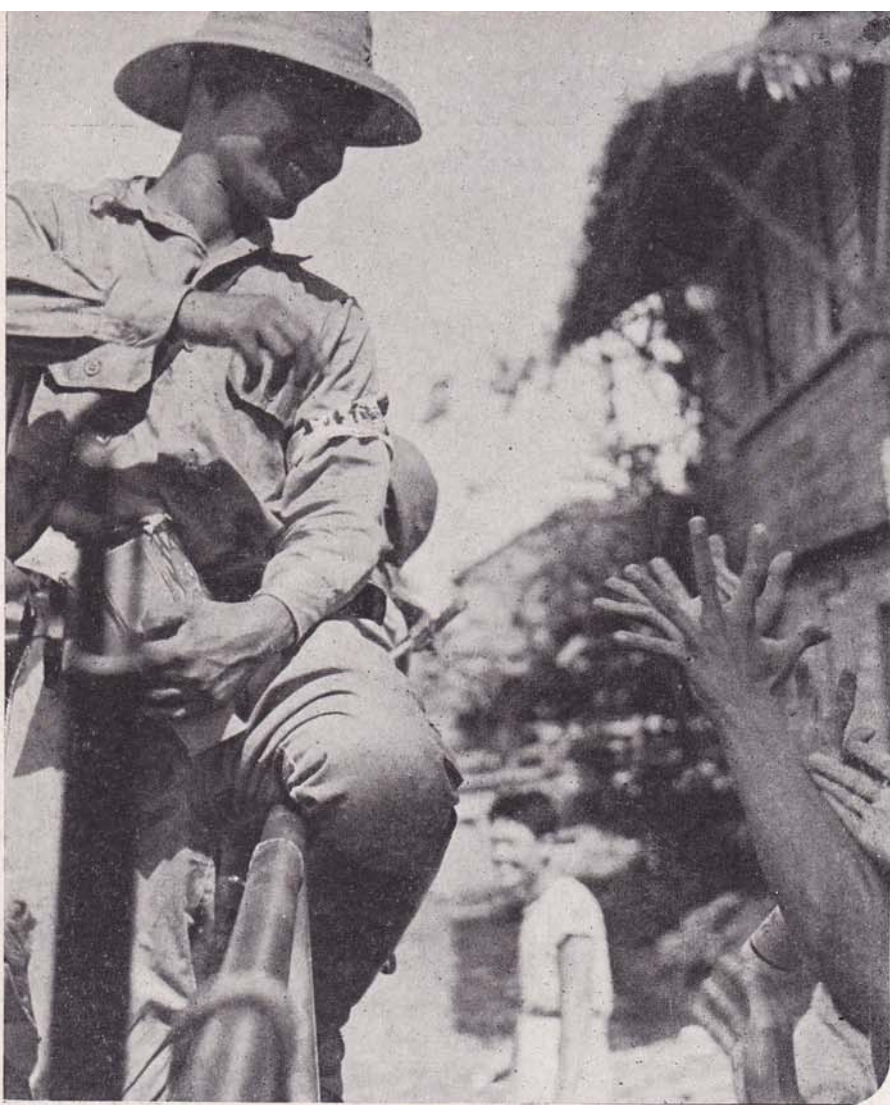


糸巻をするモロの娘

戦 作 オ ナ ダ ミ

四月二十九日未明、セブ攻略を終へて戦塵を拂ふ暇もない〇〇部隊は天長の佳節を卜してミンダオ島のイラナ灣に面するコタバトおよびバランに敵前上陸を敢行した。そして、五月四日午前四時に早くもラナオ湖畔の敵大要衝ダンサランに突入した。バランよりダンサランまでは一二九軒、この間を貫く一本道路は蜿蜒として大密林地帯の山腹を這いつづいてゐるのである。敵は地の利をたのみ頑強なる抵抗を試みた。途中の要衝要衝では縦深一〇軒以内の地域でさへ三線も四線にも互る陣地を構築して卑劣極まる反撃に出た。瞬時の油断もならぬ大密林の中である。断崖あり丘陵あり溪谷ありダイナマイトの敷設された橋梁があつて、敵はあらゆる地形のひだを縫つてひそみ、わが軍の尖兵を將校斥候をかかなりの近くまでひきつけておいて狙撃してくる。かてて加ふるに炎熱と猛蚊と極度の水不足と悪疫とを冒し晝夜兼行、僅か五日たらずにして縦深一二九軒の敵陣地を撃砕突破してダンサランを陥落したことは破竹の勢といふ文字が真に誇張なく形容されるのである。五月三日未明にはイロイロ攻略を終えた〇〇部隊が北部の要衝カガヤンに敵前上陸を敢行、ダンサランおよびダバオ方面から進撃中の諸部隊と相呼應して、ブキドノン高原に蟠居する米比軍の包圍殲滅戦を展開した。





上陸當時 焦土軍律とやらで目抜き市の街に放火してゐた敵も、すっかり影をひそめ最近では店舗も開かれて美しいパコロド市が復活した。若い娘の瞳にも隠する色が見えなくなつた。宣傳班は南北に縦走する幹線や西海岸一帯に沿ふ部落を駆けめぐりて民衆の宣撫に汗だくであつた。さすが

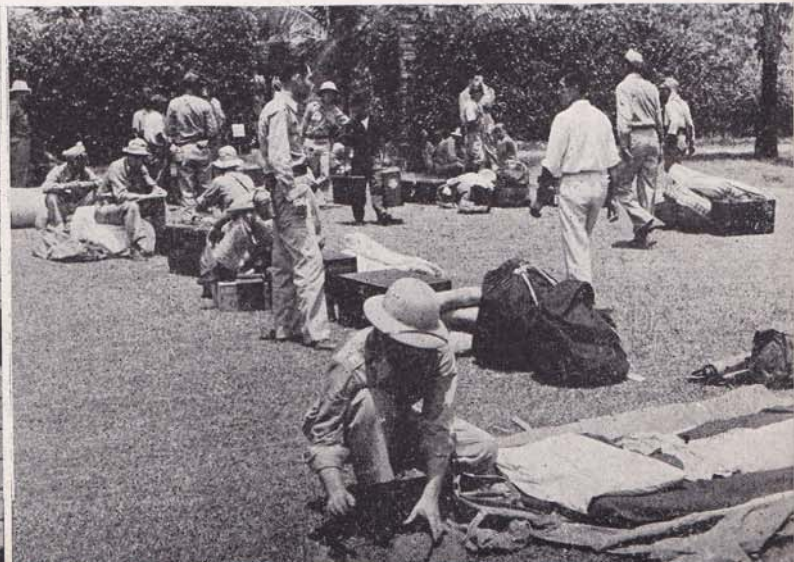
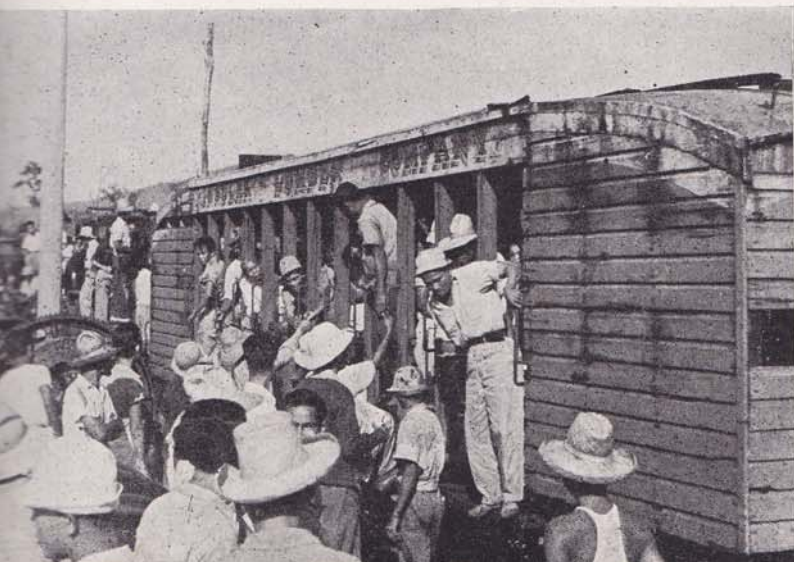


に砂糖の島だけあつて、タリサイ、シライ、マオ、ラカロタ、ビナルガバン、サラビヤ、パラワンその他の各地に澤山の砂糖會社があり、學校も映畫館も病院も發電所もそのほか文化といふべきものすべては砂糖會社を中心として生れてゐるとの感が深い。





米比軍投降者の群

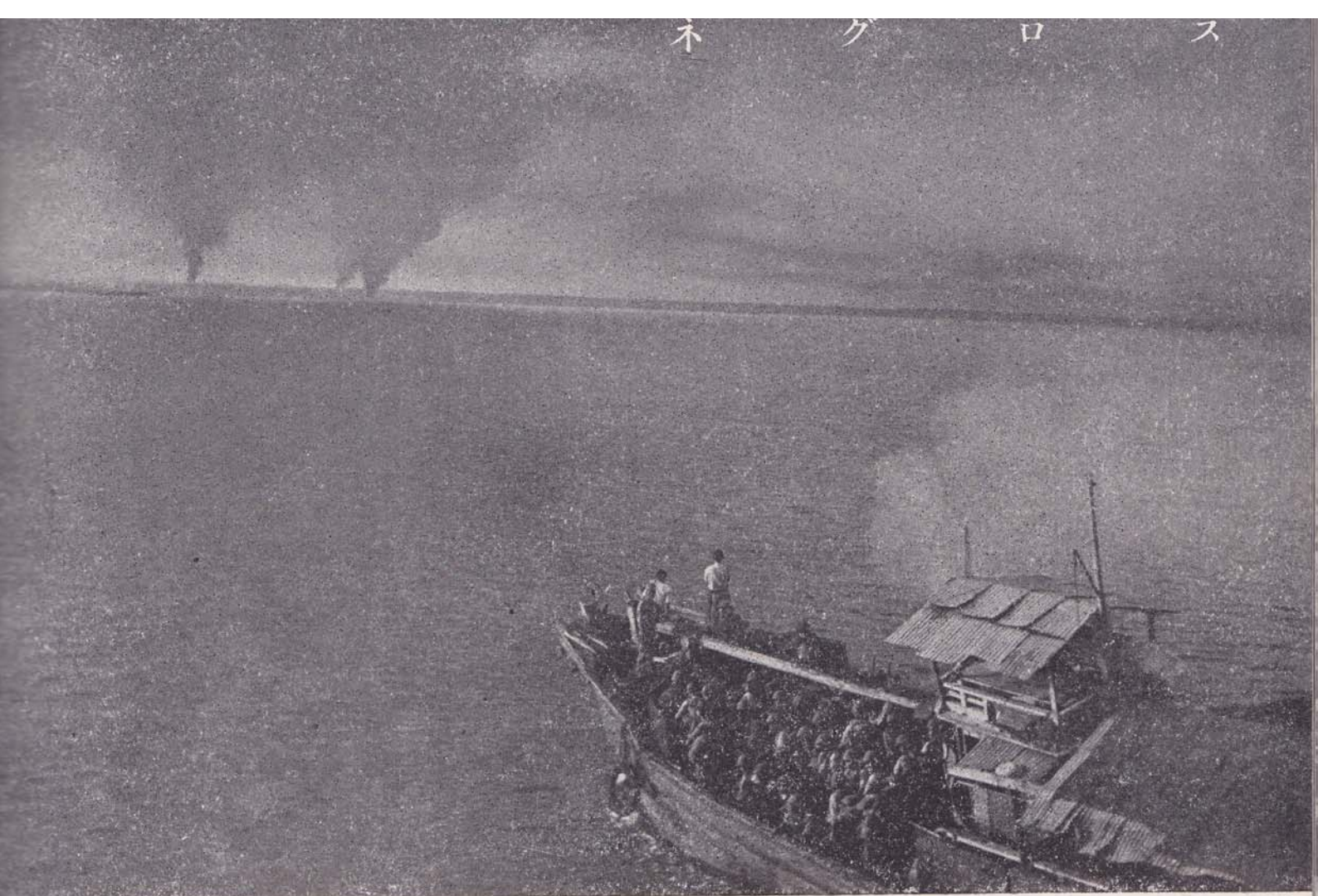




米比軍の退去に際して荒された砂糖工場

退去に際しての常習、米軍の焦土戦術は此の町にも行はれたが入城せる皇軍は住民の協力と共に逸早く消火にのりだした。





四月二十一日、皇軍のネグロス島奇襲作戦は米西戦争にもスペインの侵略時代にもかつて襲はれざる歴史を誇るネグロス島民を驚倒させた。それだけに戦はずして降伏するは潔しとしないのであらうか、中部山麓に立籠つて蠢動する残敵もあつたが、勇猛無比なる皇軍は進撃につぐ進撃撃砕につぐ撃砕をもつて同日早くも首都パコロードを攻略した。翌二十二日にはハコロードの東七九軒のイサベラに監禁されてゐた

邦人三一八名と獨人六名伊人四名を救出、二十三日には西ネグロス州知事のわが軍政に歸順の誓約が行はれ、二十五日には早くも西ネグロス州の市町村會議が開催され敵七四、七五兩聯家の投降武装解除が行はれた。二十六日には砂糖の國フィリッピンで第一の生産力を持ち世界の首位を争ふラ・カロタの工場をはじめマホおよびビナルカパンの兩工場を確保、ひいては附近の治安復興に力強い巨歩を進めることになつた。



新しいポスターの張られているこの家は何か日本の家に似たところを持つてゐる





線路の先きに炎上する市内の一角が見えた。建物の残骸から火になつた瓦礫が引き裂かれた舌のやうに崩れ落ち、燃え爛れた樹木は執拗な火焰に包まれた幾つもの不動明王のやうに今は根を張りめぐらした大地のみを信じて腹に金剛力の皺を刻みまじりをすりあげた苦悶の形相を焦熱の中に曝してゐる。電柱は毀れた土塀にぶつかつて焼け倒れた。電線の波は眞紅に熔けて舗道に流れ出てゐる。われわれの進んでゐる道路の両側の樹木や家屋に遮られて市内への展望は狭い直線上に限られてゐるのだが、その區切られた空間は密接した火焰の遠近によつて明暗の千遍万化を棚引かせ、棚引く火の海を泳ぐ火の粉はわれわれを指し招いてゐるかと思はれた。





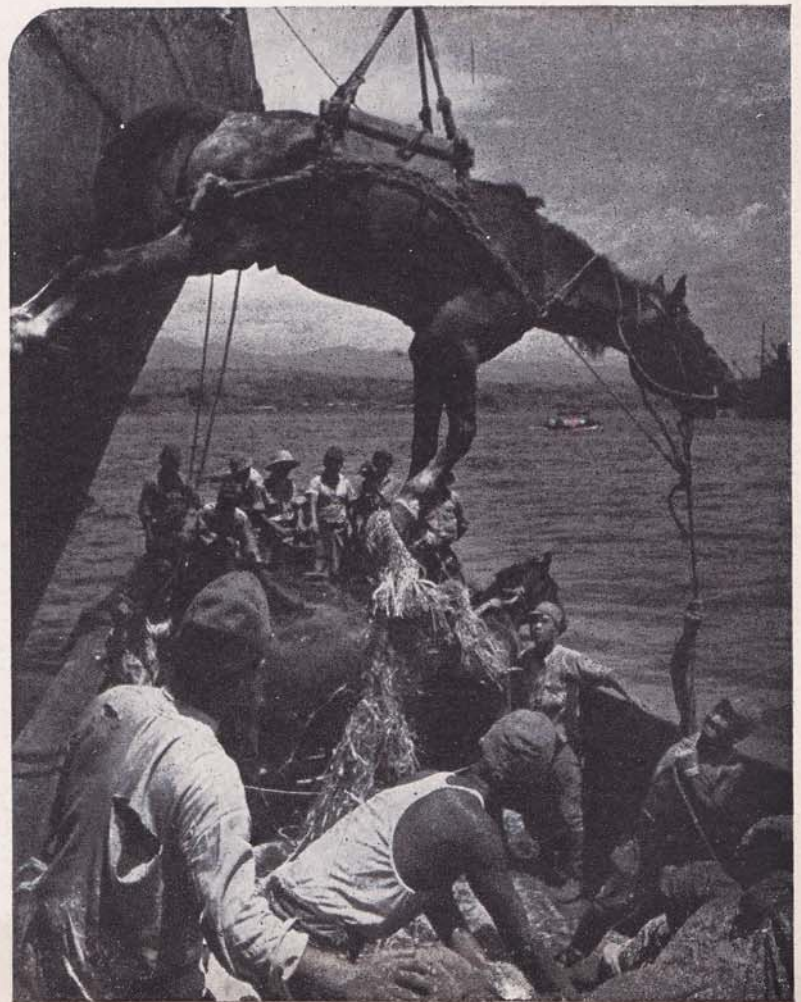
灼熱の太陽は頭上に燃え狂つて白い舗道は果てしもなく続く帯のやうである。背囊はじつとりと汗に濡れて、ひき白のやうに兵隊の背骨にのしかかる。肉體はことごとくの毛穴が汗の樋となる。こうなるともう足で進むのではない。兵隊の先頭をいかつい鐵鋼の甲螺が砂塵を嚙んで進む、敵狀搜索の装甲車は椰子の葉をかぶつて酷熱を避ける。敵の彈丸もこの肌にかかつてはかなはない。



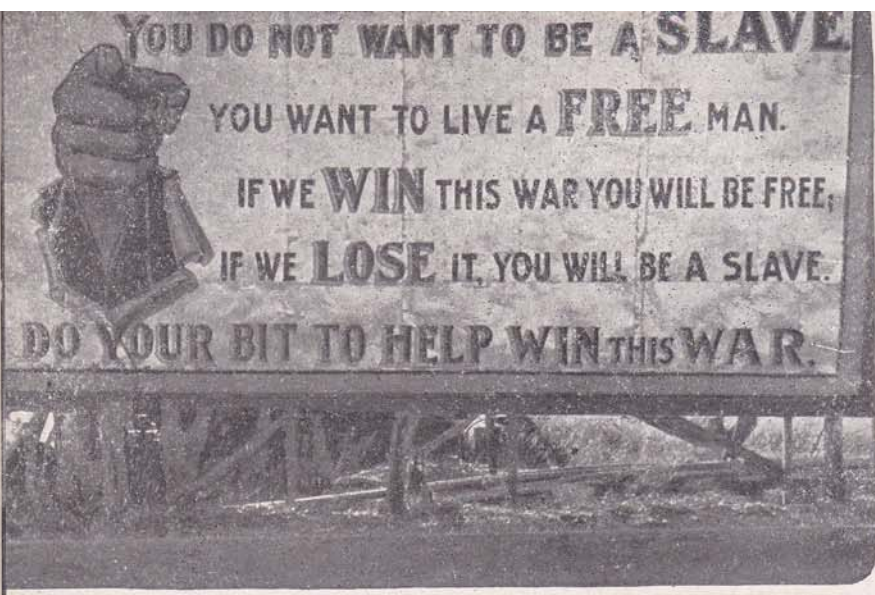


いかつい海の兵營には印度兵
からなる高射機關砲陣が光彩を
添へてゐる。彼らは過ぐる新嘉
坡攻略戦の際、進んで皇軍に協
力を申出た興亞の有力なる戦士
であり、セブ攻略戦にも敵數機
を物の見事に撃墜して支隊長か
ら賞讃された。



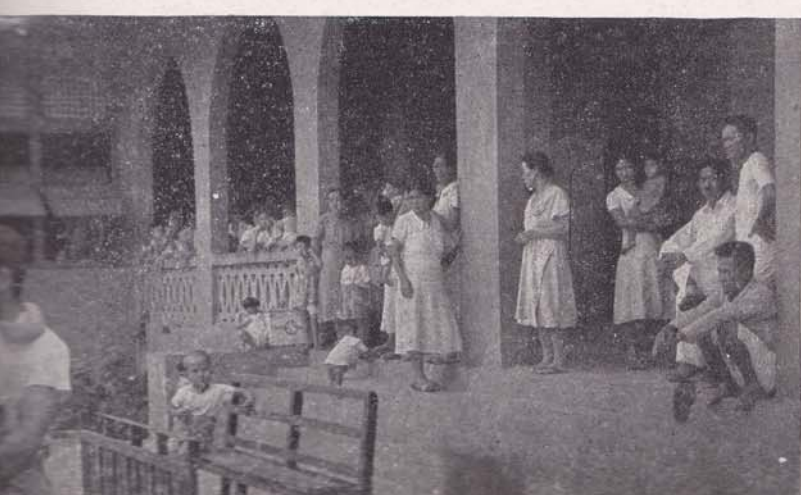


四月十日、セブ島敵前上陸は大膽不敵にも白晝決行された。最初はセブ市から八十軒南方のアロガオ港から上陸したが、敵がゐないとわかつたので、上陸部隊は小數を残して船にもどり、更に海路を北上して正午セブ市の南二軒タリサイ沖に着き、敵の焦土戦術によつて炎上する市街を眼前に睨んで堂々上陸した。しかし、セブ市攻略は決して安易であつたのではない。アラガオに残つた船にも、タリサイに集つた船團にも、敵機は執拗に來襲し、殊に西海岸アロガンサンに上陸した渡邊部隊は重疊たる峻険の中で地の利を恃む敵の猛抵抗に會つて文字通りの惡戦苦闘をした。にもかかはらず、この部隊は十一日午前にはセブ市背後の敵の重圍を蹴散らして入城した。タリサイ上陸の山田部隊が機を失せず、渡邊部隊の敵背後に迫つて挾撃、痛快な殲滅戰の銃砲火が曉闇を衝いて展開された。



イロイロ市にはいつて先づ驚いたのは抗日宣傳の大きな立看板が各所に立つてゐたことだ。マニラもパタアン半島もかうしたものはなかつた。バナイ島で初めて見るものであるが、家を焼かれ糧食を奪はれた住民は皇軍の温い保護の手に救はれ今までデマ宣傳に躍らされてゐたことを知り米軍に對する猛烈な反感が起つてゐる。





上
イロイロ市入城

中
焦土戦術の犠牲となり廢

と化した目抜通り

中左
敵鹵獲兵器

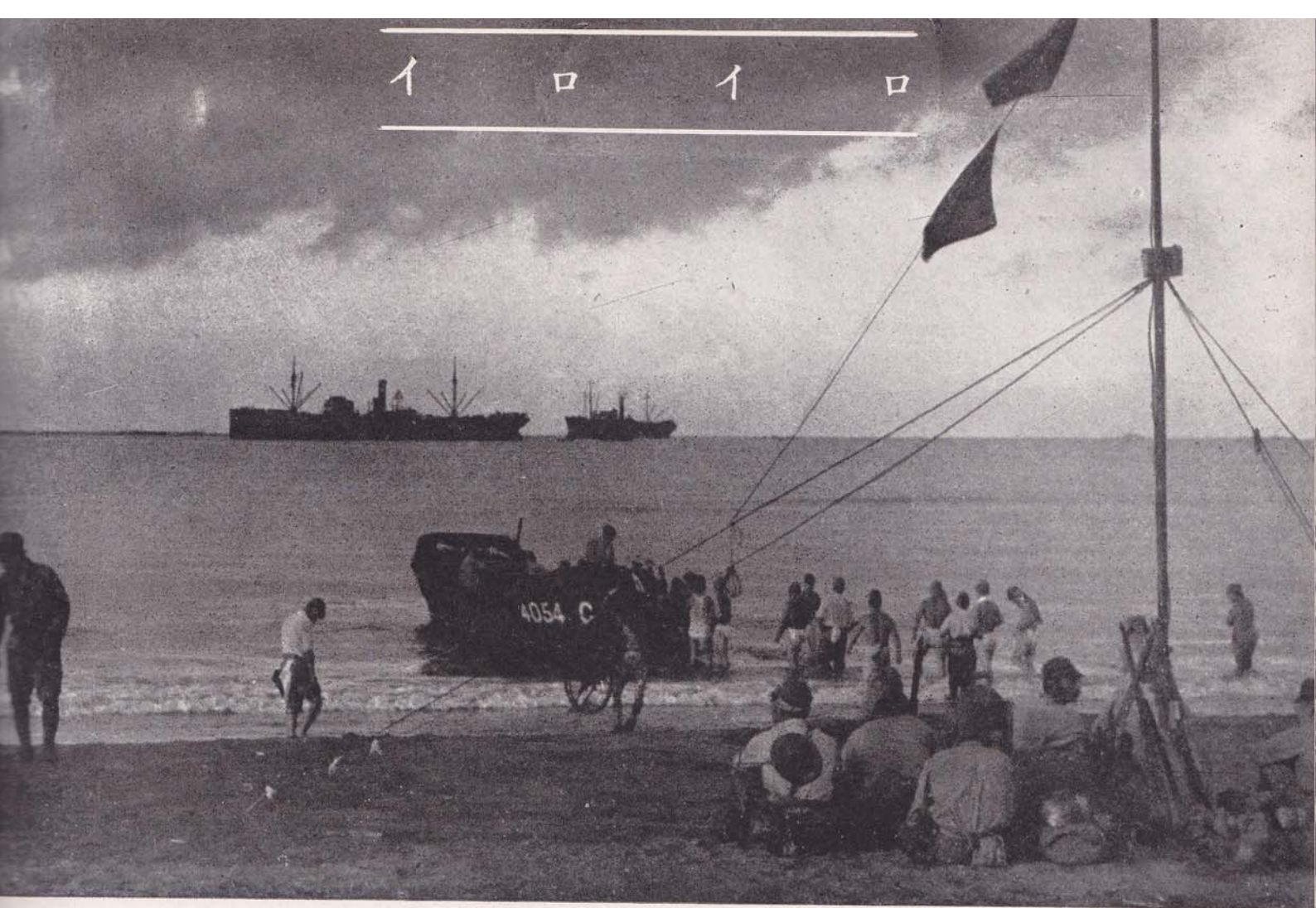
左下
日本人會に集つた在留邦

米軍焦土戦術の犠牲となつて黒煙を吹きあげてゐるイロイロ市

下 米比軍作成の抗日宣傳の立看板



イ 口 イ 口



多島海作戦圖





4.17

サンホセ

4.12

4.16

キヤピス

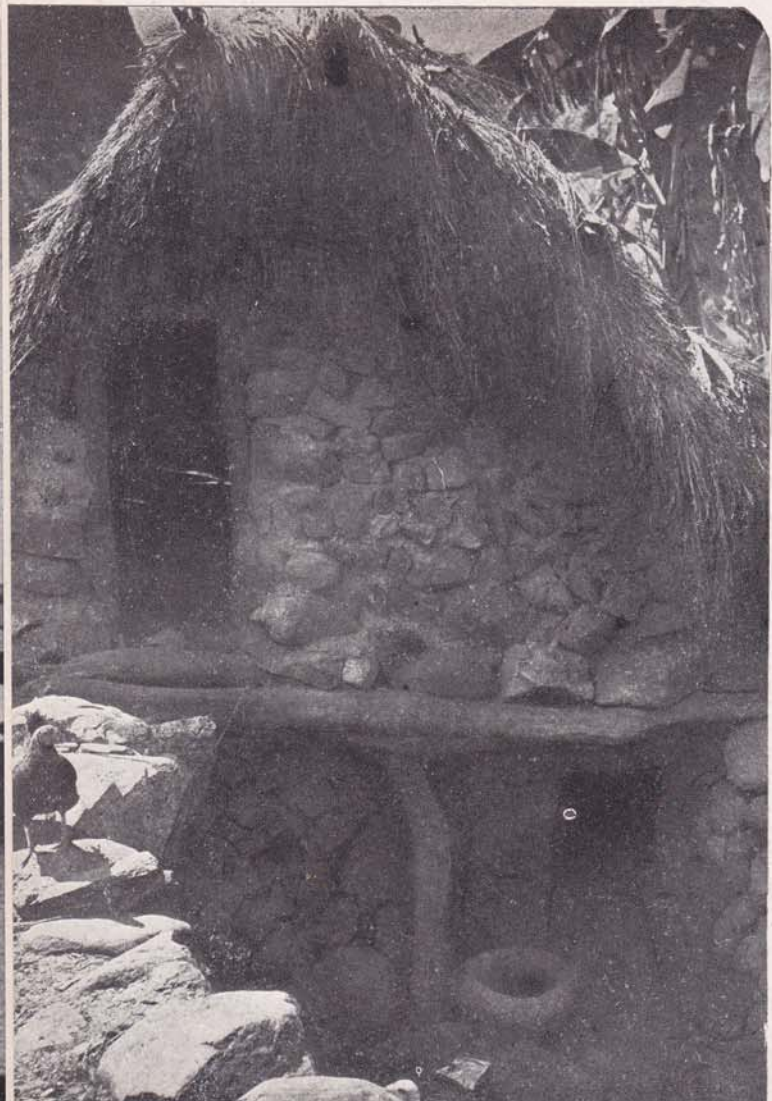
10

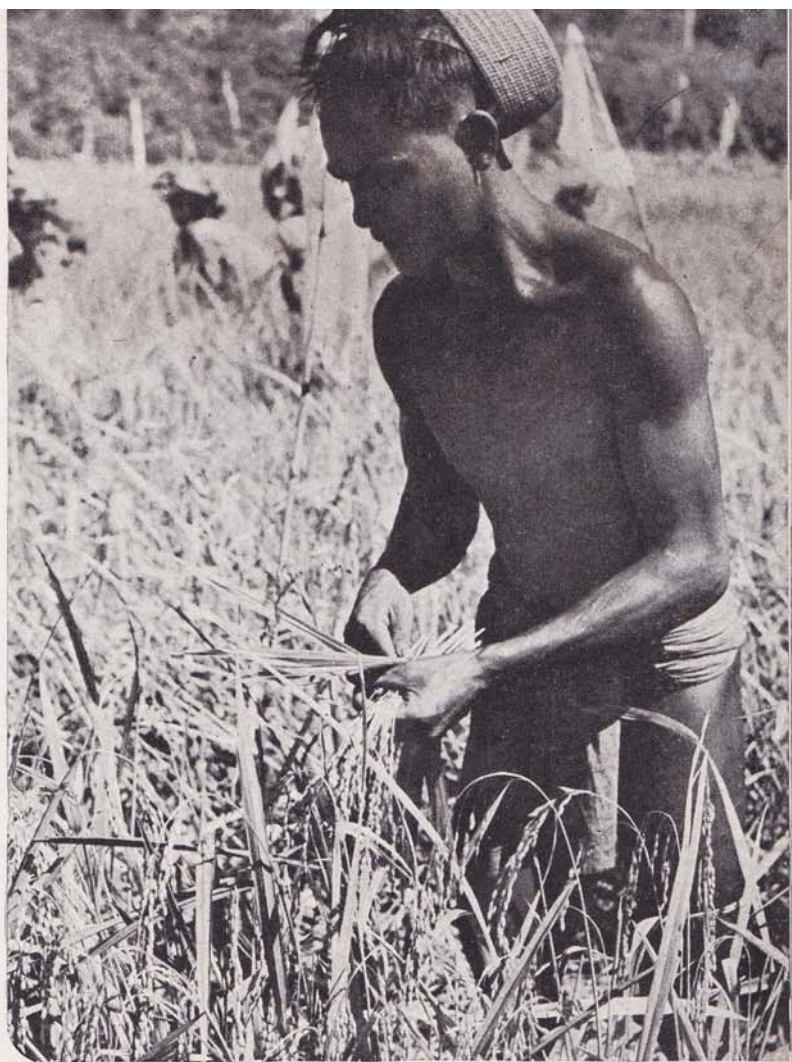
4.10

ピナブツガヤン

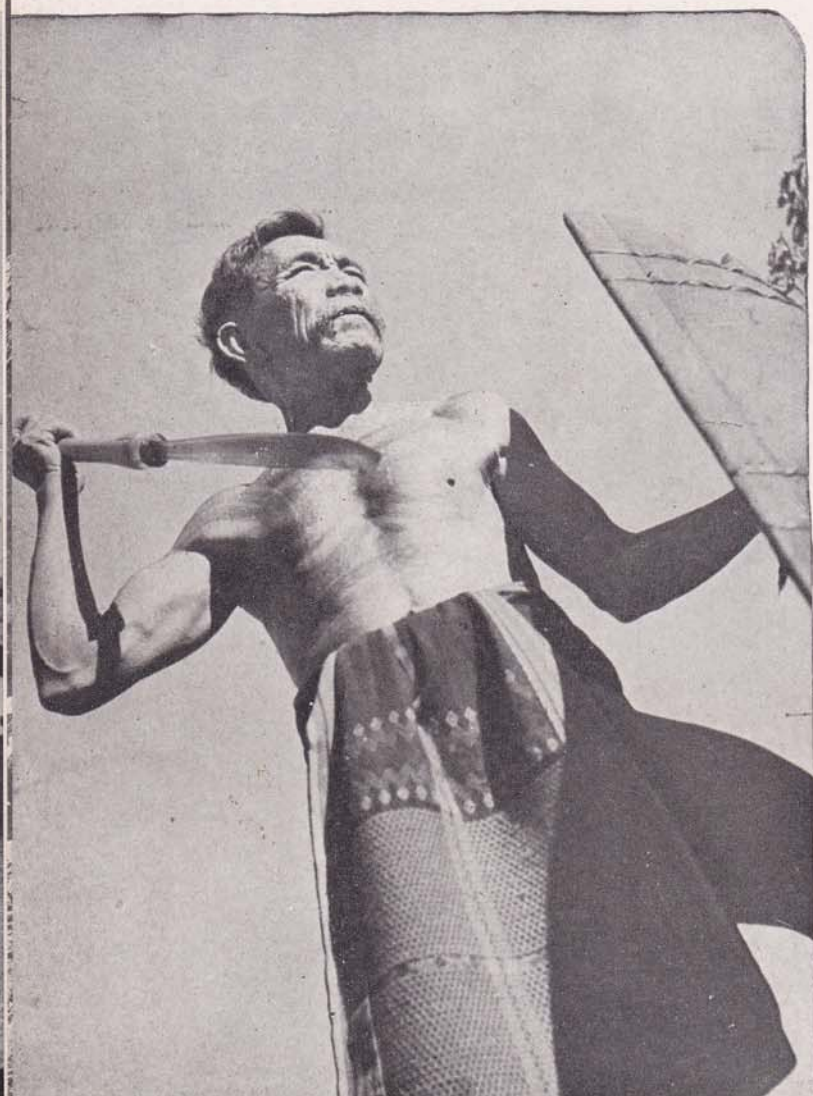
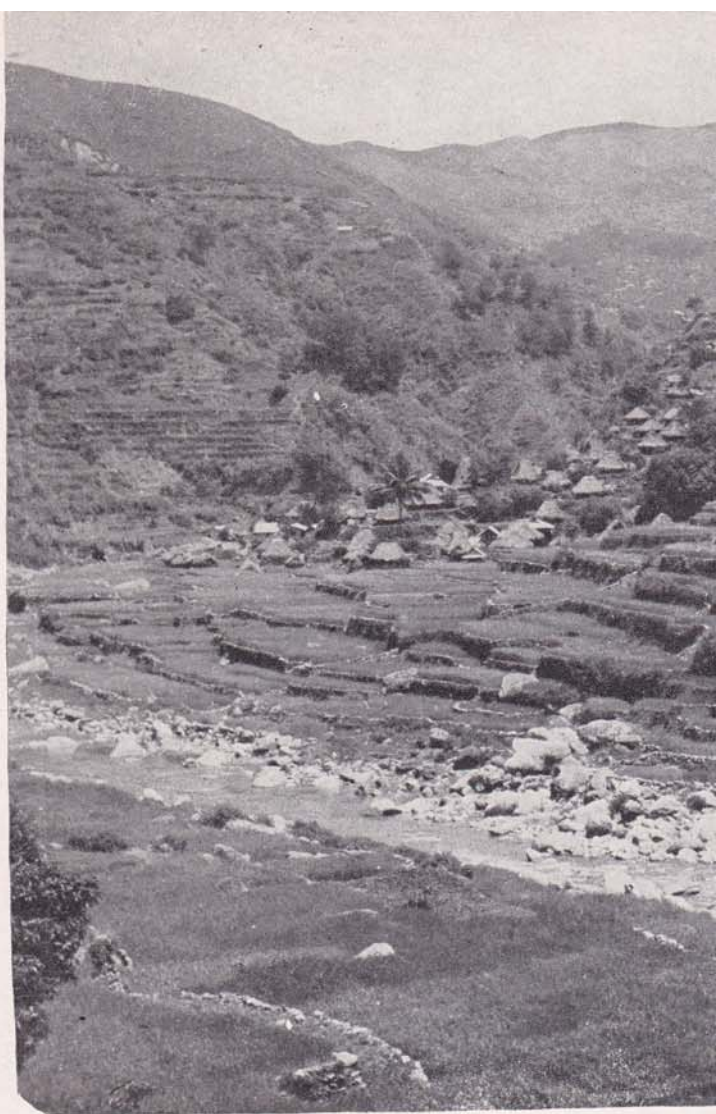
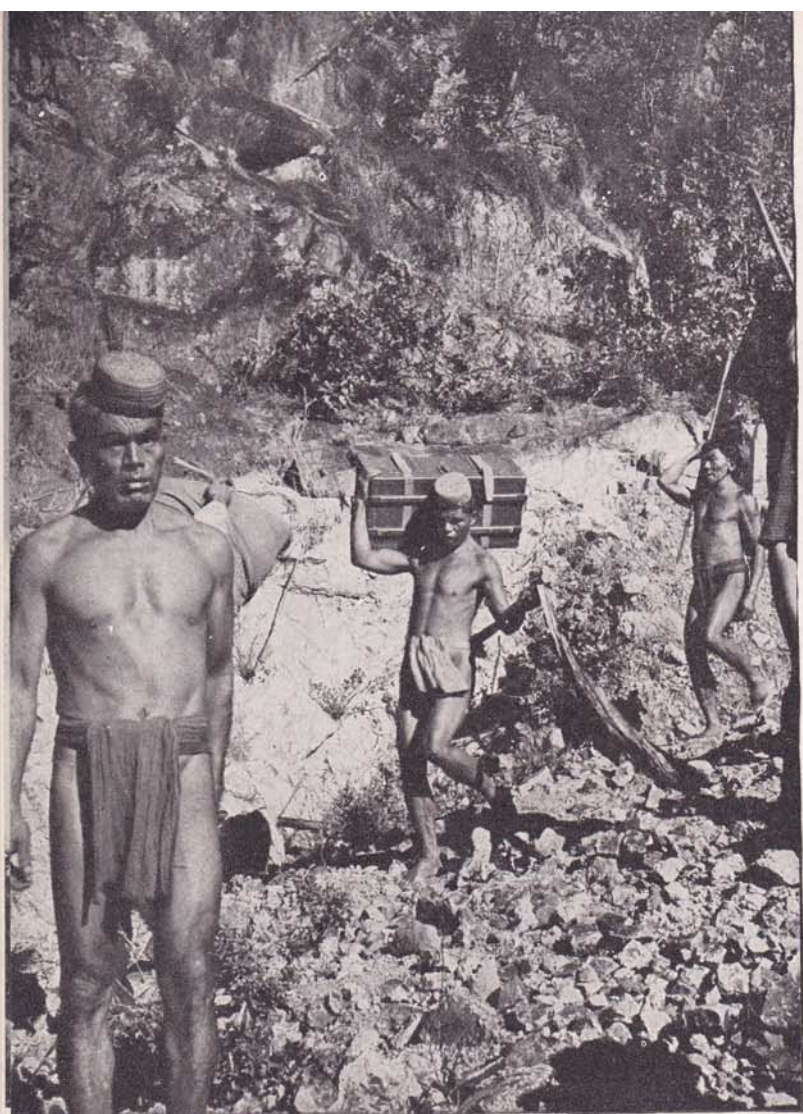
セブ

ポントツク族はよく働く人種だ。稲刈り男の赤裸の肌は灼熱に焦がされるほど遅しくなる、熱砂のうへに生きる龍舌蘭のやうに。彼らは日もすがら丹念に穂先だけを摘みとる籠に積まれた收穫は彼らの肩のうへで黄金色に煌めく。それは彼らにとつて最も豪華な衣裳のやうに見える。やがて、チコの河面に残映が訪れると、今宵も河面を見おろす喬木の丘に立つて鼻笛を吹く少年がある。その哀しい音いろは野らの仕事を終えて家路を急ぐ農民の足どりへ流れて行つた。陽が沈むとすぐ夜が展ける。未婚の娘たちは、オロッグといふ宿房に集まり、丸木を渡した床のうへに魚のやうに裸で横たはるのが昔からの習慣である。夜が更けるとオロッグの屋根をめぐる椰子の葉末から月光を振り落して遅しい若者たちが急なきざはしの前に現れる。やがてオロッグの内からは虫の音の絶え間に戀人たちの神秘的な囁きが洩れてくるといふ。



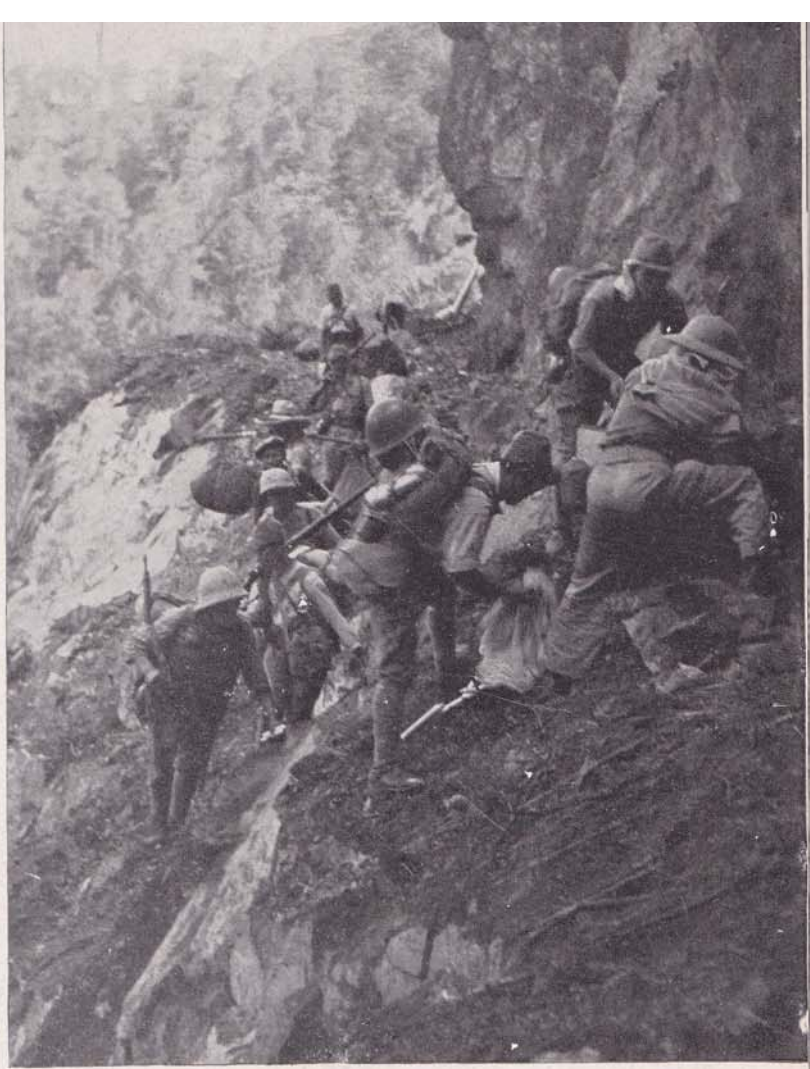


イゴロツトの子供に菓子を與へる女子宣傳班員



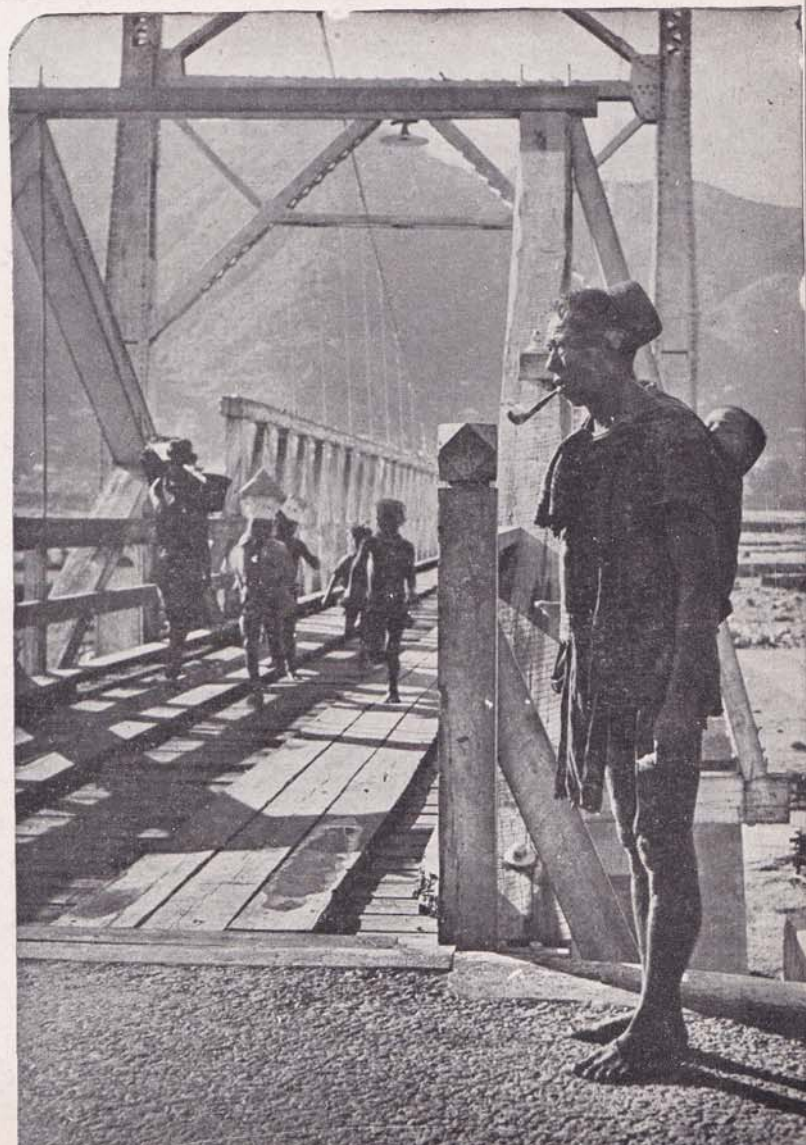
イゴロテの部落の前では耳を聳するばかりの戦
争踊りだ。慄悍な若者の四肢は満月の光をいつ
ばい浴びながら、汗は氷柱つららのごとく咲きいで
た。銅錘の響きに和し、交互に、歌はれる熱狂
と歡喜の歌聲は、劫掠と貪婪と不義の肉しろを
めぐつて律動化し、持續する。われわれはこれ
ほど勇しいこれほど野趣にみちた踊りを見たこ
とがない。

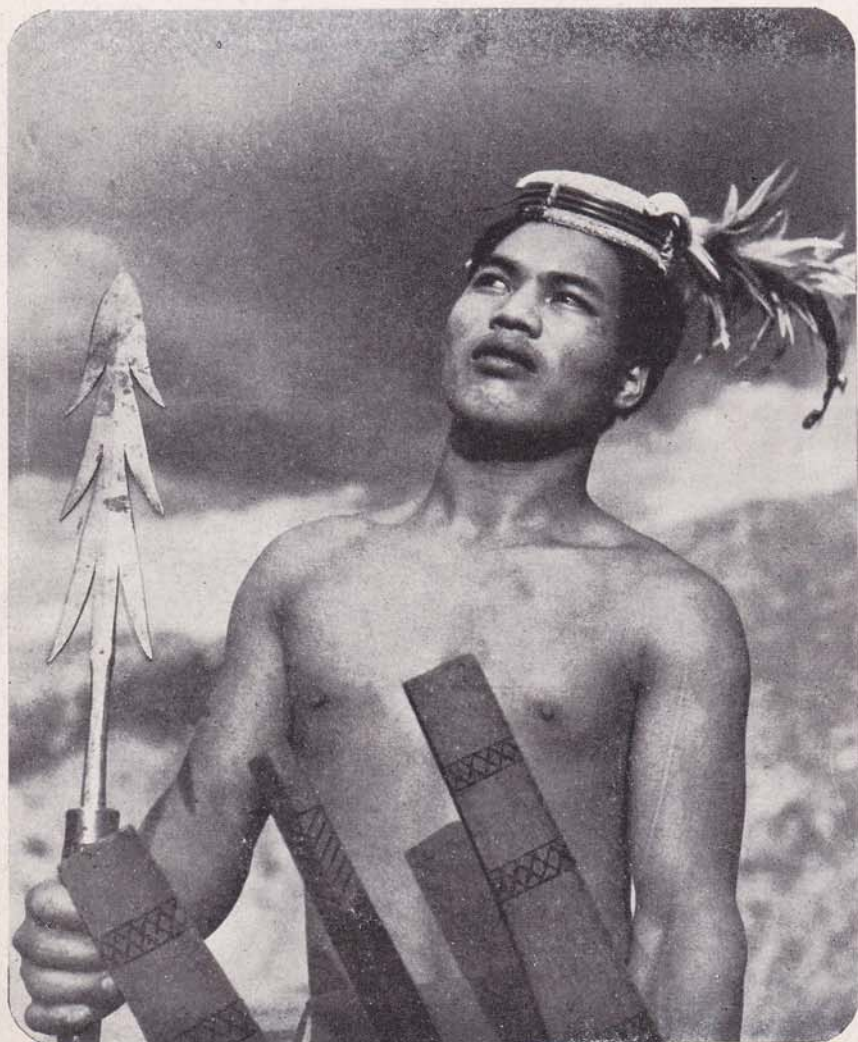
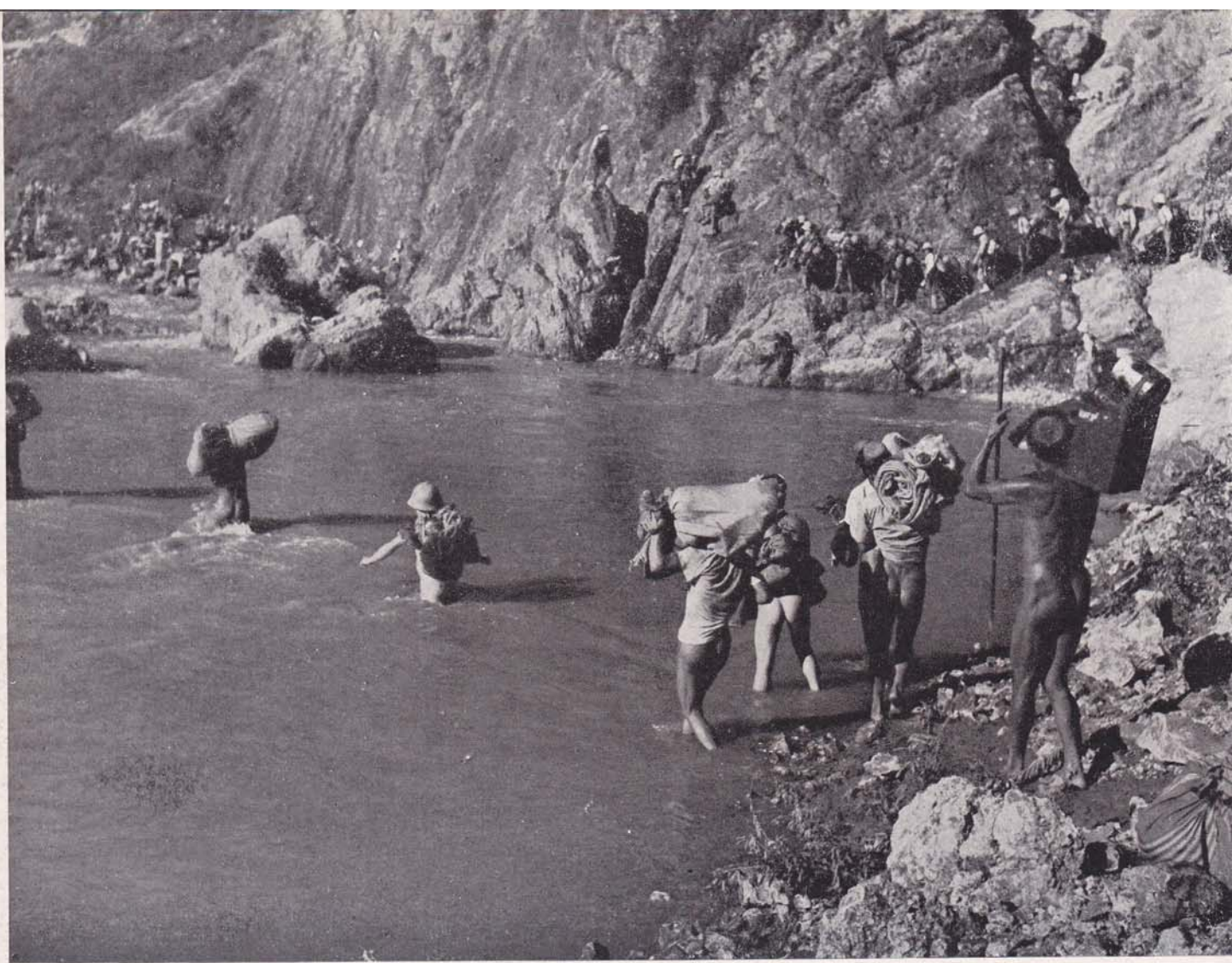




イゴロテ踊り

原民は裸に強き踊りかな
 共和するガンサ谿間の夏部落（ガンサは土人の樂器）
 汗淋漓打つ鐘の音やびえわたる
 裸して楯に相搏つ銃長し
 色濃ゆきふどしに踊る夏の山
 ガンサ打つイゴロテ古き裸かな
 相搏てるイゴロテ踊る勇ましき
 夏草を踏みて踊りや酣はに
 裸してイゴロテ楯は木彫なる

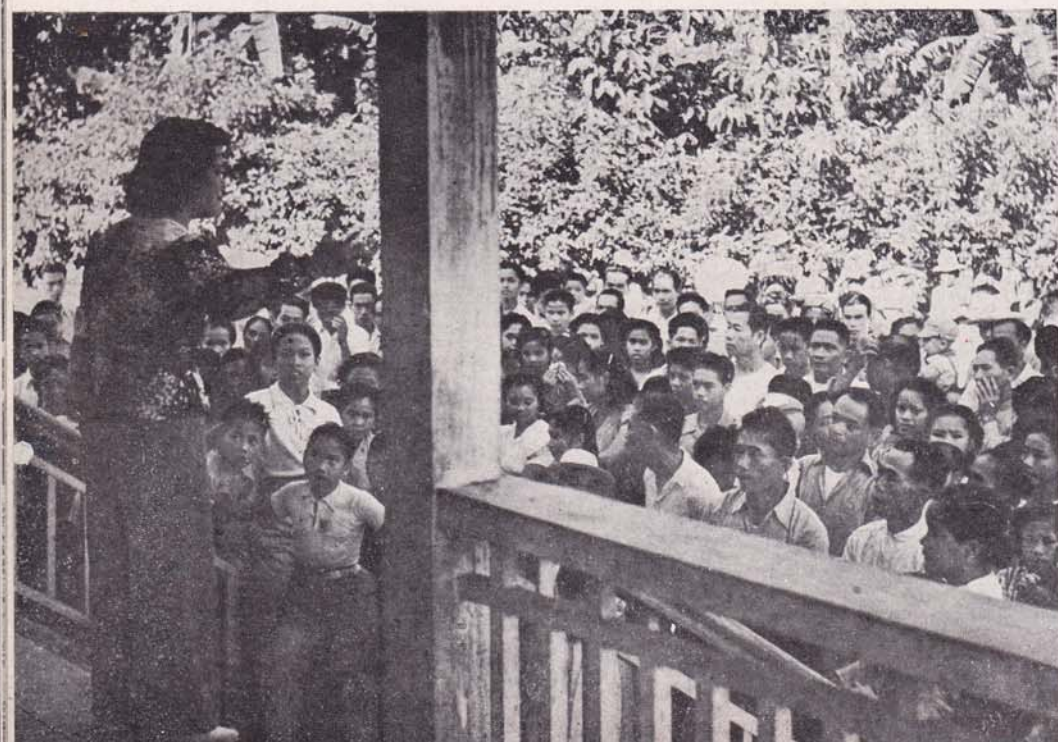
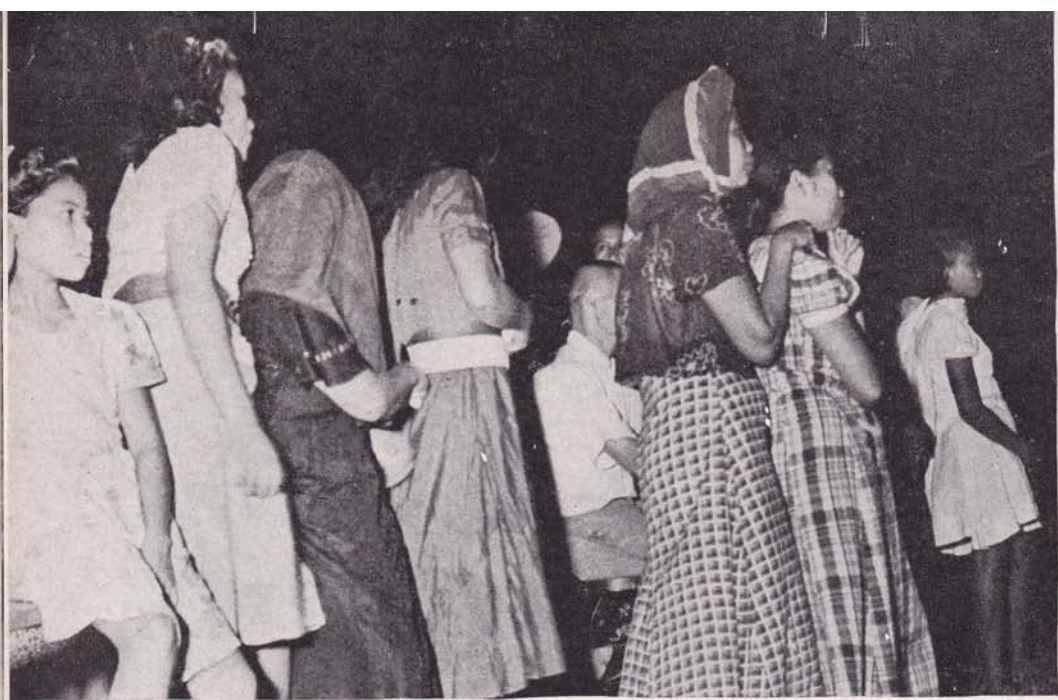




四月のある日、栗に似たカイミートの樹蔭で部落の女たちが扱つきをしてゐる。この樹蔭の空気だけは肌のうらから冷気をおぼえるやうな清澄さである。彼女たちの四肢は葉の間をもれる光の輪を浴び、その光の輪と快い諧調をなして躍動する。彼女たちは美學の西洋的規則を以てすれば餘り可愛い女ではないかもしれない。然し、彼女たちは美しかった。その顔のすべての輪廓は、曲線の綜合の裡に直情の羞恥を示し、その微笑む唇は歡喜と苦惱のあらゆる言葉を物語る彫刻家によつて浮彫りにされてゐるやうだ。東洋の女性にのみ残された黙従の資質は、大地のうへにしつかりと根をおろし健康で満ちたりた簡素と勤勞の勝利の歌を唄つてゐるかのやうである。遠くの戦線から米比軍のはなつ砲聲がものうききこえる。しかし、彼女たちの瞳にはすこしも狼狽のいろはない。來るべきものが何であるか。皇軍に對する絶對の信頼が、彼女たちの生活を平和に彩つてゐる。

山の王者—ポントツク族は北部ルソンの山岳州に限られて住みレバント族ともよばれる。馬來族にインドネシアンの血を混じ、さらに蒙古とアイヌの血が混つてゐるといはれる。チコ河畔に雑段式水田を耕し、アトといふ小部落から成るバリオ集落を持つてゐる。毎年、七月頃には土語フアクフアクトーといふ石合戦を行ふ。馘首の風があり、つねに槍や首刈鎌を携へて往來する、一年を通じて男はただ一本の禪、女は一枚の腰巻を纏ふのみで生活は簡素である。明治初年、この地に渡來せる皆川某氏を初め幾多邦人の開拓と教化とによつて、ポントツク族の日本人に對する尊崇の念は非常なものである。比島戡定においても、彼らはいち早く皇軍と協力し、峻嶮を攀ち濁流を涉つて、道先案内に、或ひは彈藥輸送に、或ひは得意とする投槍を用ひて米比軍をひるませた。



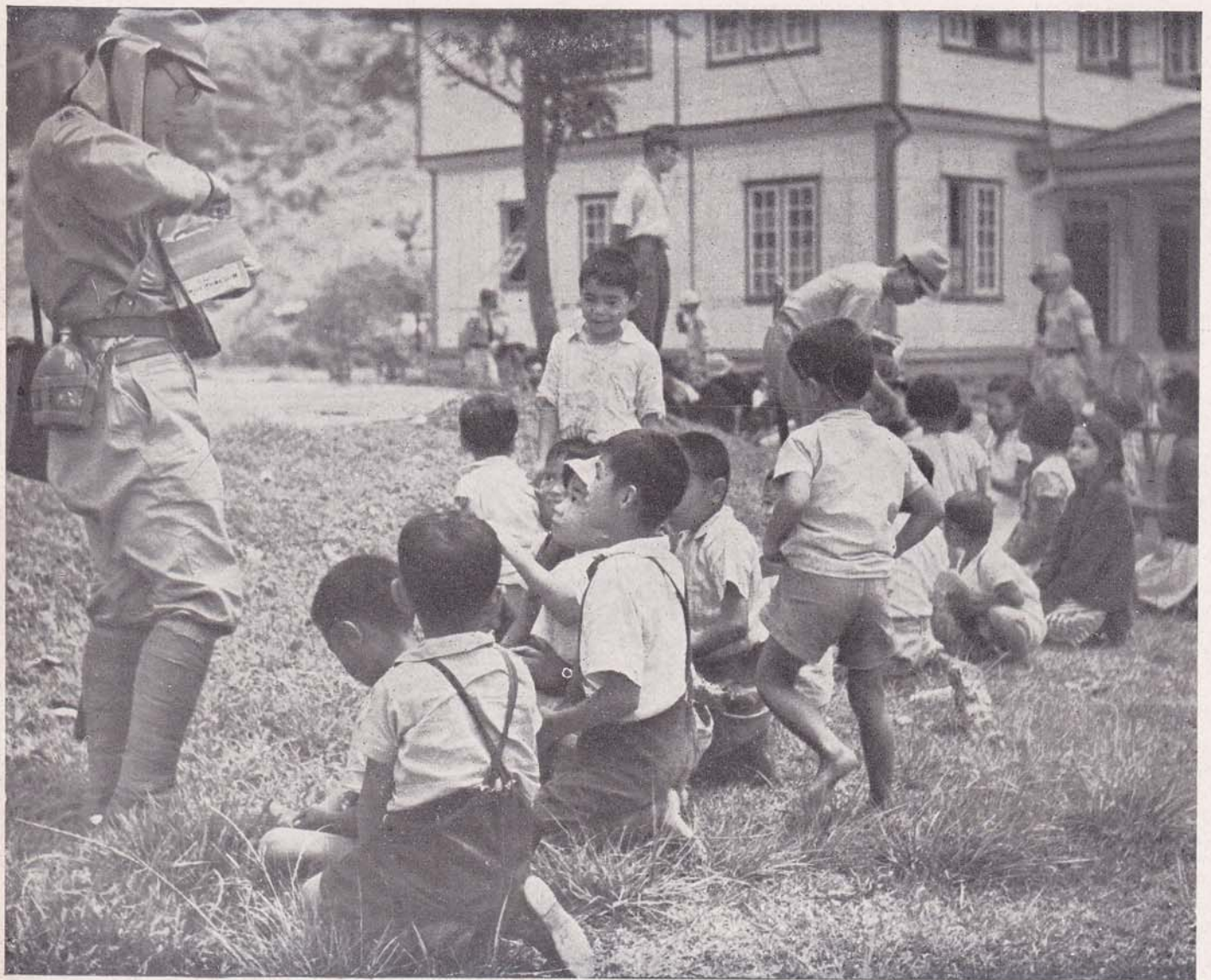
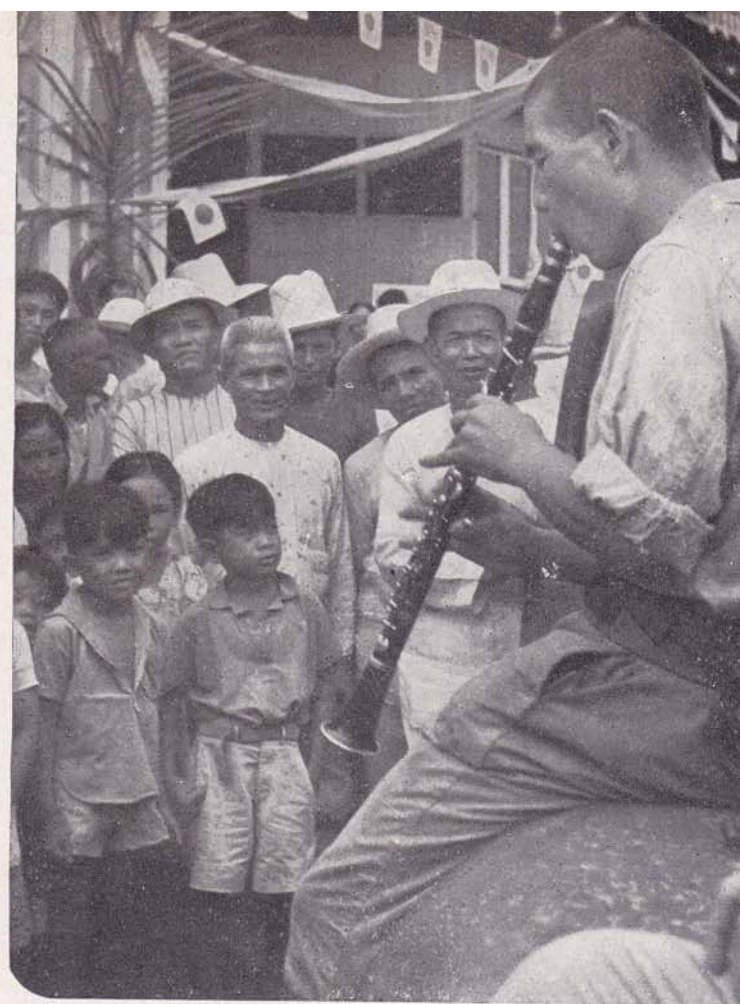
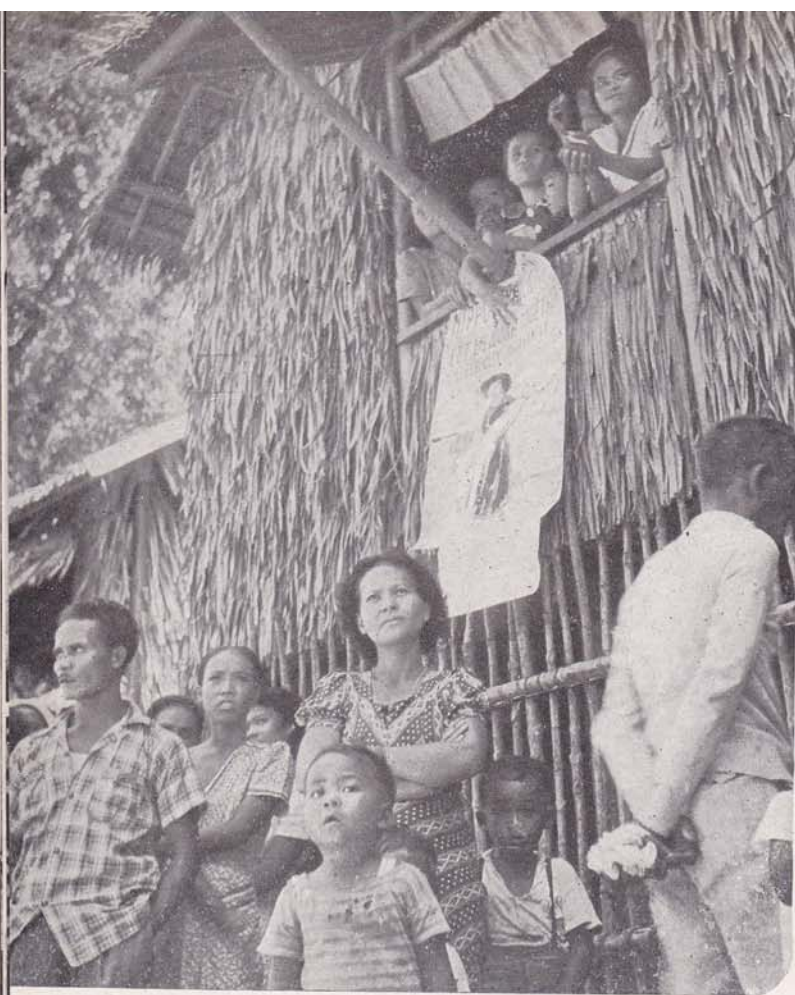


晝も



夜も



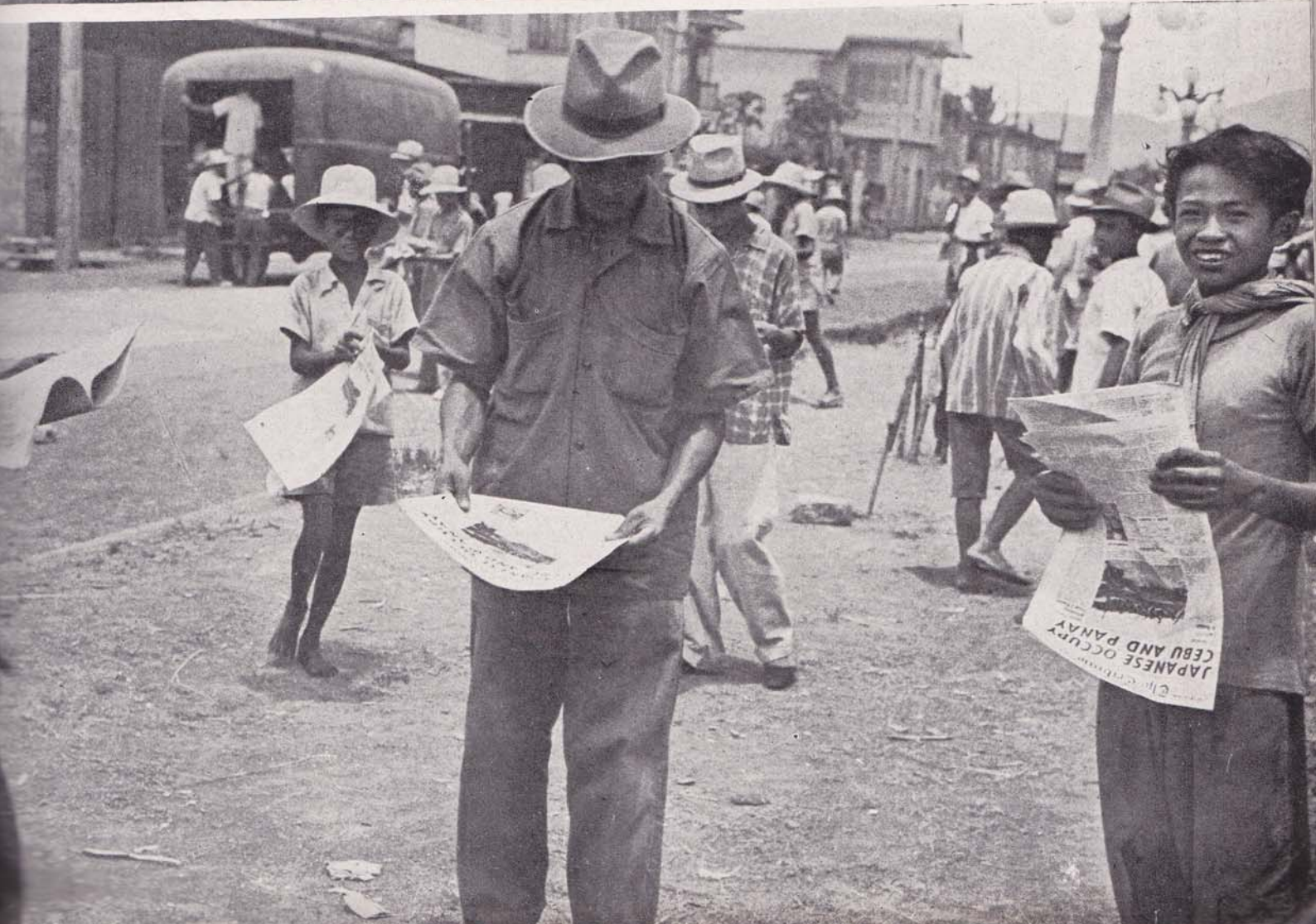




手 目 耳

へ へ へ

新らしき比島の姿が
皇軍の真意がとびこ
んでゆく。





ルソン中南部方面宣撫行

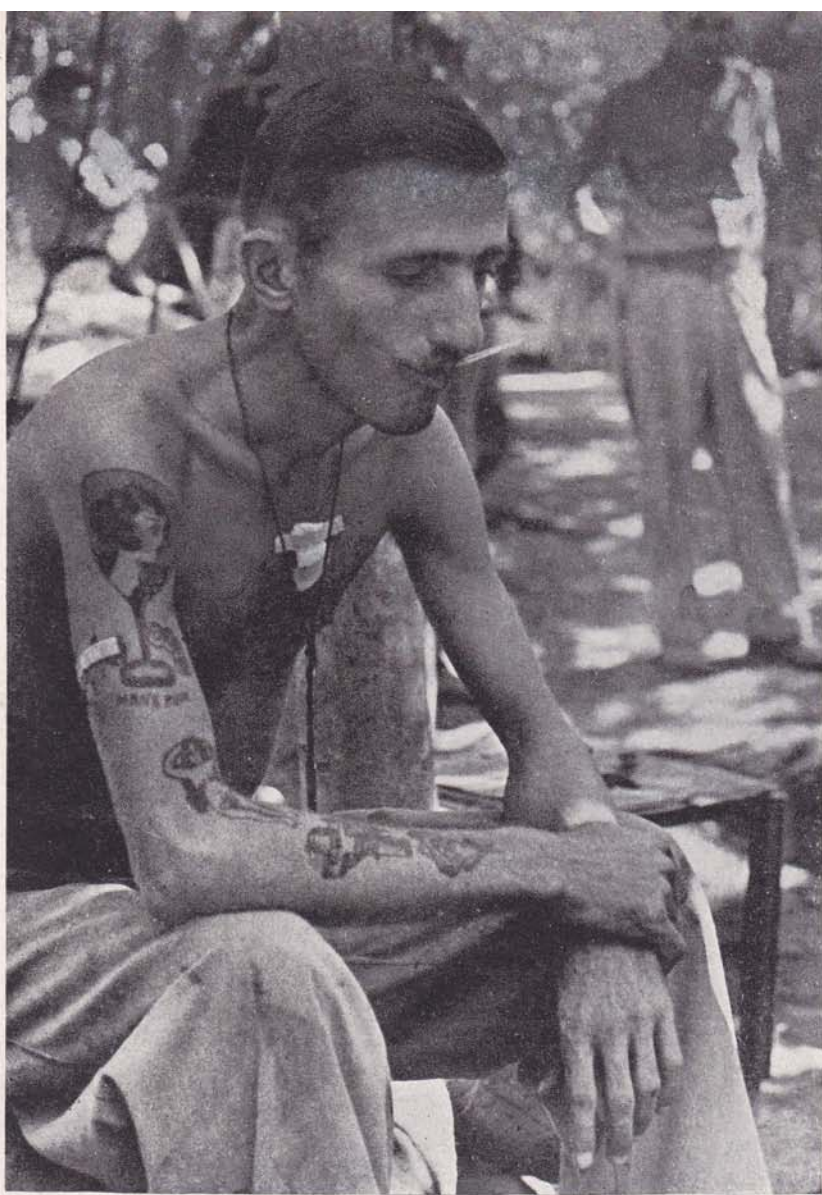


砲撃と爆撃と突撃とによる皇軍の敢闘のみが戦場の視野ではない。赤子として占領地の民衆を抱擁宣撫し、御稜威の下に靡き慕はしめる真情の翼はつねに荒廢の町のうへに羽搏かれてゐるとはいへ、比島民は土俗と習慣と言語とを異にする四十數種族に分かれ、これらはまた殆どが混血の種族である。この複雑な比島民の思想と感情を肇國の大精神に歸一せしめるために、わが宣傳班員は挺身して晝夜兼行の努力を續けてゐる。



將軍カルテリを説く比島新らしき





マ
リ
ベ
レ
ス
野
戦
病
院
で
投
薬
を
受
け
る
俘
虜
傷
兵





われら立ちて、このとき、

太陽のけがれを清めたり。

不遜なる者どもありて

太陽を穢すこと久しかりき。

われら立ちて、いま、

邪悪なる者の手より、

太陽を奪還したれば、

いまや、東洋の太陽は美し。

日の本のますらをのこころみなぎり、

大いなる時代の歌興る。



オリオン附近所見、
バクアン陥落直後米捕
虜と難民の群



つらなる米捕虜群と進む我がトラック



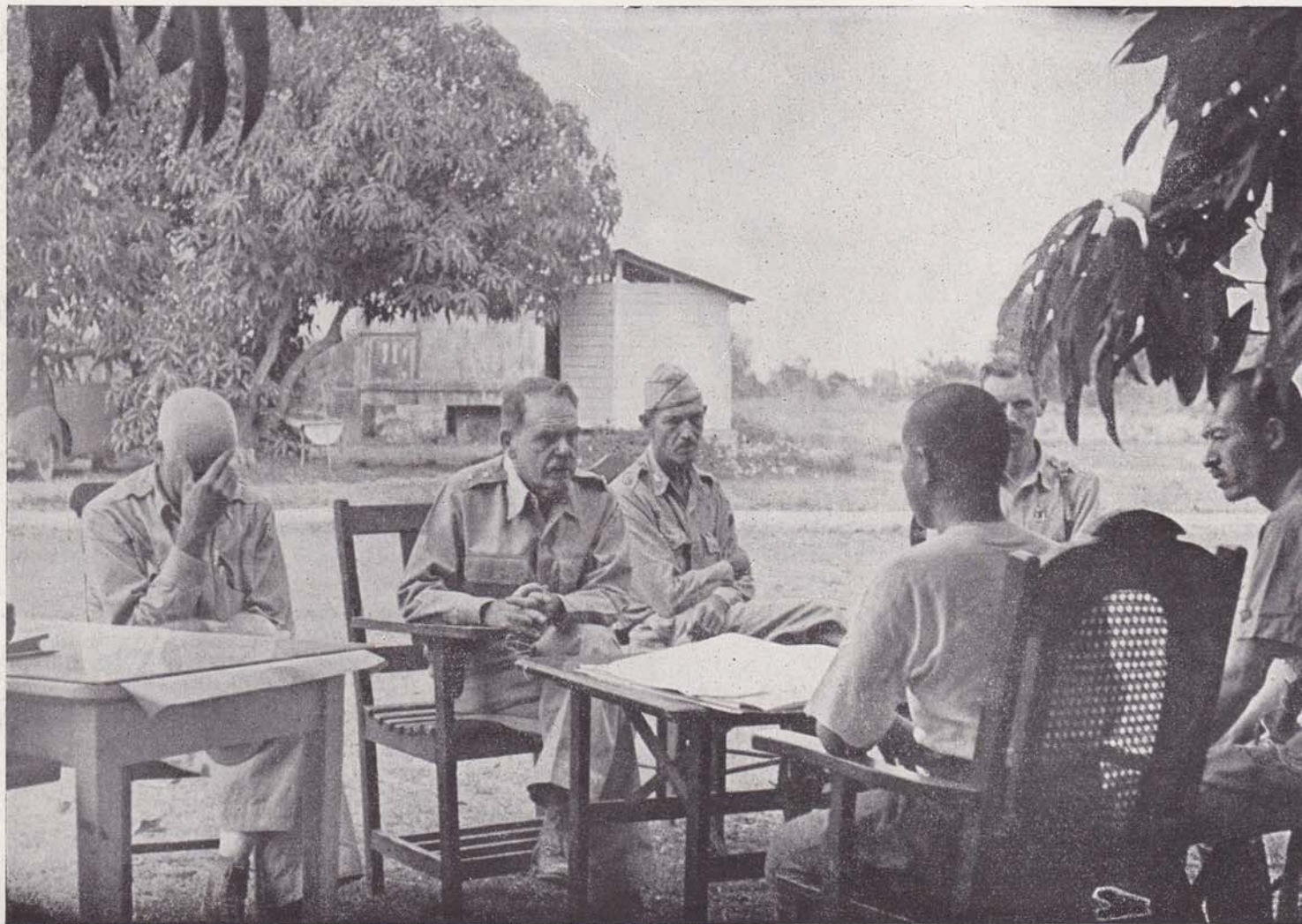


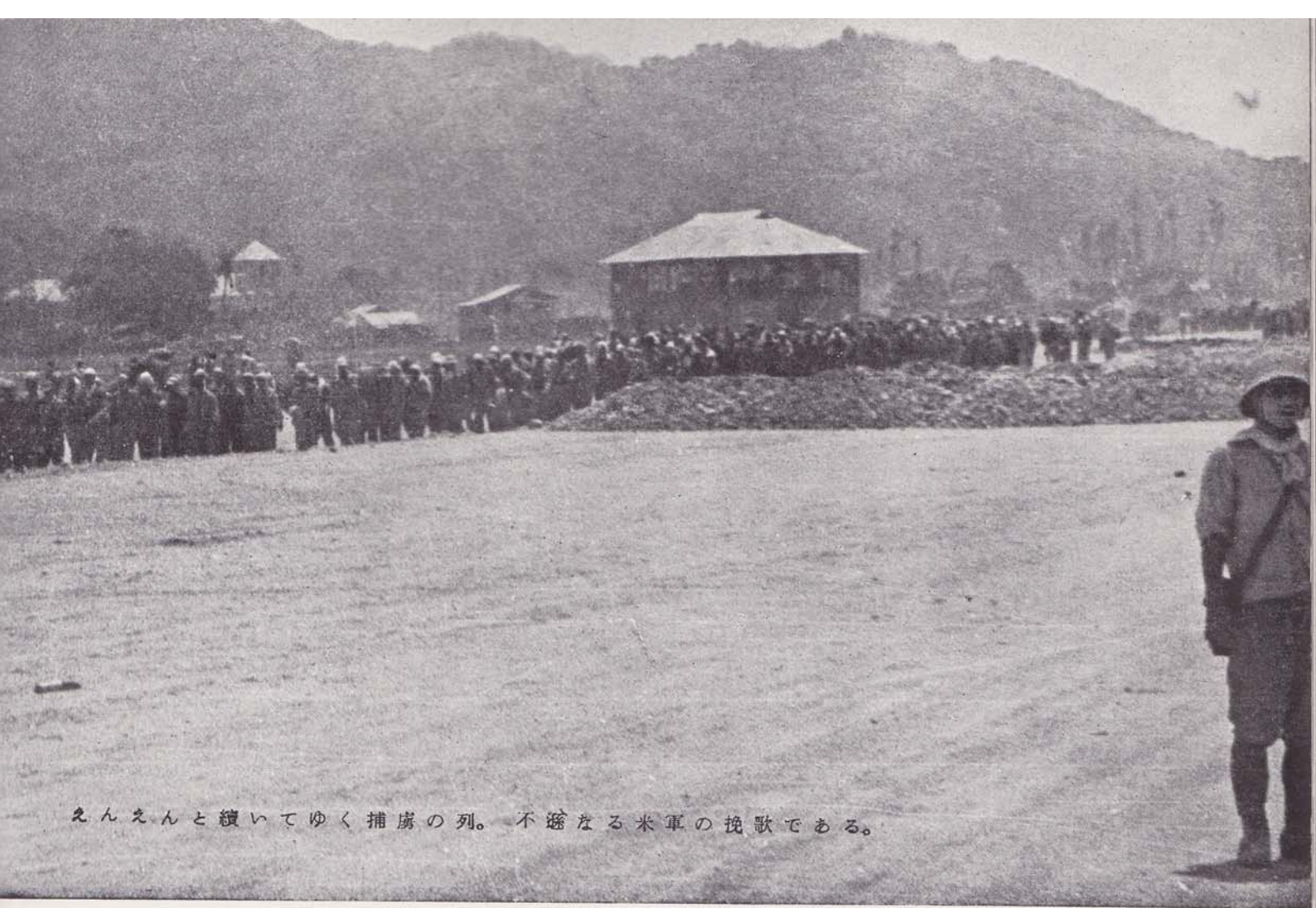
大東亞民族の神聖なる怒りの前に、不甲斐なく額づく勇氣なき敵軍。曾て彼らの國はいはれなき侮辱をわが日本のうへに加へその無禮なる心をもつて祖國の存立をすら否定せんとした。その報は逃れるべくもない。いま埃のなかに力なき表情をもつてうづくまり、卑屈なる笑みをうかべる者を見よ。



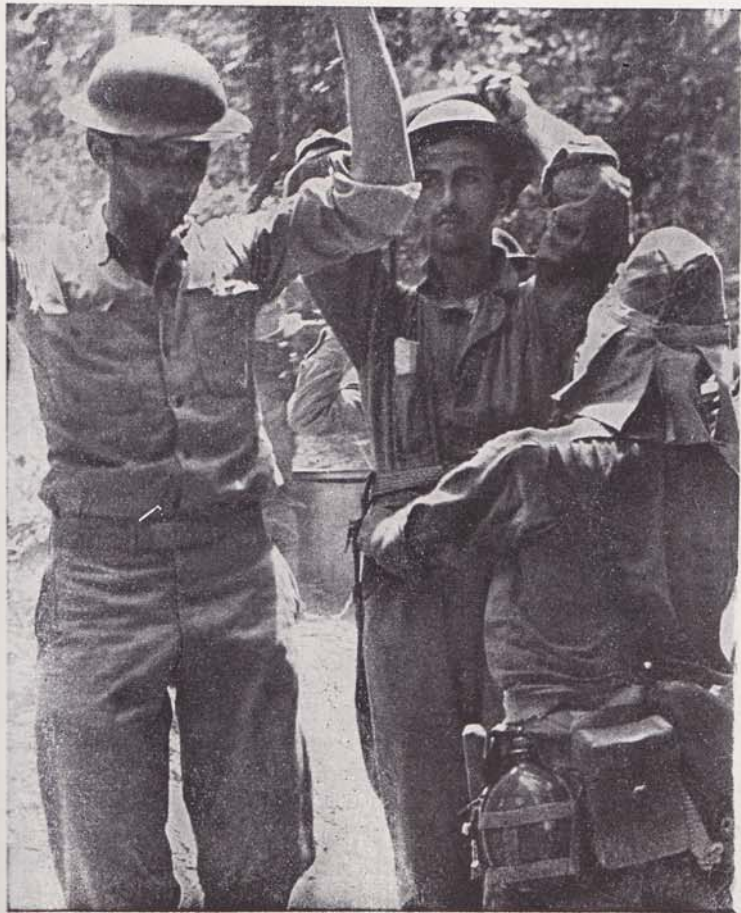
敗北の歌を奏で、蒼白の面貌に疲労の色をうかべ、軍さうに足をひきずりなが

我が軍の取調べを受けるキング少將



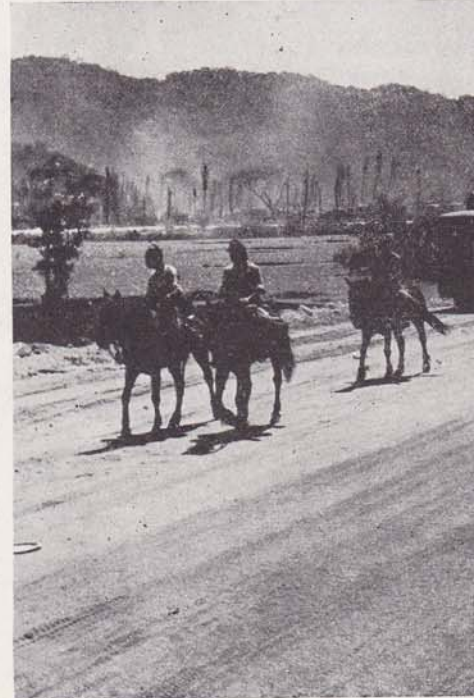


えんえんと續いてゆく捕虜の列。不遑なる米軍の挽歌である。

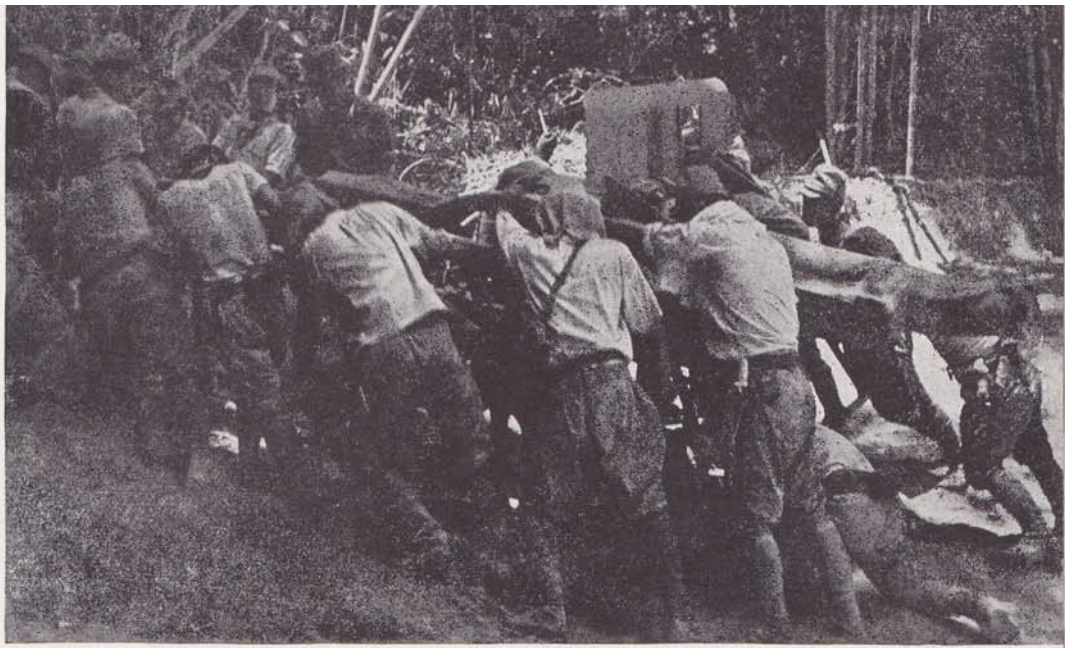


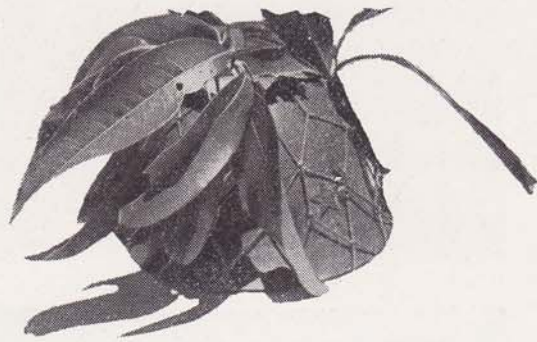


皇軍の鋭鋒に堪りかね降伏を申し出たアイブ代將——於マリベレス山麓



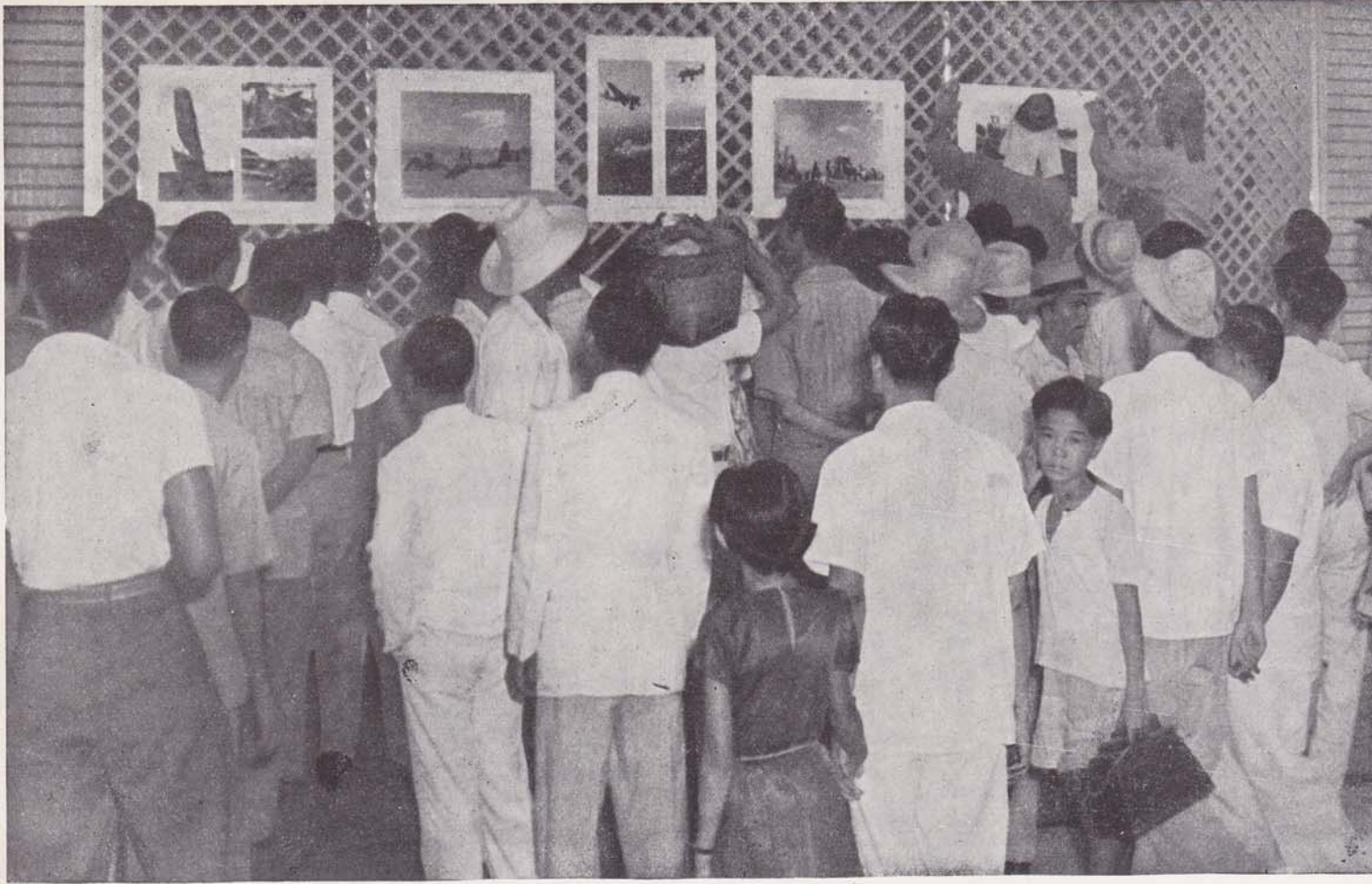
あらゆる矜持を棄てて退却する敵軍。すべての武器は放棄され、路傍によこたはり山積する。その使命をわすれて轉がる砲弾。ついに敵は怯懦なる白旗をかがげ、憔悴の表情をうかべてあらはれる。





なほも最後の追撃が行はれる。とどめを刺すごとく爽快の氣をはらんで飛んでゆく砲彈。交換される砲彈の挨拶。いよいよジャングルは深い。

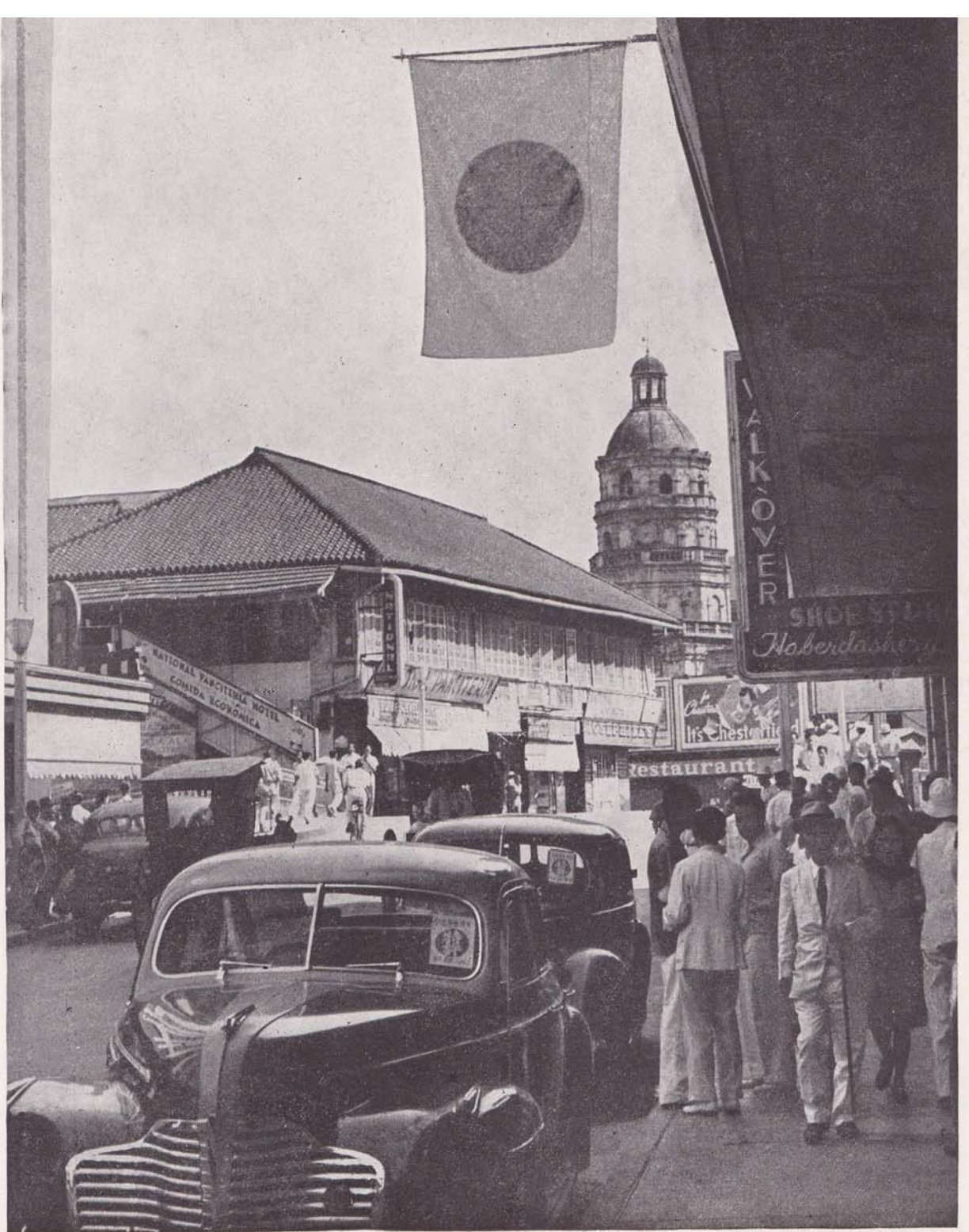




エスコルタ街ヒーコック
ビルディング、飾窓を利用
して寫眞報道展を開いた
寫眞班員の活躍、爆風除け
のテープが生々しく戦争を
物語つてゐる。

ふ精神の根源であることが
知られ、英語をあやつつた
唇のうへに、日本語がしや
べられる。マニラの町の隅
々に更生の歌が聞かれる。





明期をとりもどす町々。
人々。たくましく建設譜。
あらゆる町の姿のなかに笑



上 マニラの銀座通りともい
ふエスコルタ街の賑はひ。
左 新しいテーマを求めて早
くも再開されたサンパギー
タ撮影所。

廢墟のなかを彷徨する難民へ對する皇軍の施療。瘦せこけた手と胸と、落ちくぼんだ眼を恢復するための努力。それはまた新比島再建への努力である。

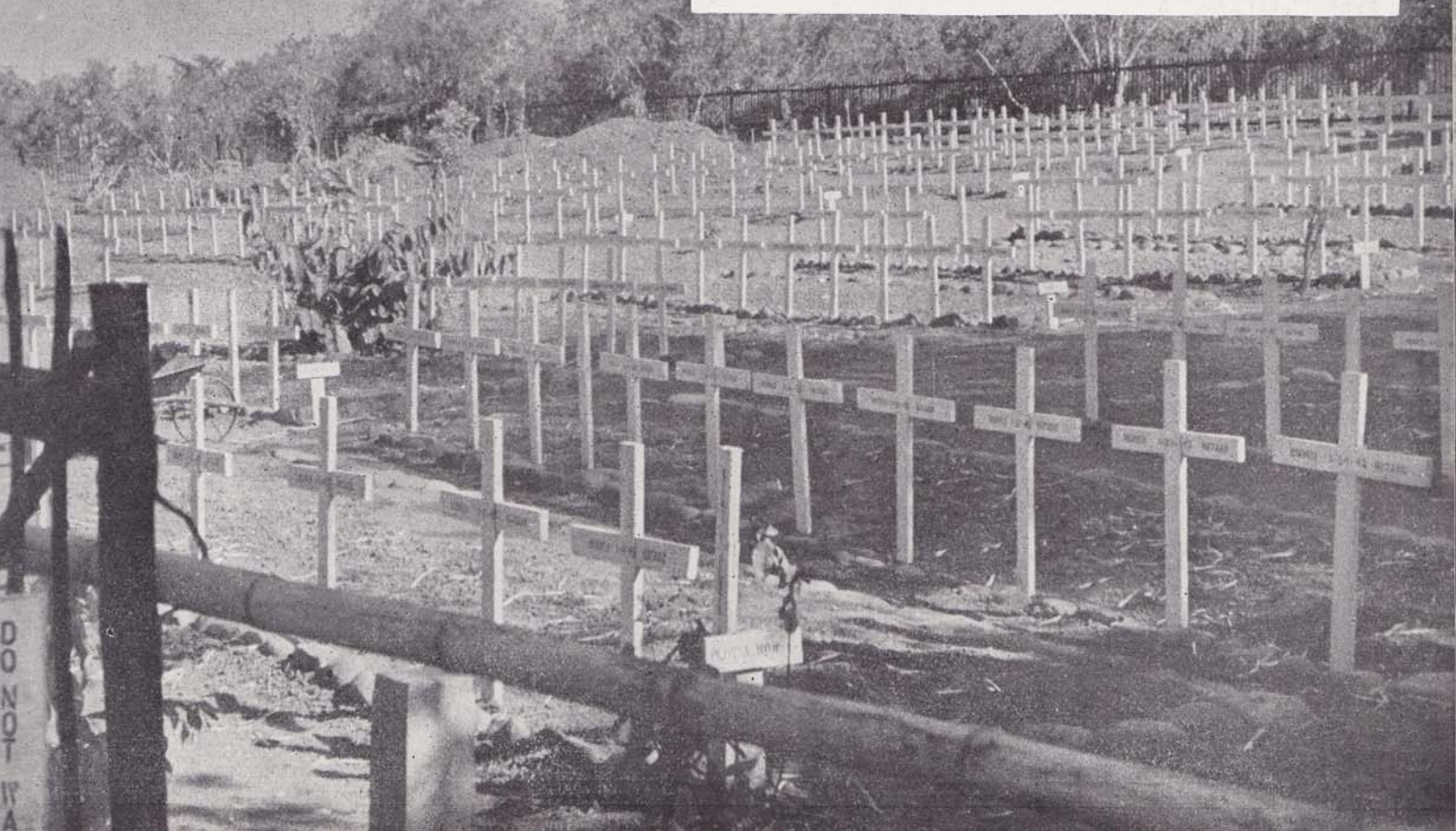


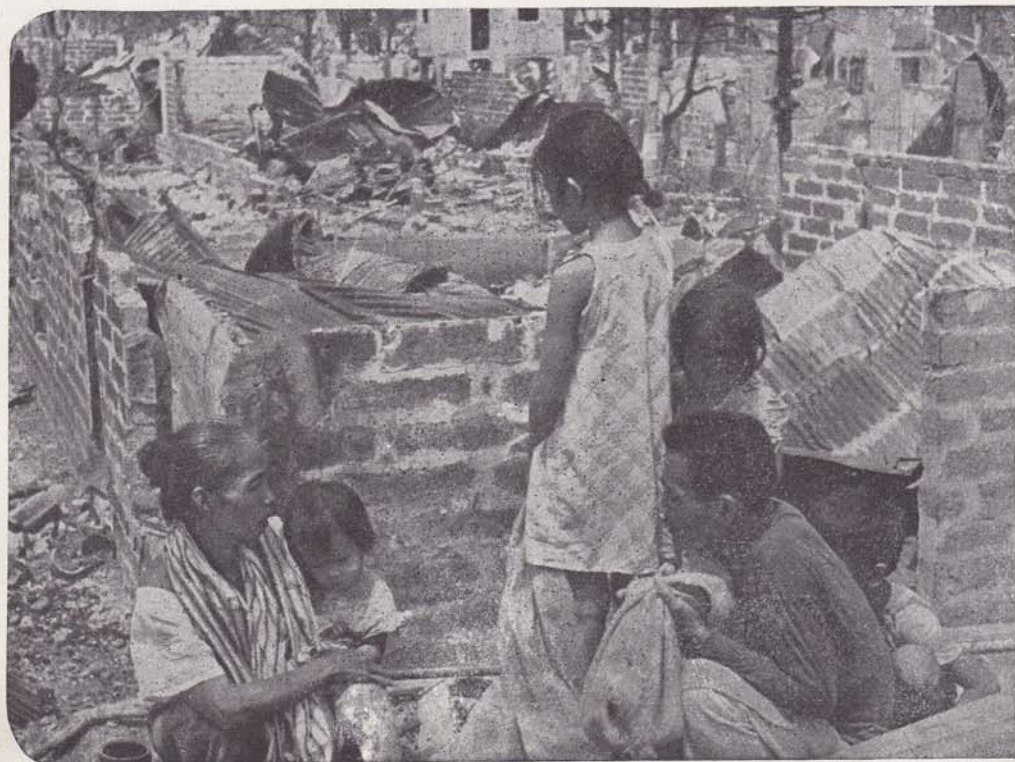
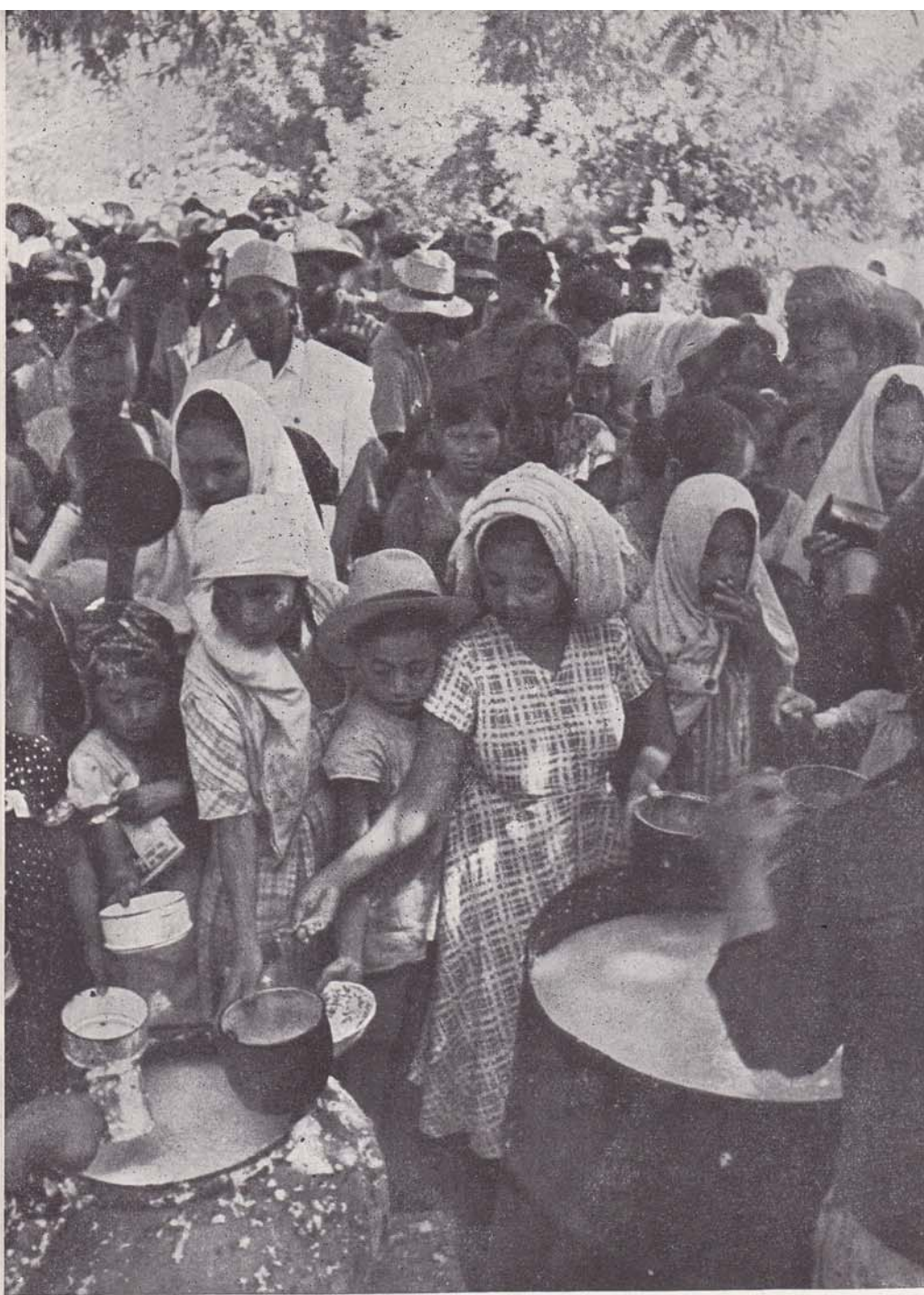


つひにバタワン半島
 ベレスに皇軍は入る。
 て自ら焼かれた焦土の
 る十字架の墓地。敗亡の



最後の町マリ
 敵の手によつ
 町。しづかな
 の時がある。





てゐた難民たちの前に、皇軍のあたたかい手
がのべられる。笑ひを忘れた顔にしたいに笑
ひが取りかへされる。この一杯の湯気の立つ
飯は大いなる共榮のこころを語つてゐるので
ある。

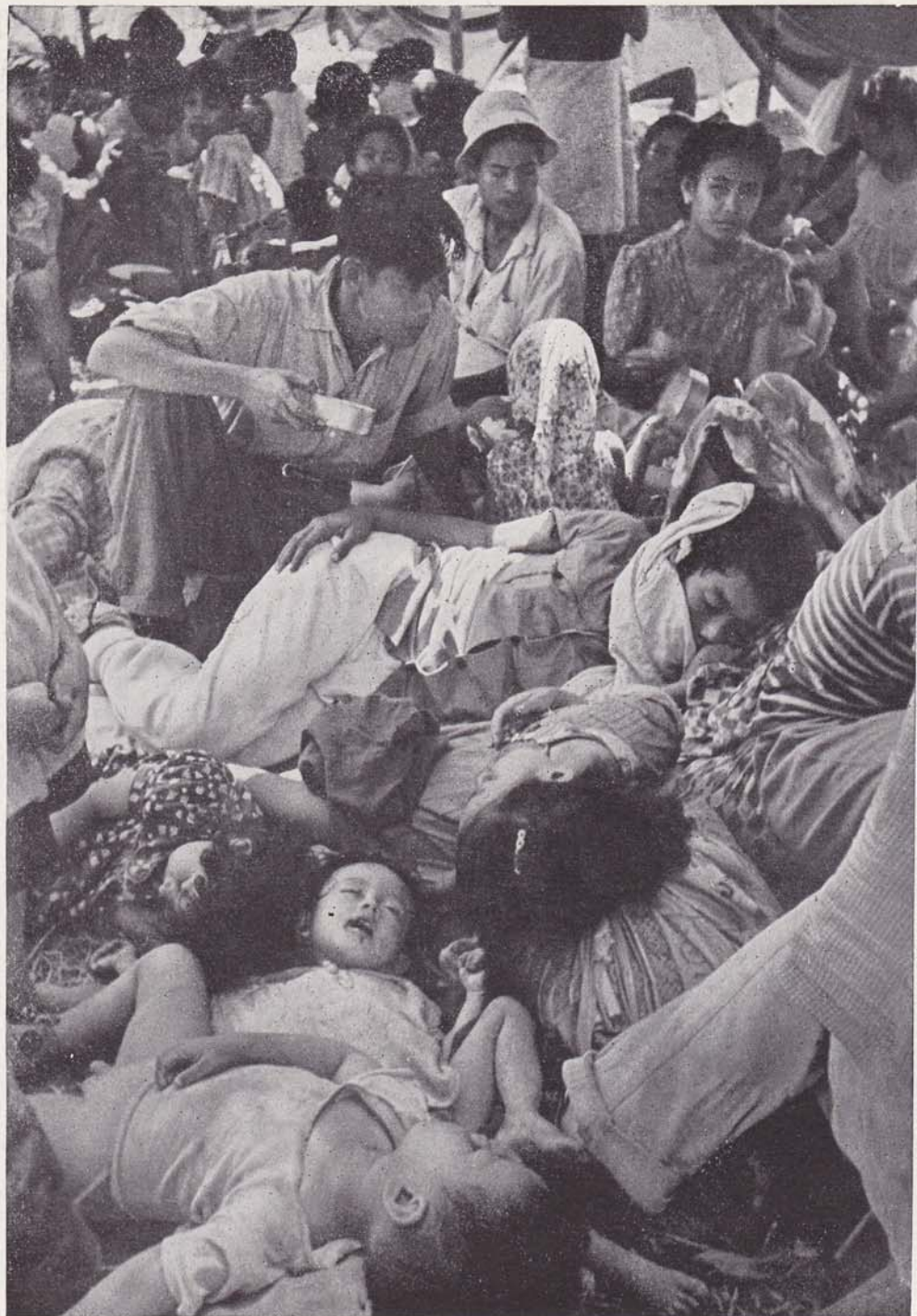


新しい標語の下に施米を受ける難民





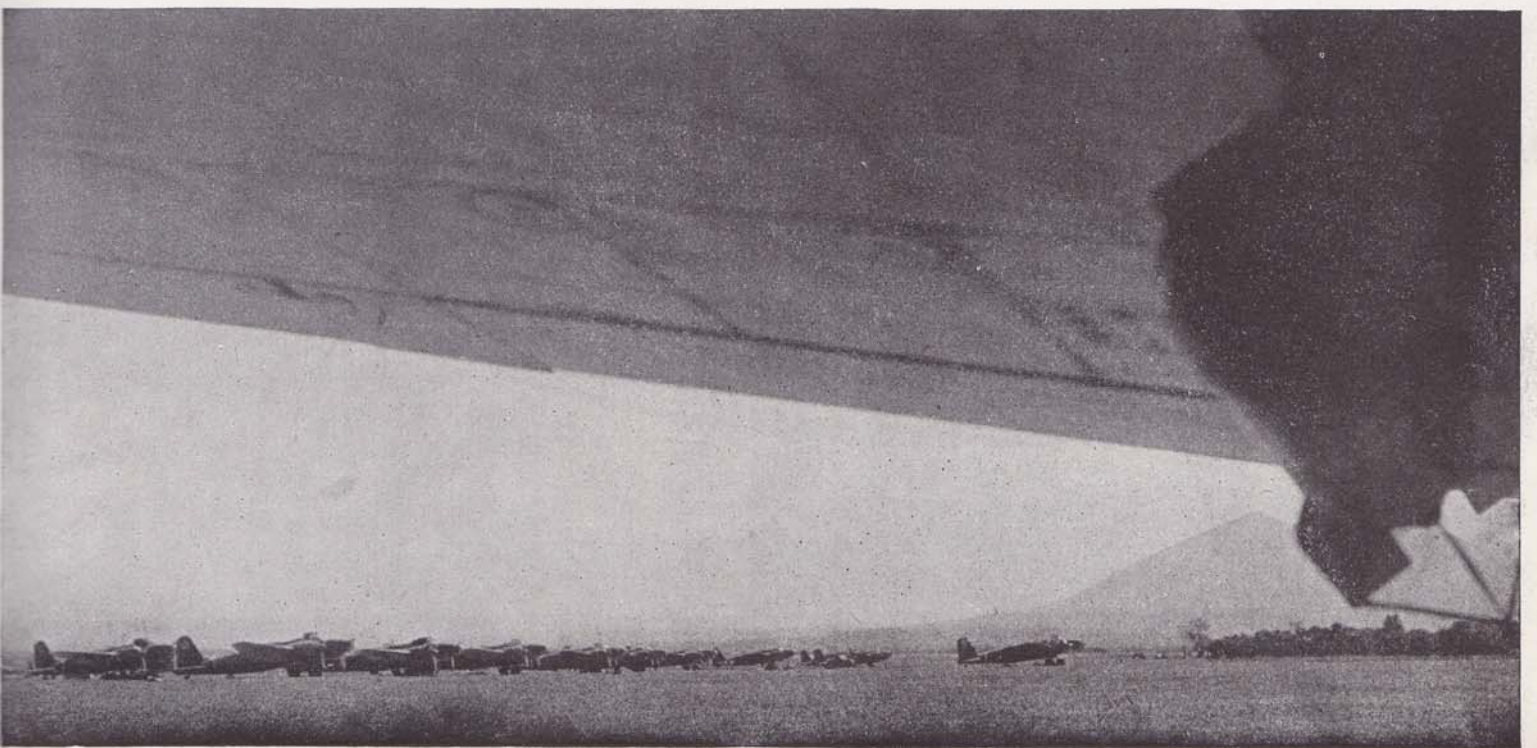
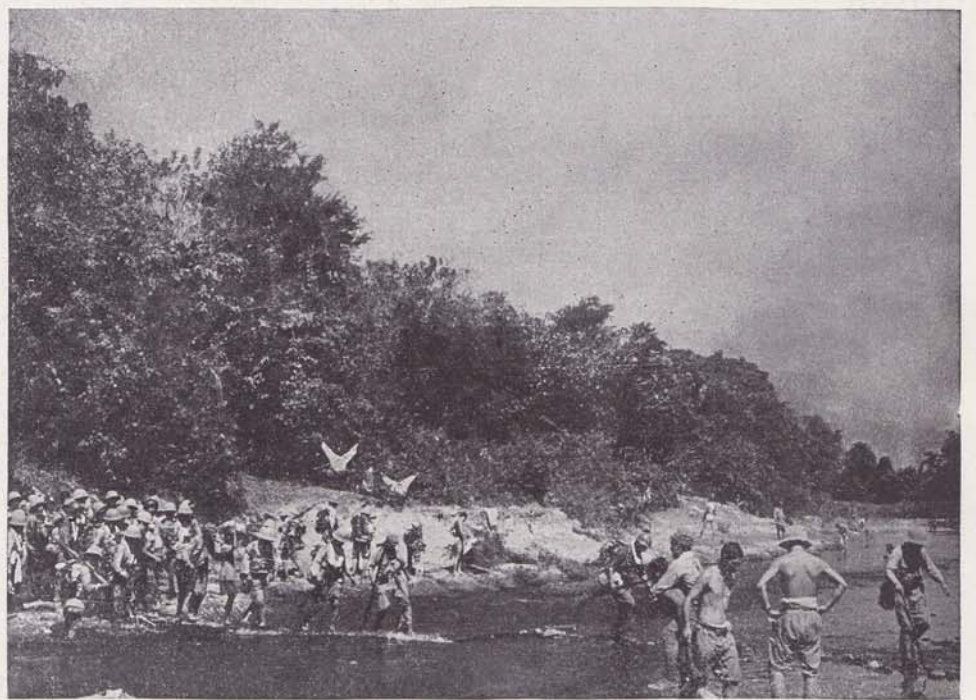
いま避けがたき一つの結果として、戦場の一隅にかれらを見るが、やがて皇軍の救ひの手によつて、彼らも再生の日を仰ぐことができるのである。



戦禍に追はれる住民たちは戦線のいたるところにその哀愁の姿をさらす。急ごしらへの部落がいたるところに作られ、その日の運命に身をまかせる營みがされる。



砲弾跡に陥込んだ敵トラ
ツクの傍を行く砲兵隊、
渡河する歩兵、基地に待
期する荒鷺、爆撃行補強
劑を飲む機銃手とこれら
の姿にこの戦の立體面を
見やう。



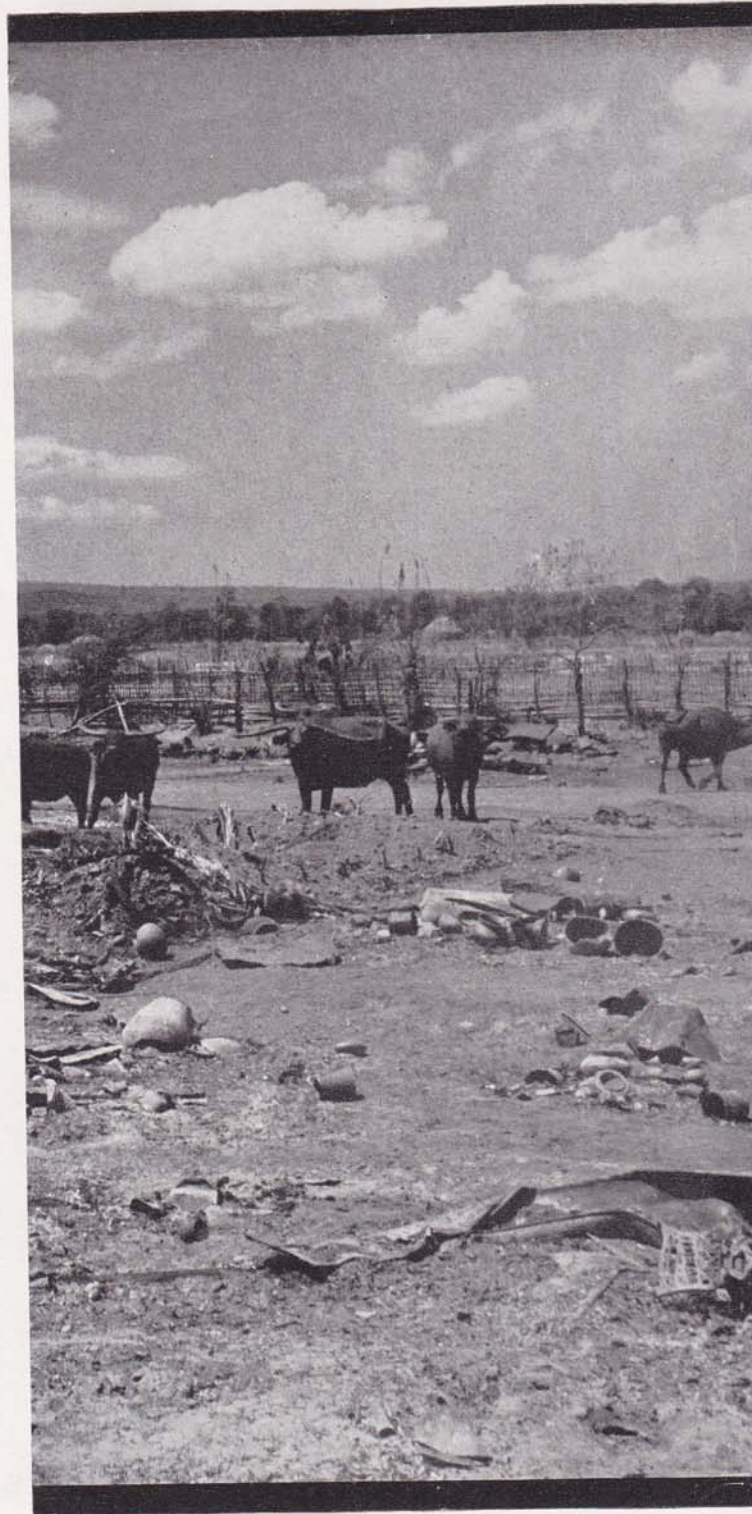


米軍の焦土戦術は全ての町々を焼
野として我が軍の進撃を阻まふと
したが、我が軍の進撃は一步ごと
に鹵獲兵器の山を増して行つた。







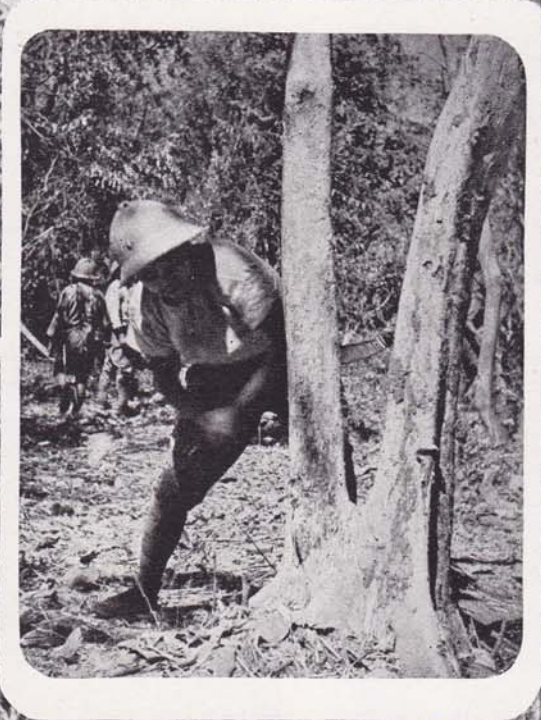


炊事の煙。あがあかと照らし
だされる兵隊たちの顔にたく
ましい微笑がある。廢墟に所
在なげに佇む牛たちの姿に戦
場の哀愁がある。行手にそび
ゆる敵の山と山。



藪と川と谷と海とある廣大
な戰場。バタアン作戦はその
やうな複雑な地形のなかで闘
はれた。大砲はいくつにも分
解され、道のなき溪流をはこ
ばれる。五間さきは見透しの

できな...



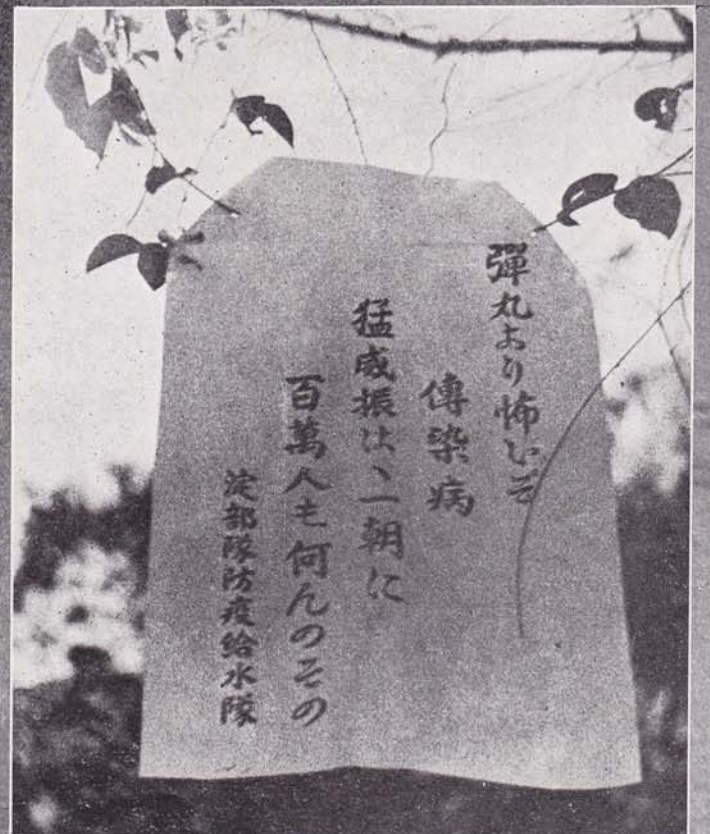


マリベレス山中三十米余の大木上にある砲
兵観測所

左頁 台湾高砂義勇隊の活躍には目覚しいもの
があつた、ここでは道路開鑿状況を組み
入れ当時の山中生活を忍ぶ。



眼をあけることもできない。口のなかにとびこむ灰。この黄塵をかきわけて清澄なる歴史の道へ出づるのである。火山の熱情をはらむバダアン半島の地熱を踏みしめ踏みしめ、馬と人と車との洪水。





戦と進撃の合間ジャン
グルの中に寫眞班員が
つかまへた曉の炊事と
木の股の間からのユー
モラスな敵状偵察、静
かなひととき。





空を野を山を掩ふ世紀の進撃

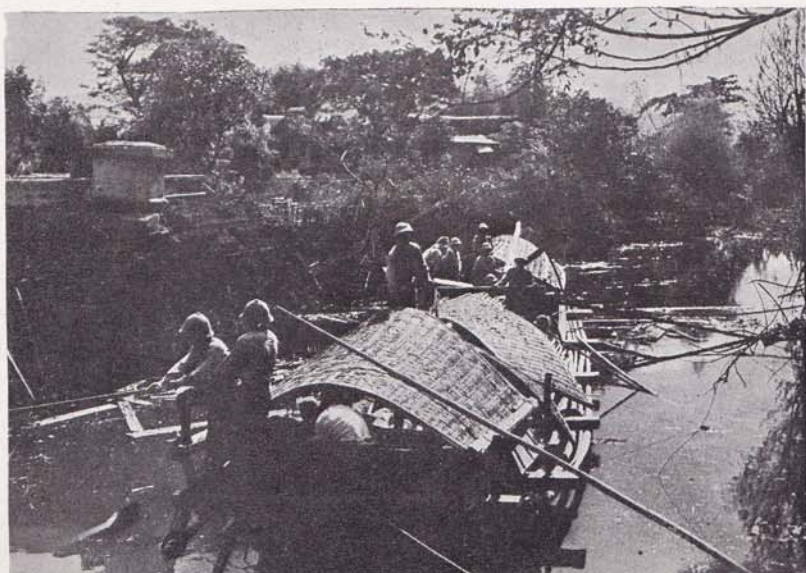


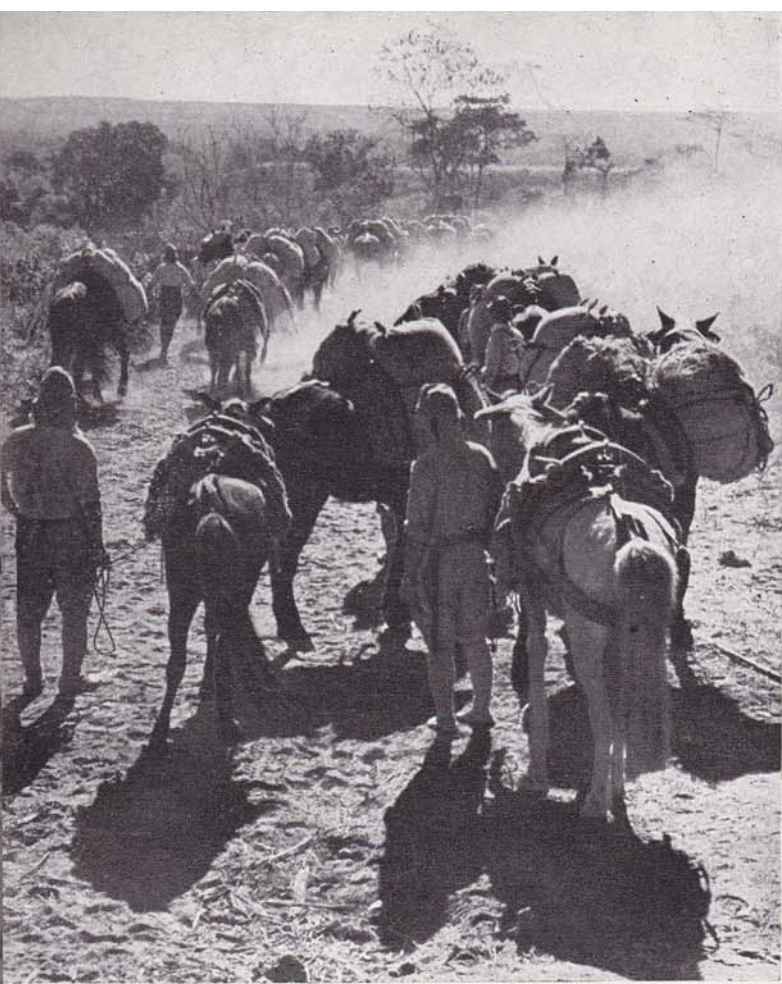




空をも地をも掩ふ世紀の進撃。炎熱。舞ひあがる灰神樂。バタアンの敵を南へ南へと壓縮する。天にとどろけとばかりの歡呼。萬歳！

左頁、オリオンの敵陣奪取







總攻撃を前に補充兵に訓示を與へる奈良閣下於アボアボ河畔

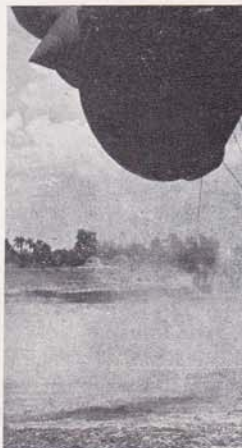


總攻撃を前に全ての兵が馬が車が砲が前線に向つて動き出す。



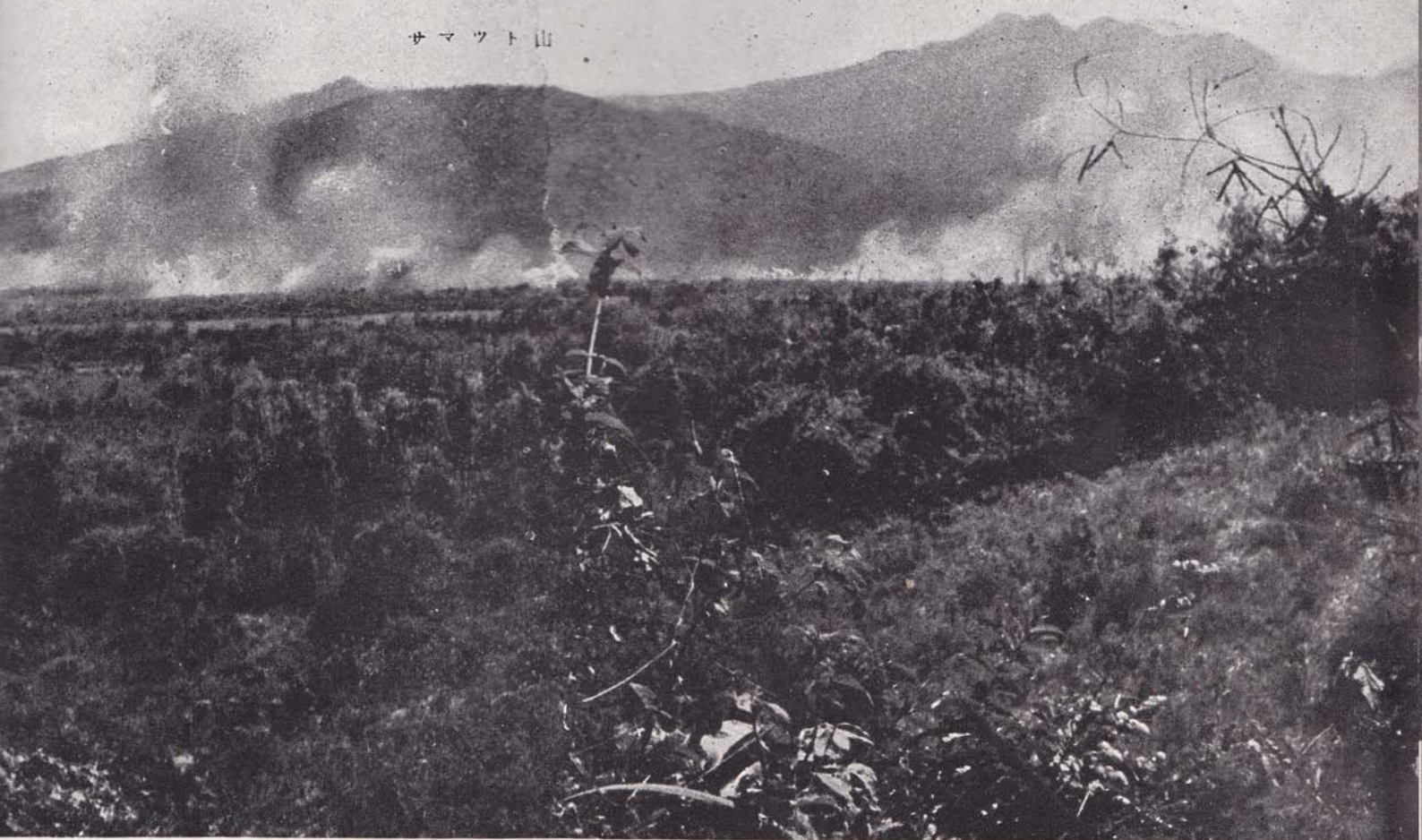
オリオン

全體が火薬のごとく鳴りひびき焼
け世紀の硝煙が天を掩ふ。



マリベレス山

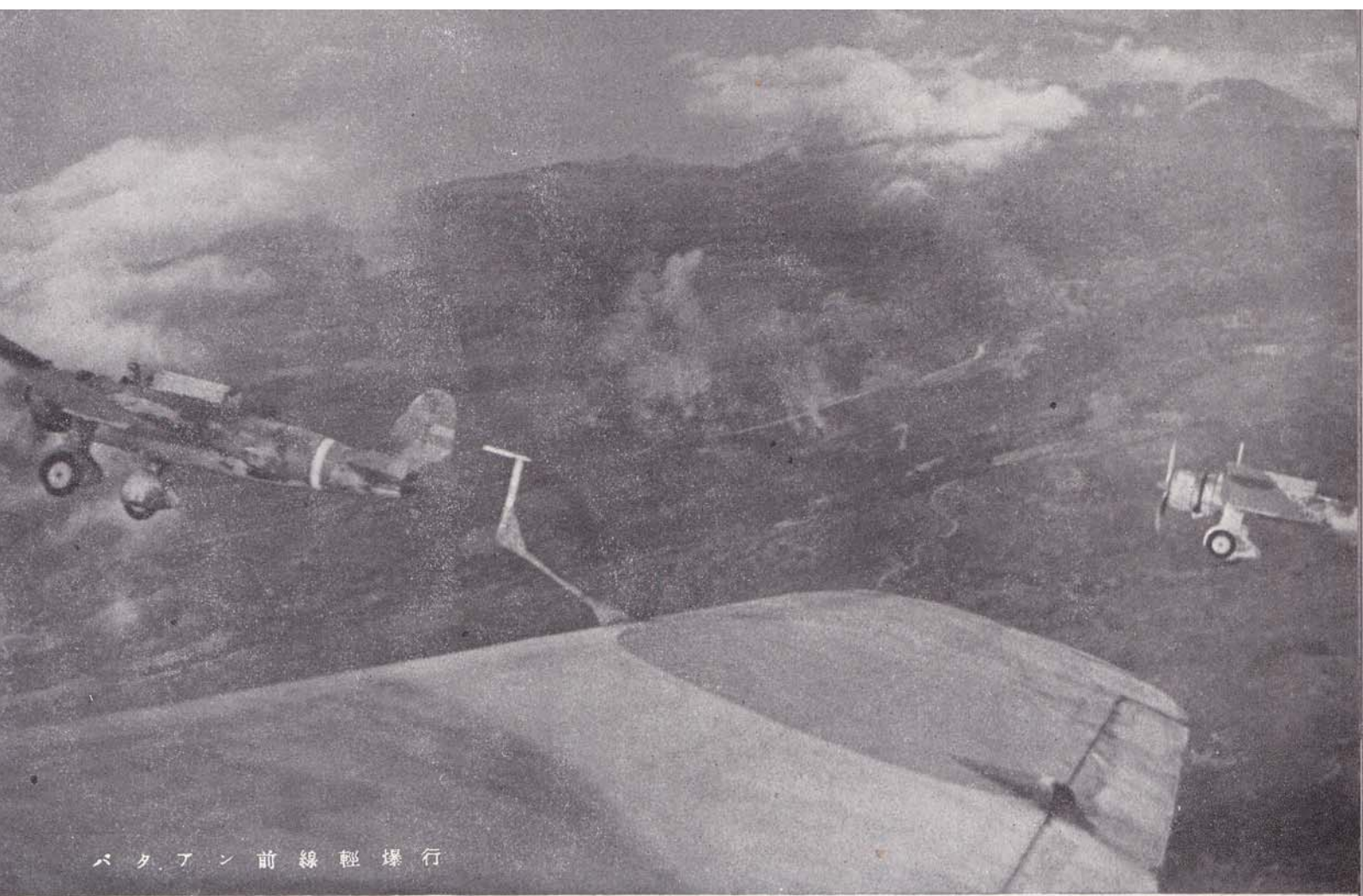
サマツト山



四月三日、神武天皇祭、總攻撃の火蓋が切つて落された。日本軍







バタアン前線輕爆行

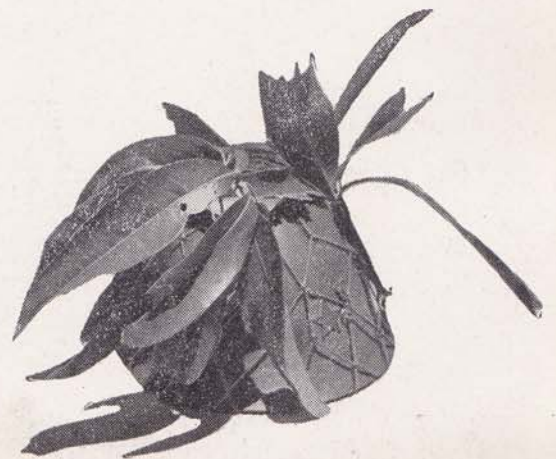
左上 ジヤングルを征く戦車

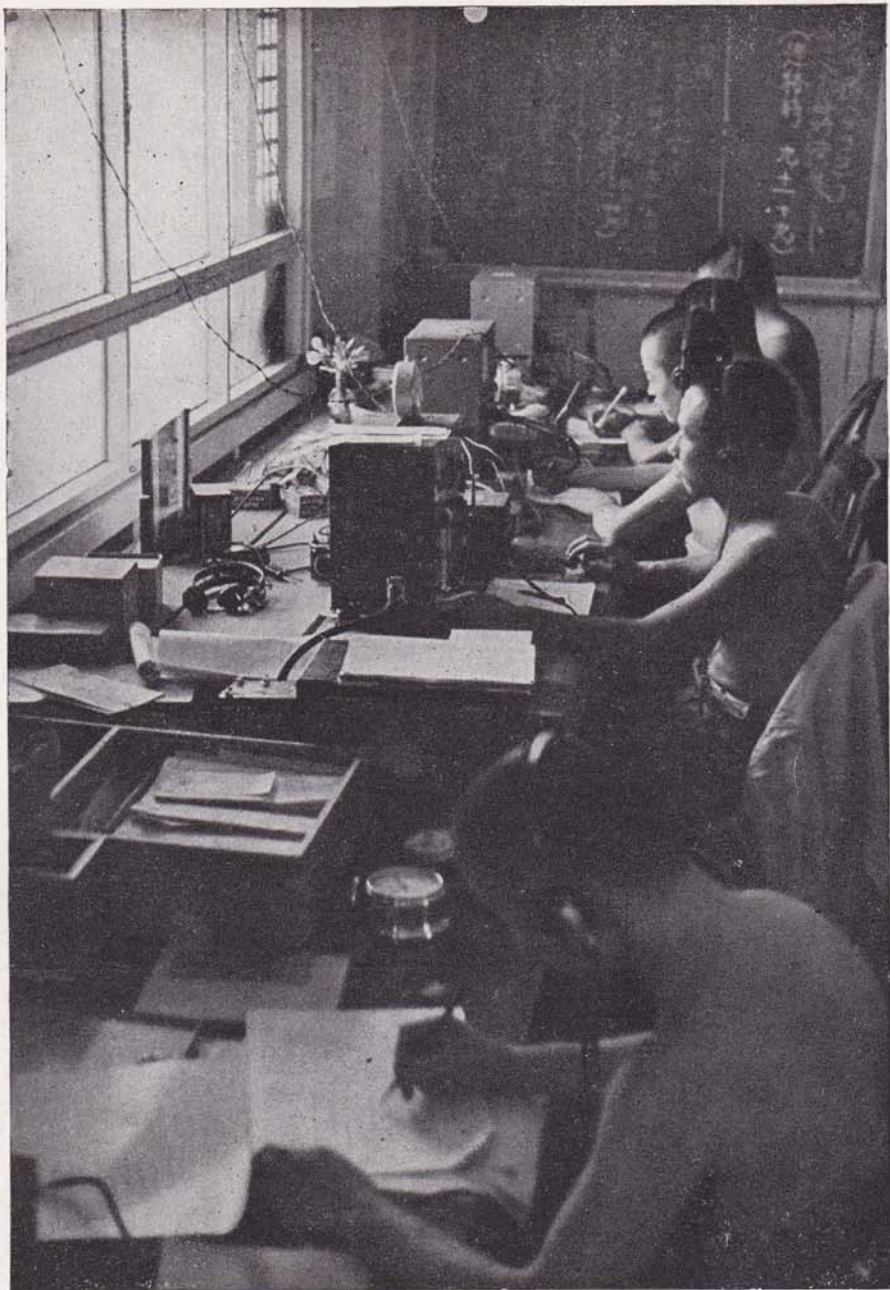
左下 マリベレス山麓の我が砲兵陣地



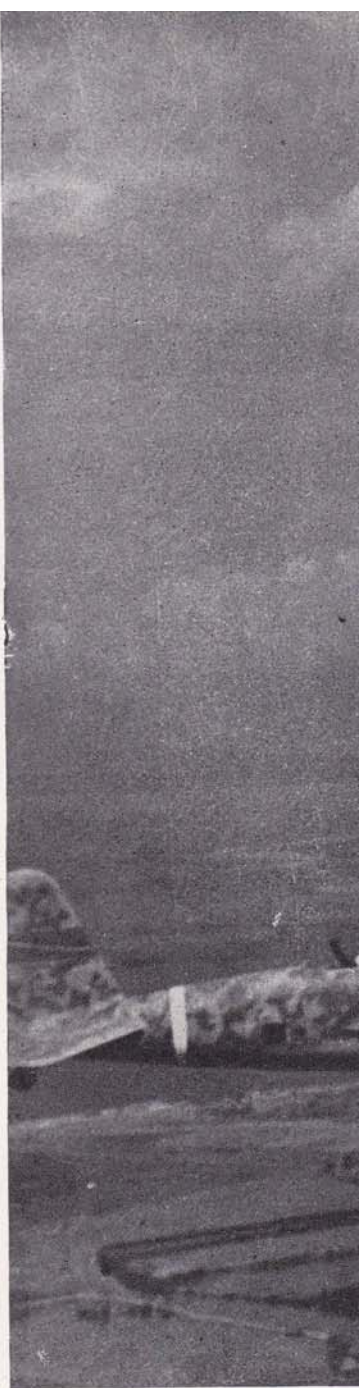
マリベレス山麓にて前線状況を聞く宣傳班

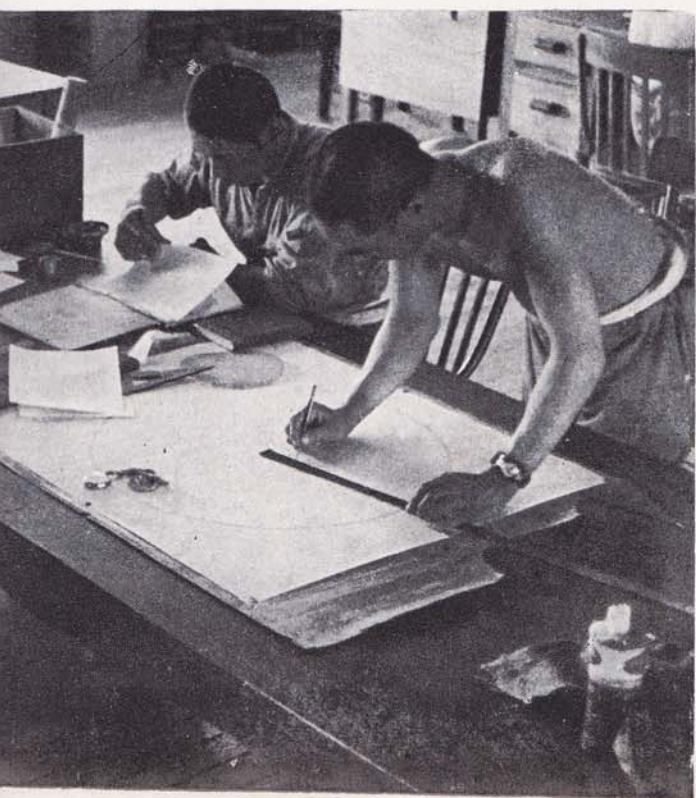
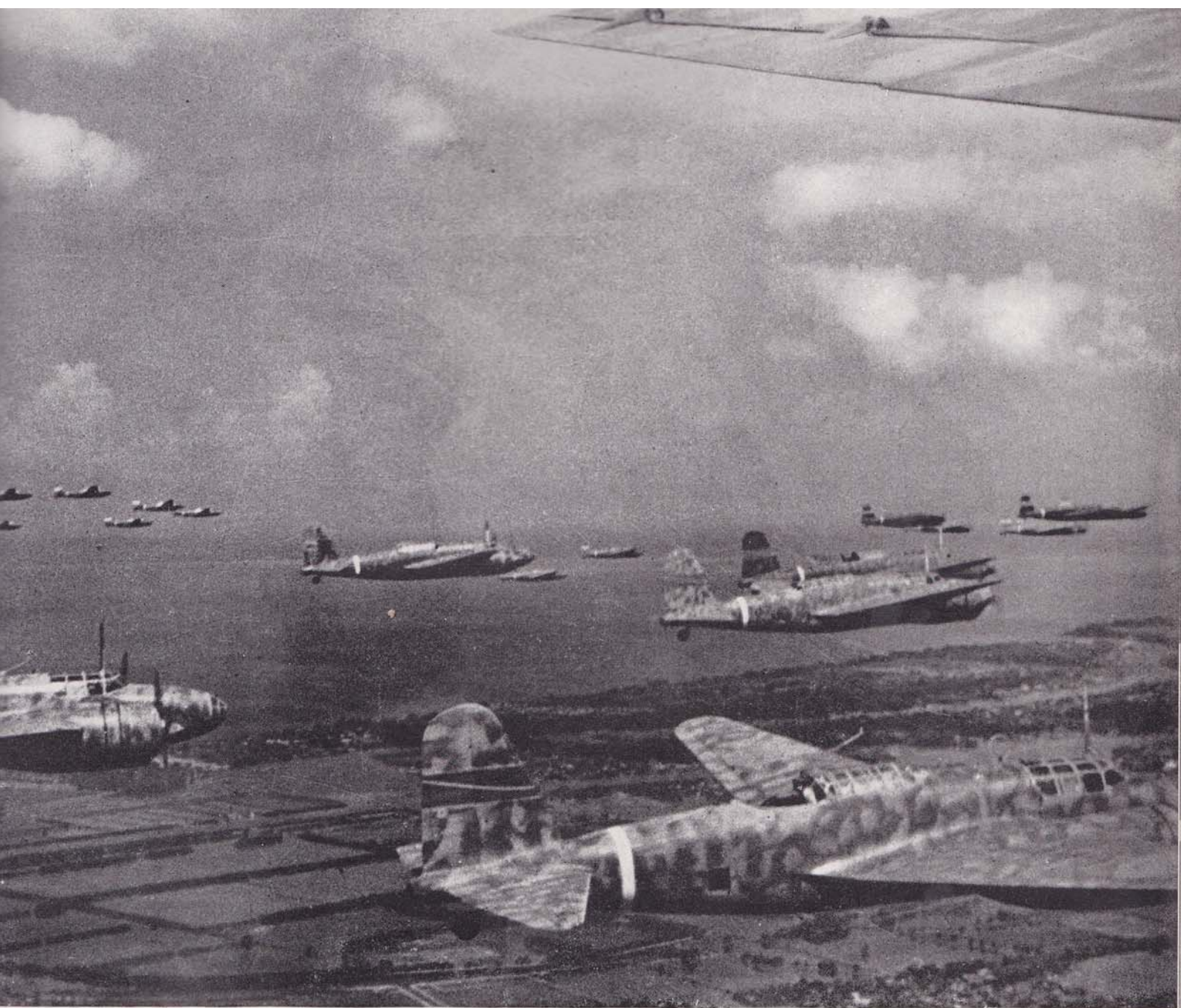
聯隊旗を中に山中生活





於
ク
ラ
ツ
ク
フ
イ
ー
ル
ド
気
象
観
測
隊

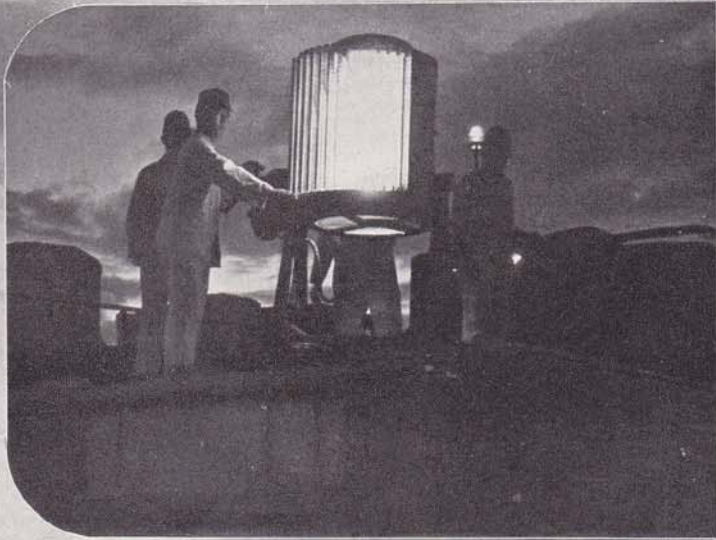
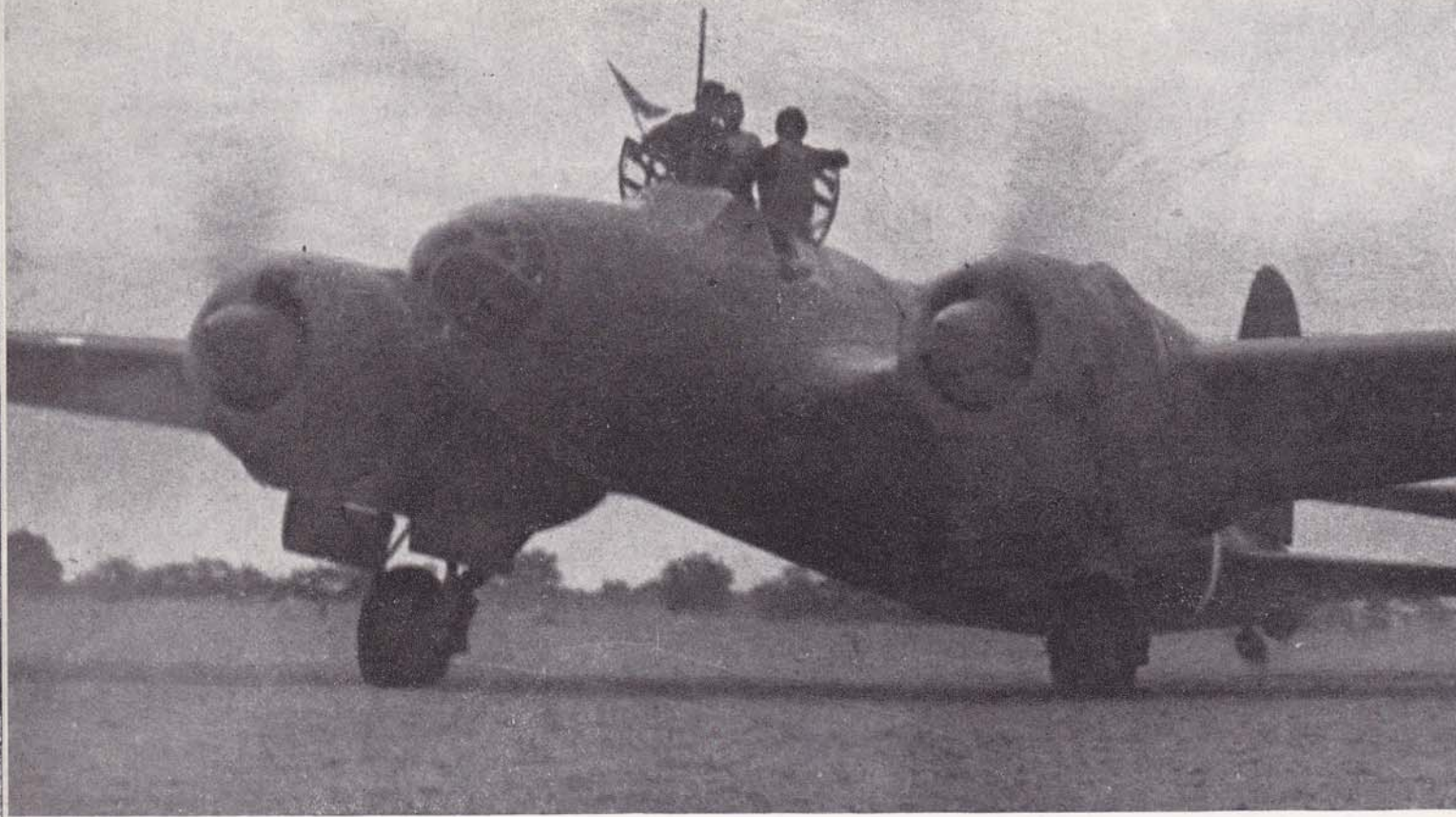




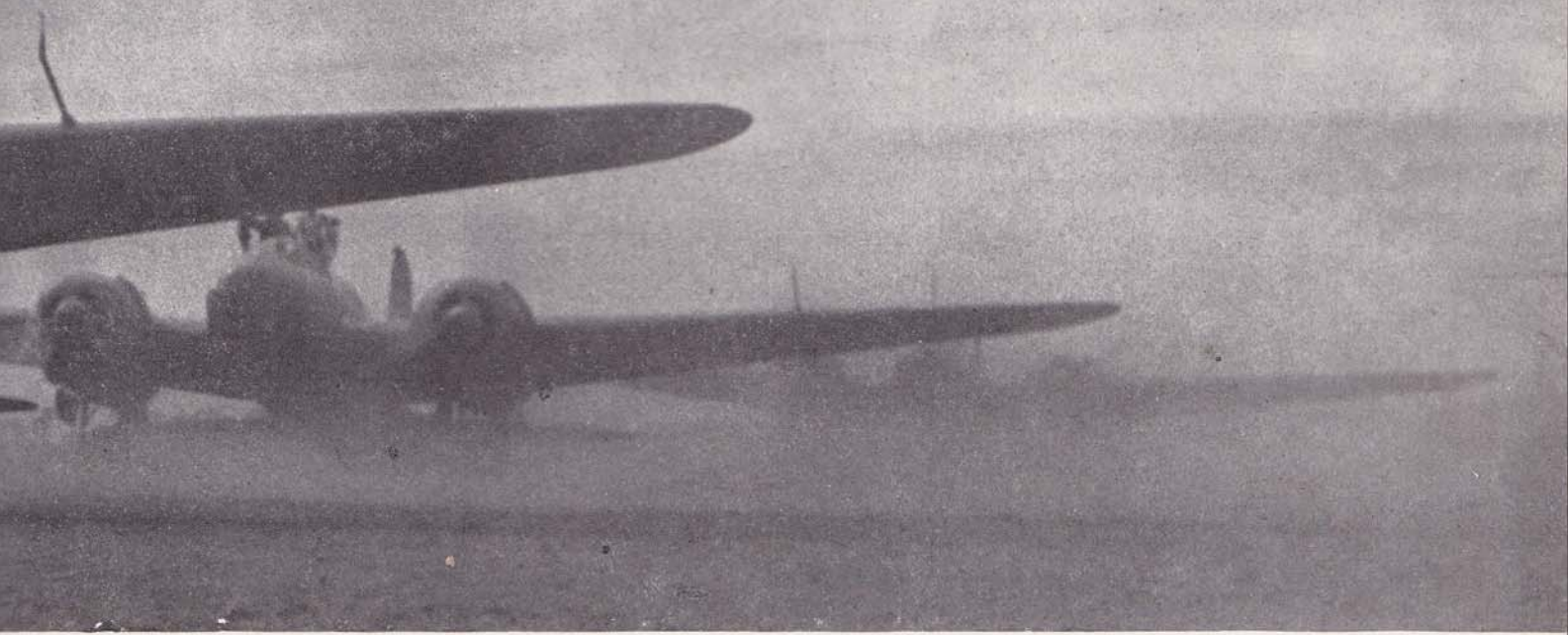
氣象圖の作製

荒鷲がその戦果をおさめる際に、これを助けるあらゆる努力がささげられる。





きらめく銀翼のもとに潜伏する敵陣。爽快なる意志をもつて落下してゆく焼裂弾。大空を飛翔するますらをの精神である。



左下

夜間飛行用意

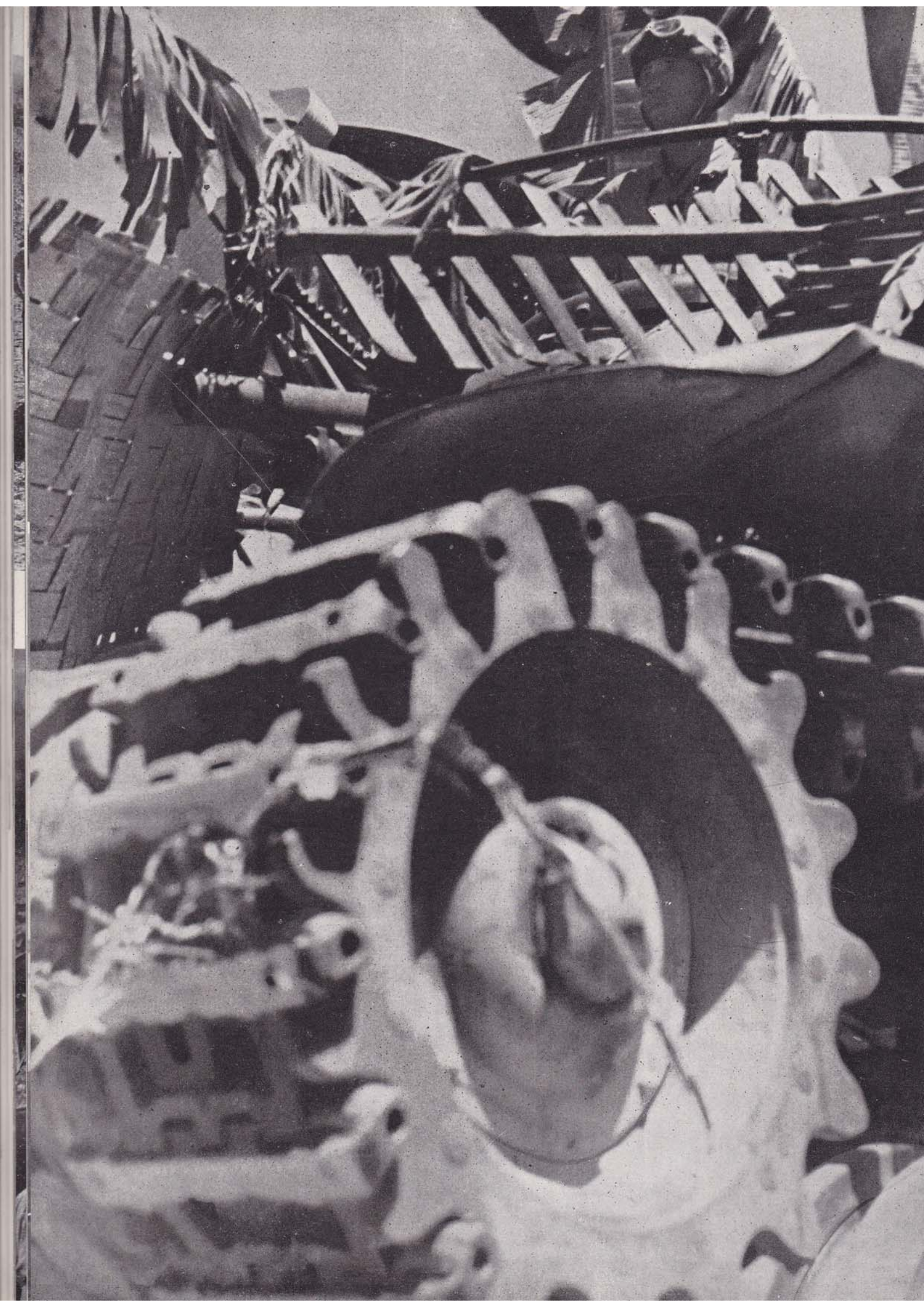
下

水平爆撃、爆弾投下

上右

出発、地上整備員の見送り







總攻撃の前陣地構築
に道路開鑿に通信隊
の作業に、酷熱との
闘ひがある。



汗

道なく橋なく

山深く

熱風百度の行軍に

口糧つきて

水のみぞ

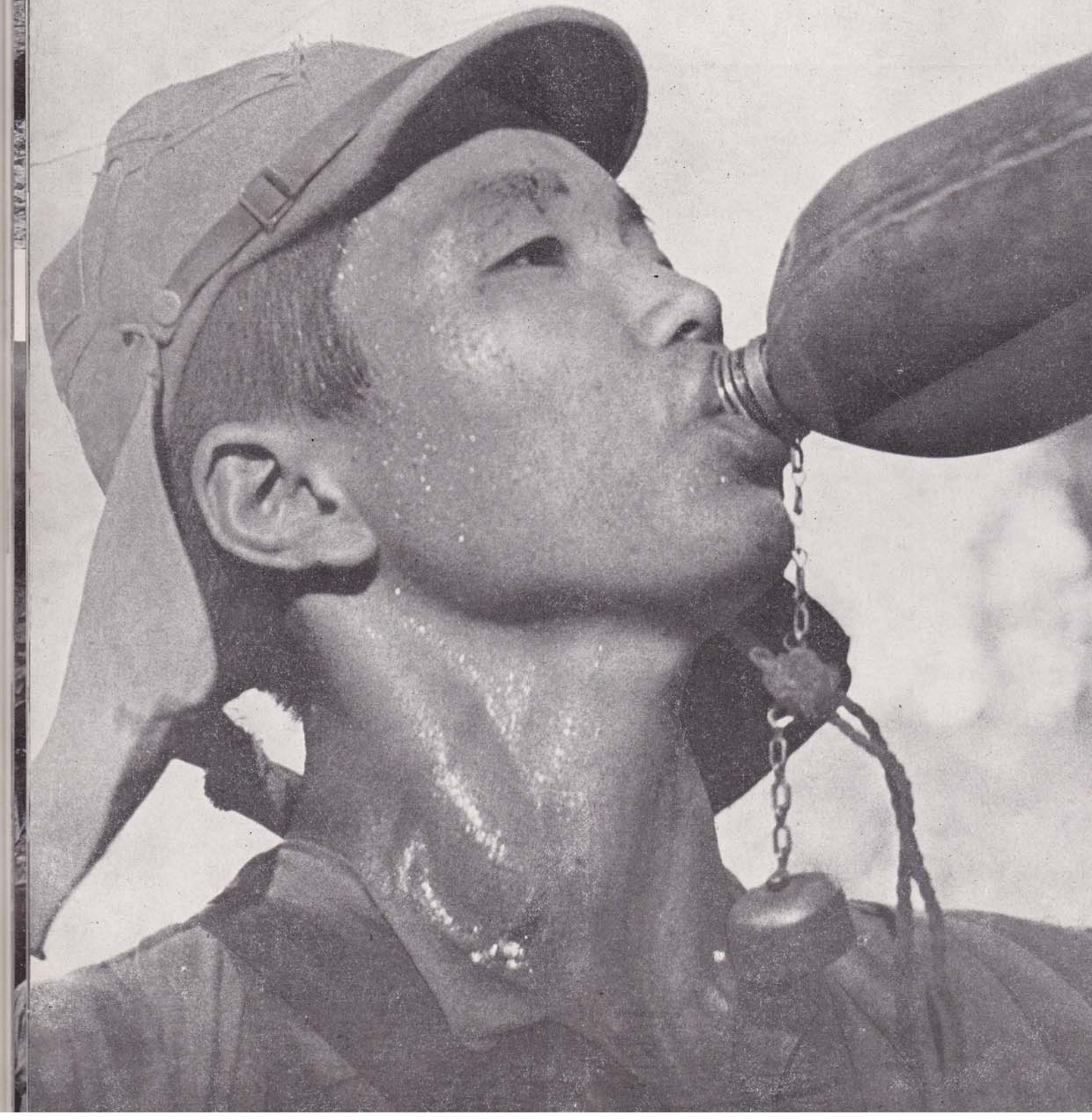
すすりて進むつはものの

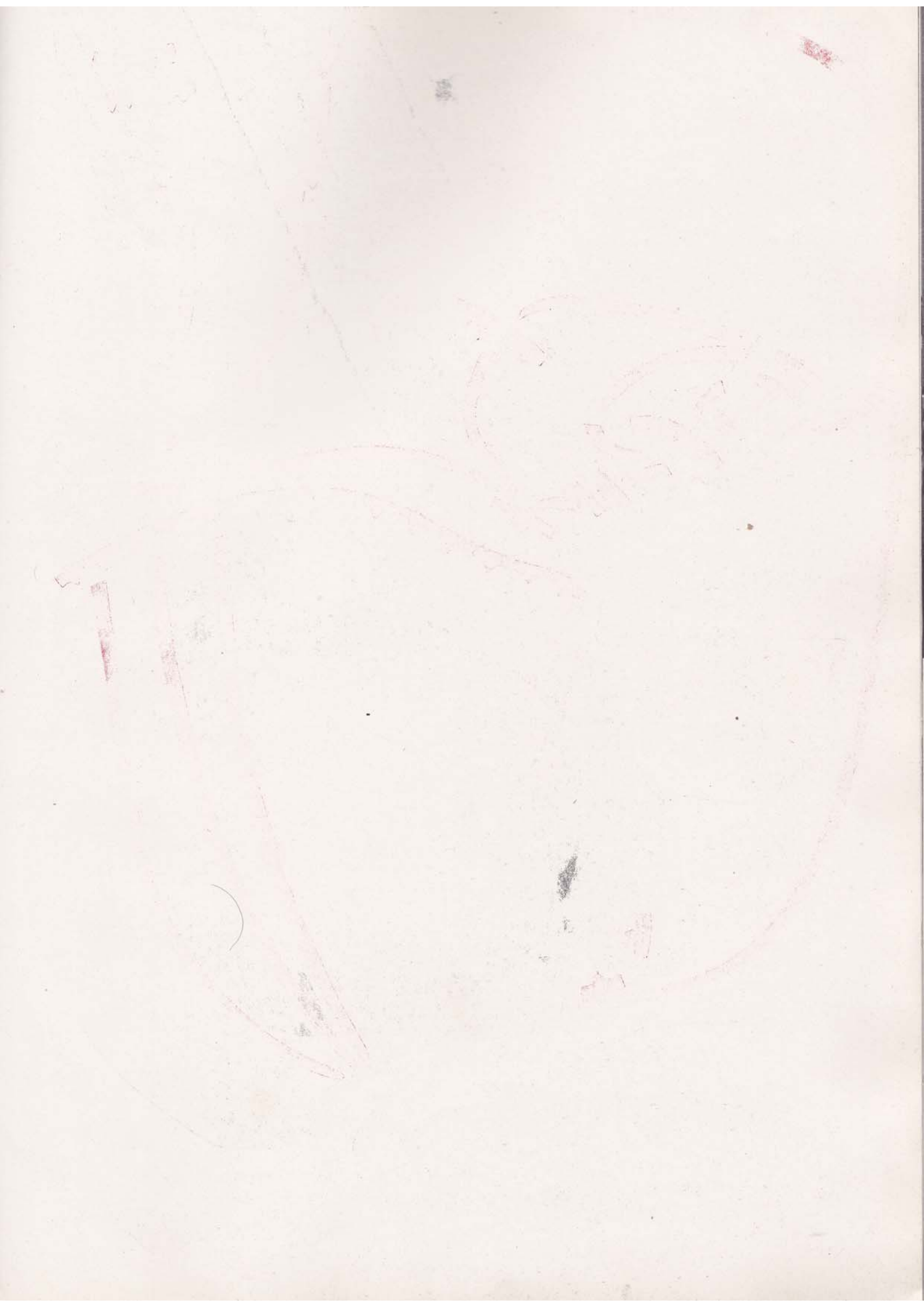
灼くる兜に

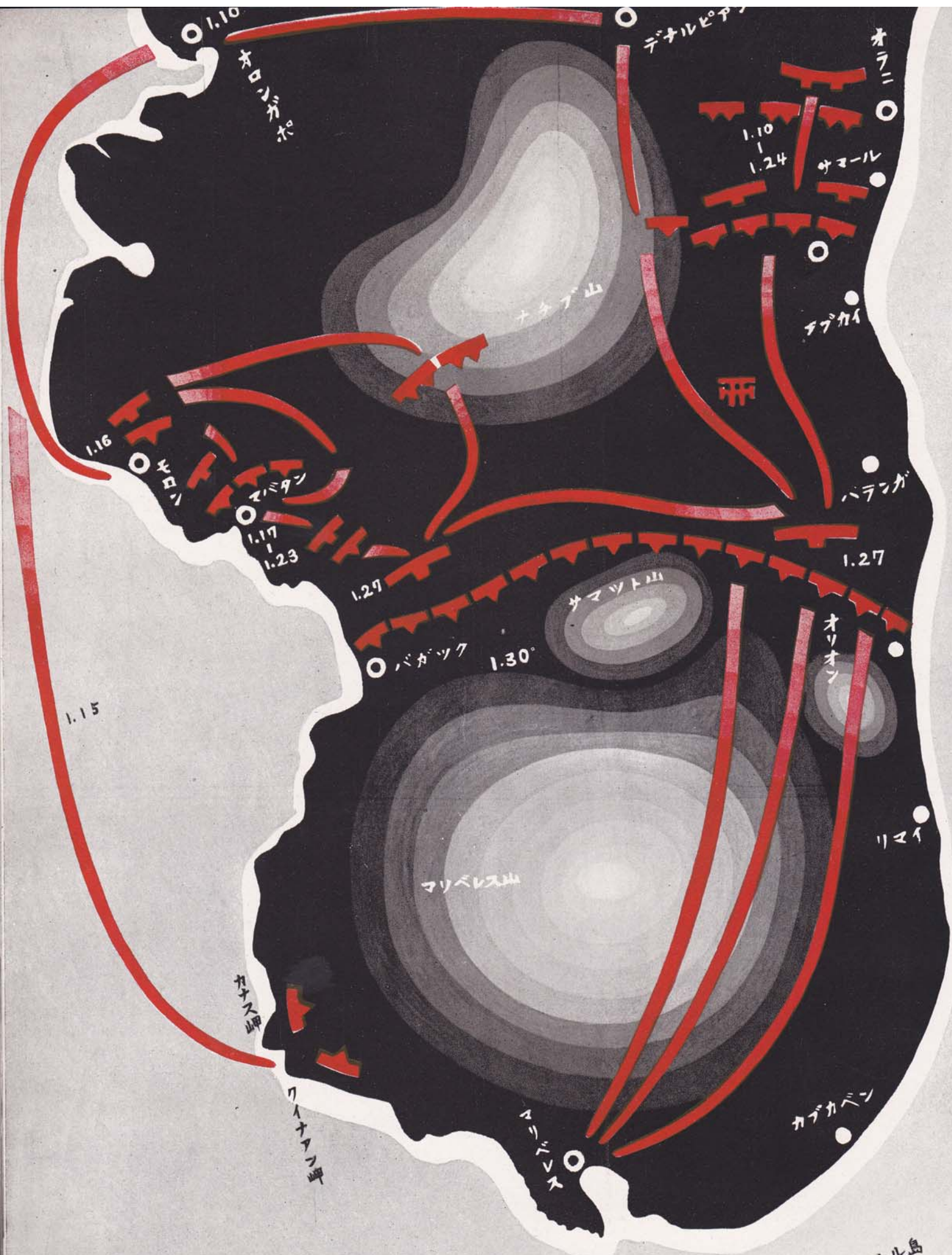
ほとばしる

玉なす汗の

雫かな







バタアン 作戦圖





ナチブ山を中心としたバクアン半島前半部の戦ひが終る頃マ
ラには建設の響が賑ひ始めてゐた。

だが戦は全く終つたのではなかつたのだ、戦と建設の間に深
い思慮を持つた時が秘められてゐた。

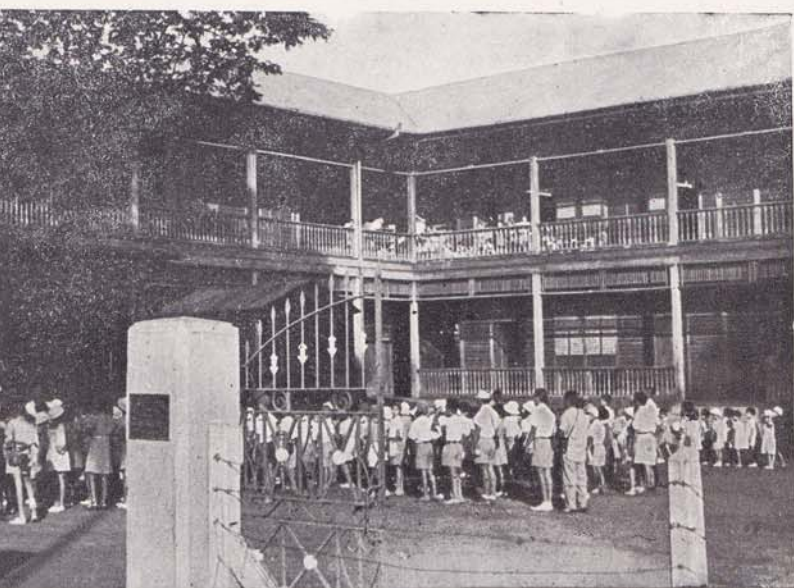
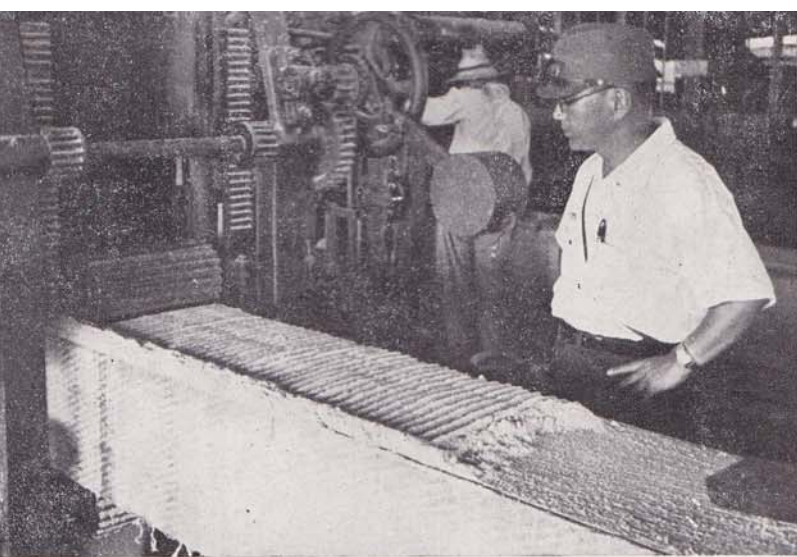
兵隊の靴は次の戦場サマツト、マリベレス山の敵陣地に向つ
て間断無く動かされてゐた雨の無い季節に熱砂の上をジャング
ルの中を、支那の戦場で泥濘にまみれた靴の形相は比島では
黄褐の粉をふいた煎豆の様に焼かれ乾きあがつてゐる。

あらゆる場面における建設のいふき開花
 のにほひフィリピンの國花サンバギタ
 のうつくしき装ひに平和の象徴がある。



六月カバナツアン、バタンガス等の鐵道開通。





ピン華僑大會。

左中央下

日華協力を誓ふフィリッ

學校の開校。

左上二枚

ダバオ製材工場の復活と小

初地方長官會議が開催され街には新しい標識に新しい文字が、脈うつ戦の中の建設を物語り初めてゐる。





地球のうへに印せられる巨大な創造の足あと。正

しき剣の後につねに生れて来る歡呼のどよめき。

地圖はあたらしい歴史として塗りかへられ、日本

の心を印刷せる使ひの紙片と聲とは民衆のなか

に送られる。乙女らの微笑のなかにもわれわれは

東洋の得た新しい幸福を讀みとることが出来る。



シンガポール陥落に熱狂する街の人々

二月二十日 本間閣下と行政機關バルガス氏の初會見





戦はバタアンに移りマニラは建設に息づ

上二枚

朝倉機関による居住證の發行

右下

大東亞廣場に掲げられた大東亞
圖に拍手を送る民衆

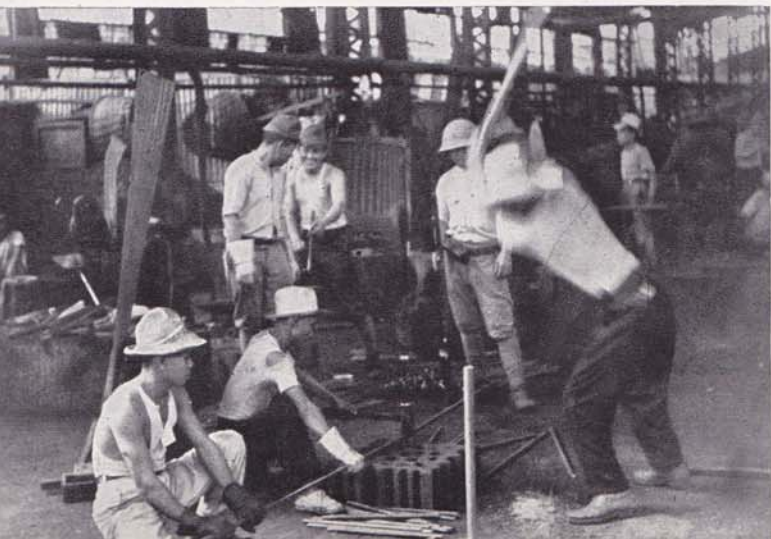
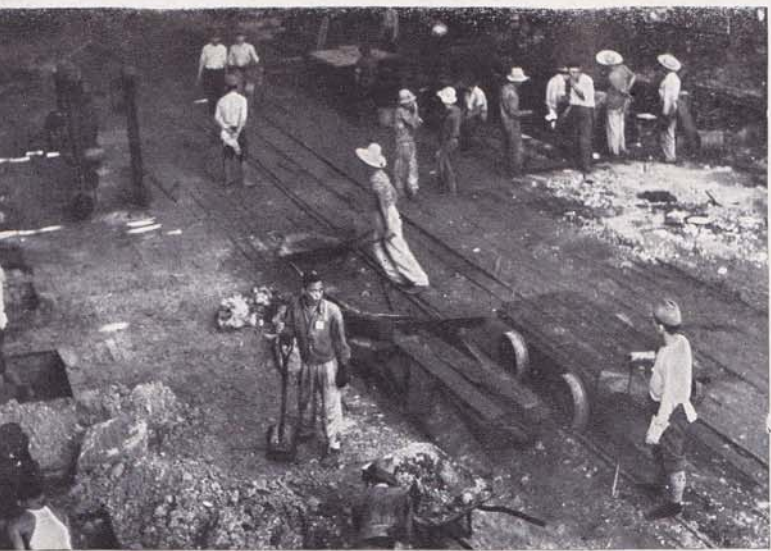
左下二枚

キャツボ寺院聖金曜日の賑

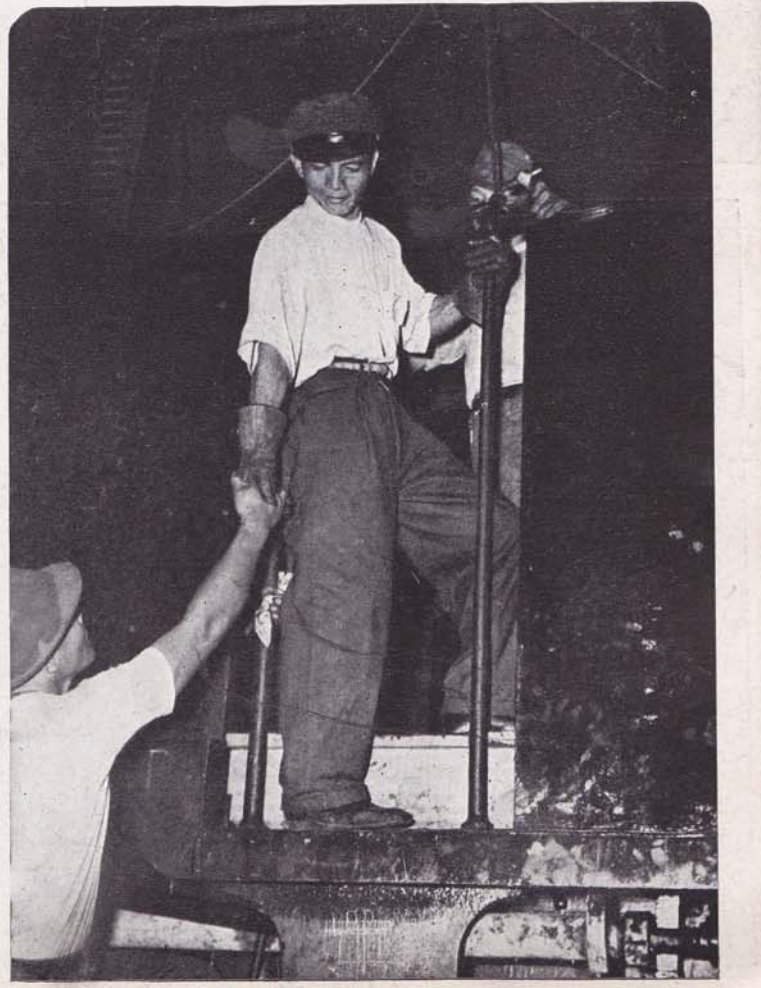




ソリック宗教班のマ＝ラに於ける初彌撒



カロカンの鐵道工場の建設





一月二十三日 於 マラ 舊高等辯務官官邸、行政機關成立式



一月三十日在留スイインフランコ派婦人團誌の兵站病院慰問

の事業が進む。剣と笑ひとが交錯し、その大いなる綜合のなかに真に目ざすべき最後の建設の芽生えがある。



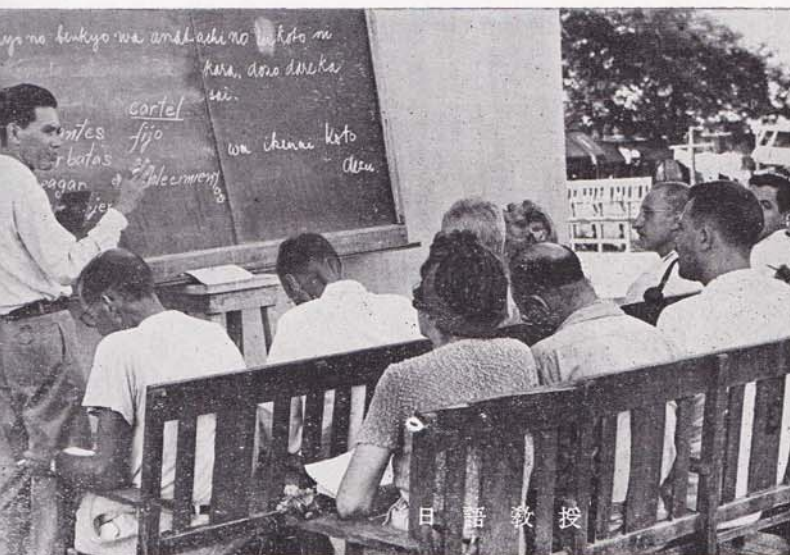
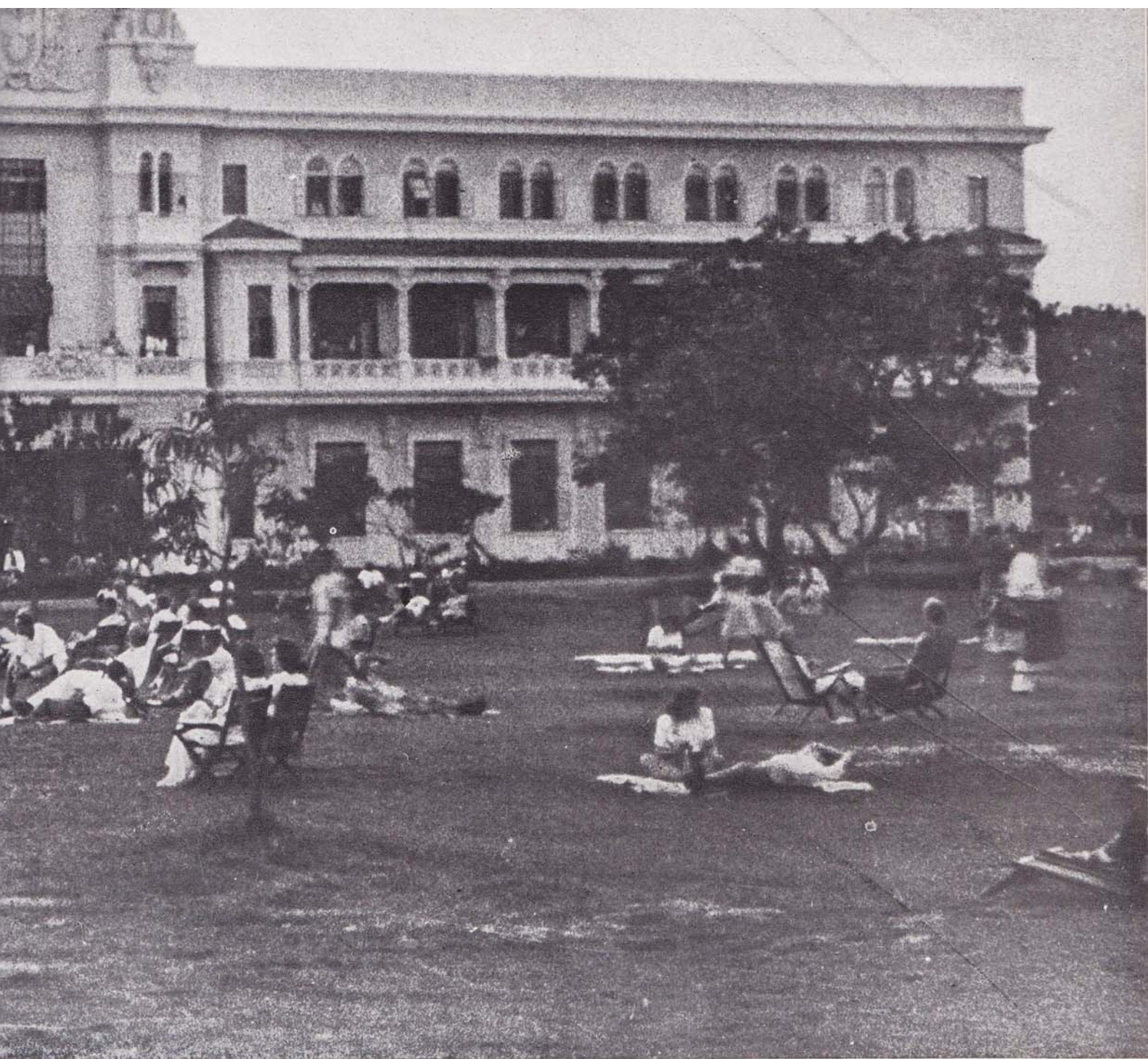
二月二日軍政部主催行政機關要員招待晚餐會

比島作戰の規模の大きさはその複雑な状態において現はれる。一方に戦場があり、一方に建設がある。これこそは大東亞戦争の象徴であり、縮圖でもあらうか。パターンの一角に敵がなほ



日曜にはカソリック信徒の爲に彌撒のサービスがゆるされる

マニラ市サントトマス大學敵國人收容所
 われわれの國を侮辱せんとした不遜な
 る國のひとびとの姿がここにある。これ
 らのひとびとは昨日までは肩を張り、鼻
 を怒らせ、マニラの町を横行濶歩した。
 東洋人の俊秀なる性格と力とに盲目であ
 ったのである。歴史が書き改められる現
 在の時間のなかに、われわれはこのひと
 びとの眞の姿を見きはめなければならな
 いのである。

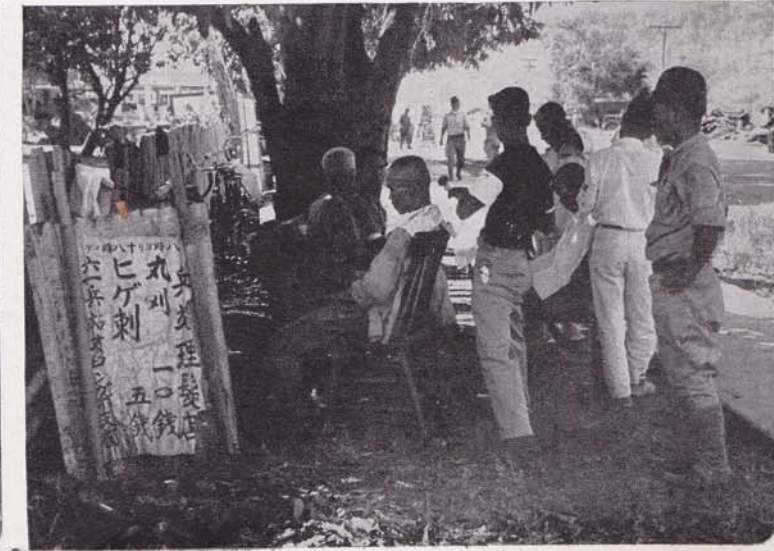
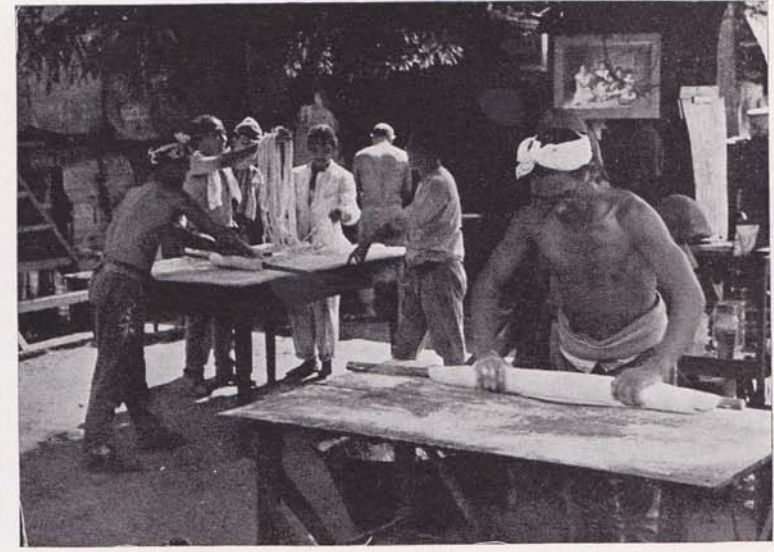
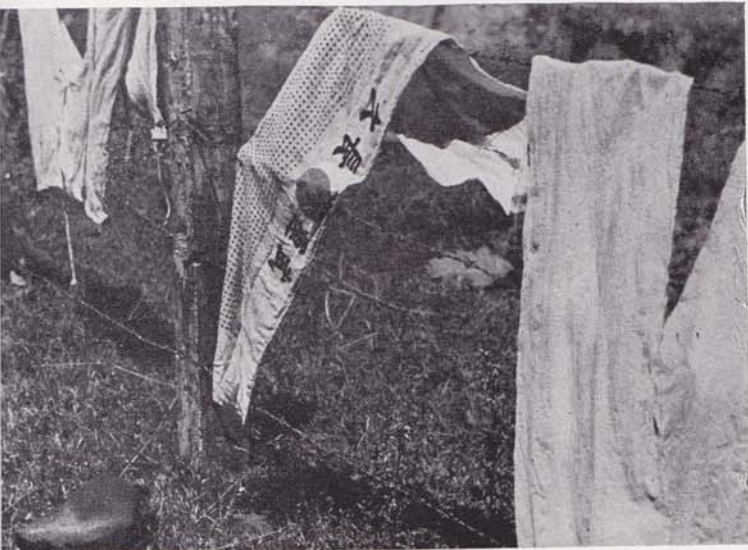




○護送船團

青き空のもと青き海あり、
 船の群れ、舷ふなべり接し、
 颯爽の兵隊つみて、
 この海わたる。
 この船ら、いづくよりか來れる。
 この兵ら、いづくよりか來れる。
 雲わきて八重なすところ、
 陽ひ出でて光りあやなすがに、
 大いなる神の國あり。
 雲はらひ、逆矛さかほことりて
 久米の子ら、
 どよめき出づるよ
 神の船、
 わだつみを渡るよ

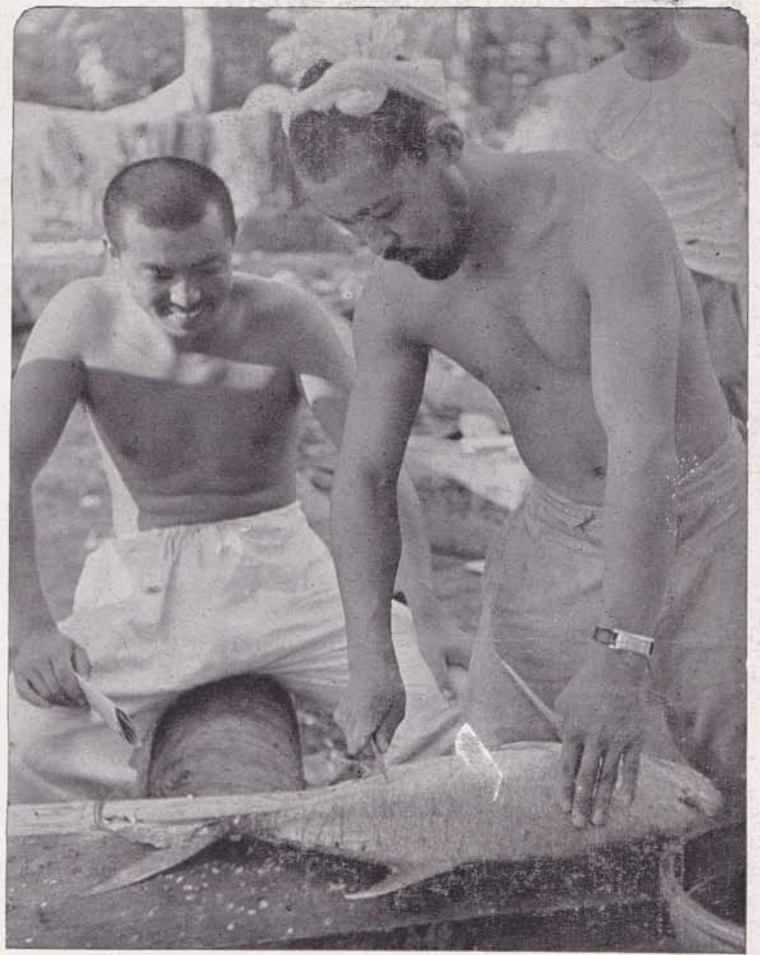
戦線のひととき。ときには穴を掘り、時には頭を刈る。鐵條網に干された千人針。ここに兵隊を守るまごころがある。われわれは山の兵營に鳴る特製の風鈴の音に聞き惚れる。砲彈の下で悠々とラジオ體操。これらの戦線の表情こそ日本の軍隊の強さであらう。

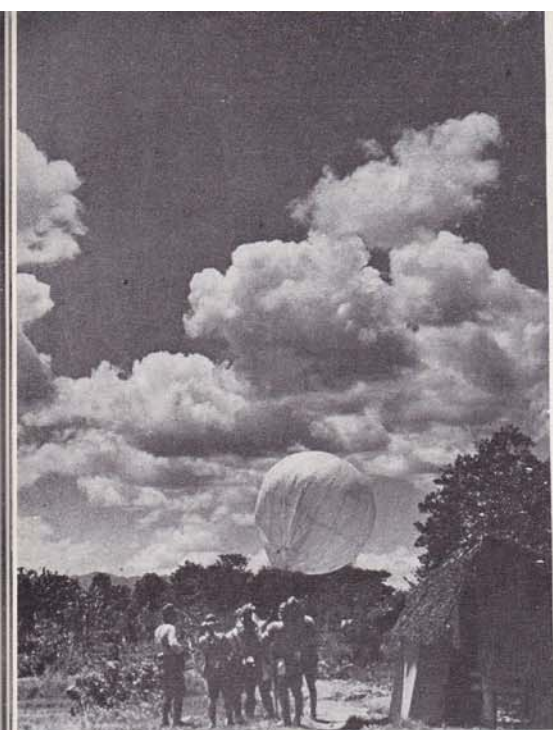




陣營の風景。多くの川には日本の名
を持つた多くの新しい橋が架けられ
る。砲弾と呼應する清流のせせらぎ。
炊事場ともなり、浴場ともなる。また
その水は馬のかはきを癒し、自動車の
熱をば冷やす。また料理人にも必要な
のである。敵をお見舞する砲弾の配
列。山賊の小屋のやうに、山地に點々
たる兵營。木と石と竹と土囊とでどこ
にでも作られ、わけもなく引つこしの
できる兵營である。見あげるばかりの
鬱蒼たる森林にはすさまじい蟬時雨
が聞かれ、ときにはシヤソーのごとき
蟬の小便の落下にもあふことがあるの
である。 —ナチブ山中—

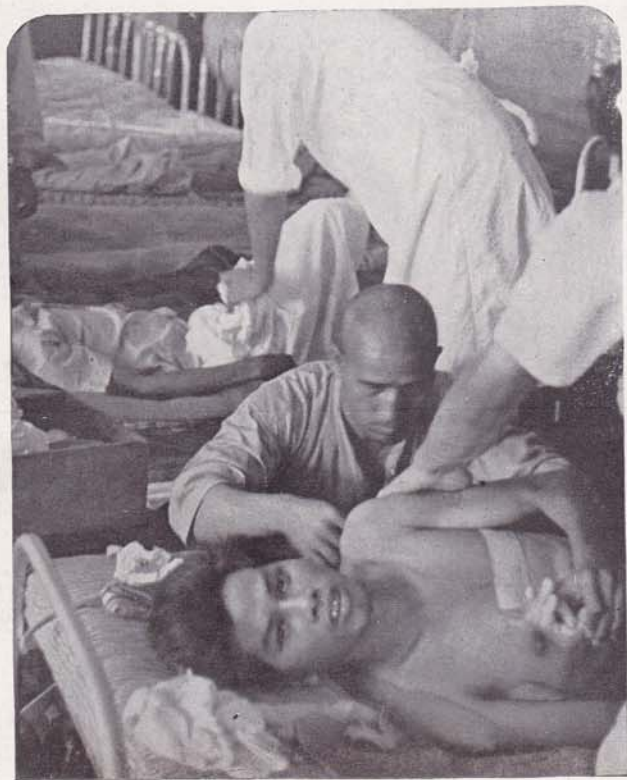






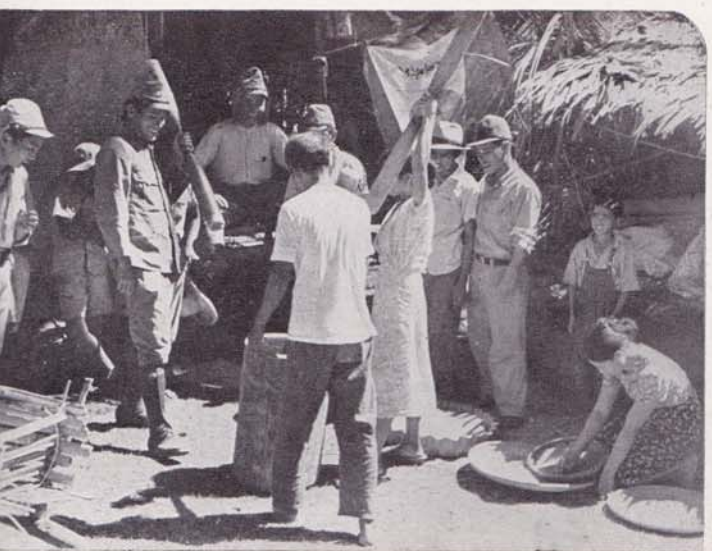
上左右宣傳班のバルン作業。

ここでは戦の周囲を見やう、投降傳
 單を持つたバルンがあげられるために
 は最前線へ水素管がはこばれねばなら
 ない、戦ひの過ぎたあとにはきづつい
 た難民の治療も行はれる、糧秣、彈藥
 輸送に汗を流す台灣高砂族義勇隊の健
 闘も見逃すことが出来ぬ。

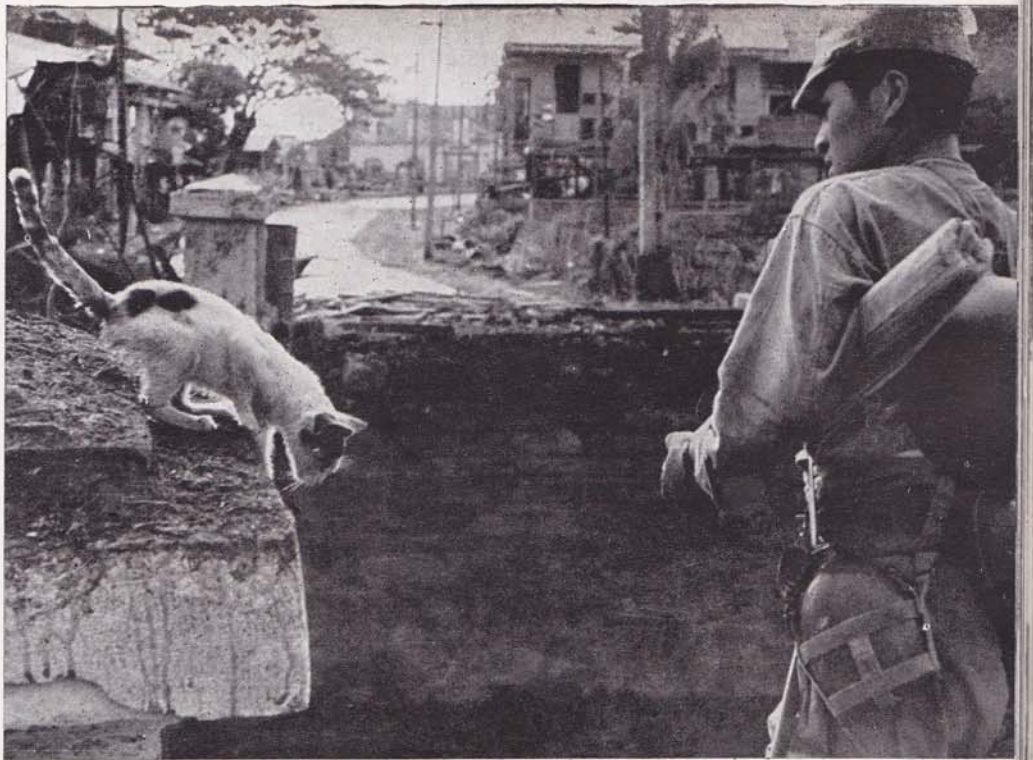


下左右高砂義勇隊









一日一日が勝利の道であり、一日一日が建設であるとき、戦線にひろはれる象徴の圖をながめやう。われわれは廢墟のな
 かで、米をあらひ、飯盒を火にかけ、鍋に砂糖と醤油とを調味する時間を持つ。猫の鳴き聲をきいてふりかへるとき、戦場
 の哀愁が胸を過ぎるけれども、われわれはまたその哀愁を糸の切れたヴァイオリンや壊れたアコデオンのなかに封じこめて
 明日の勇氣をつくることもできるのである。そして、焼け落ちたトタン屋根と、焼けのこつた教會堂との前に立つ兵隊のし
 っかりと結ばれた唇を信頼して居ればよい。戦線の一日に、砲弾の下で魚をすくひ、住民にまじつて糧をつき、市女笠をか
 おつた馬をひいて假橋をわたり、足をいためた馬の手當をしてやり、さうして、ふたたび、戦闘のなかへ征でてゆくのであ
 る。於バラシガ。



トラックより荷をおろし



ムビーカーをかかへ最前線



宣傳小隊の對敵放送

虚偽をあばき、東洋人は東洋の矜
 持にかへるべきことを絶叫して、日
 本人とフリッツピン人との心と心
 とをつなぐ通路となるのである。



あちゆる手段が勝利のために費
 やされる。ドラム罐は船となり、
 樹木は進路の標識となり、竹林は
 死角となり、薔は戦場の鎮護とな



オロンガボよりモロンヘドラム罐にて渡る兵隊



高らかなますらをの歌口吟み

この野をばふさぎて進む

防人の兵隊ゆけば

おのづから戦野はひらけ、

兵隊の歌とどろけば、

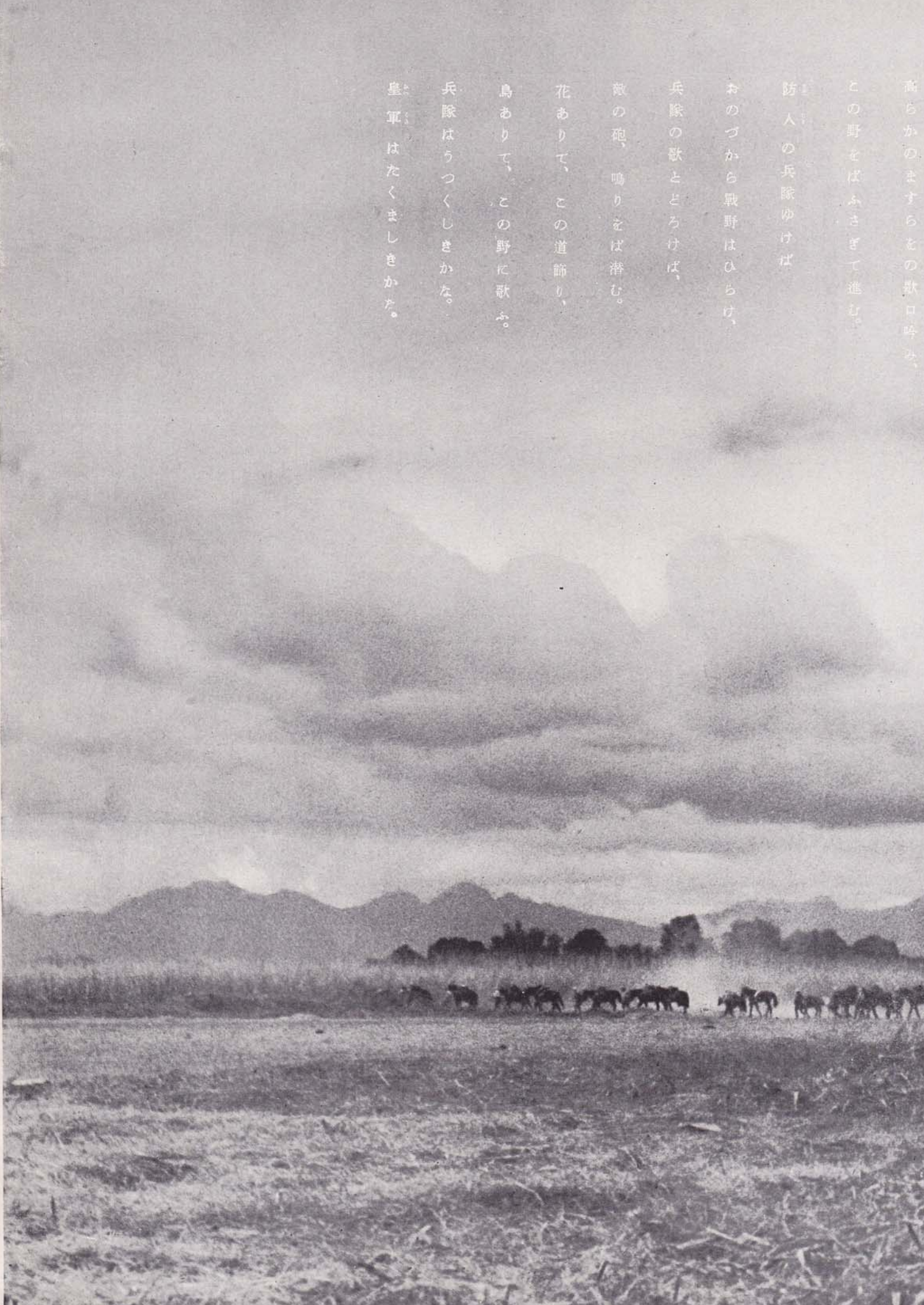
敵の砲、鳴りをば潜む。

花ありて、この道飾り、

鳥ありて、この野に歌ふ。

兵隊はうつくしきかな。

皇軍はたくましきかた。



きらめける雲ありて空を流れ、

つらなれる山ありて、そびえ立つ。

どよめける皇軍來り、

この野をばふさぎで進む。

高ちかの蹄の音の

音たかくみなぎるかなた、

敵ありて數百の砲をそろへたり。

荒涼の路かしこにありて

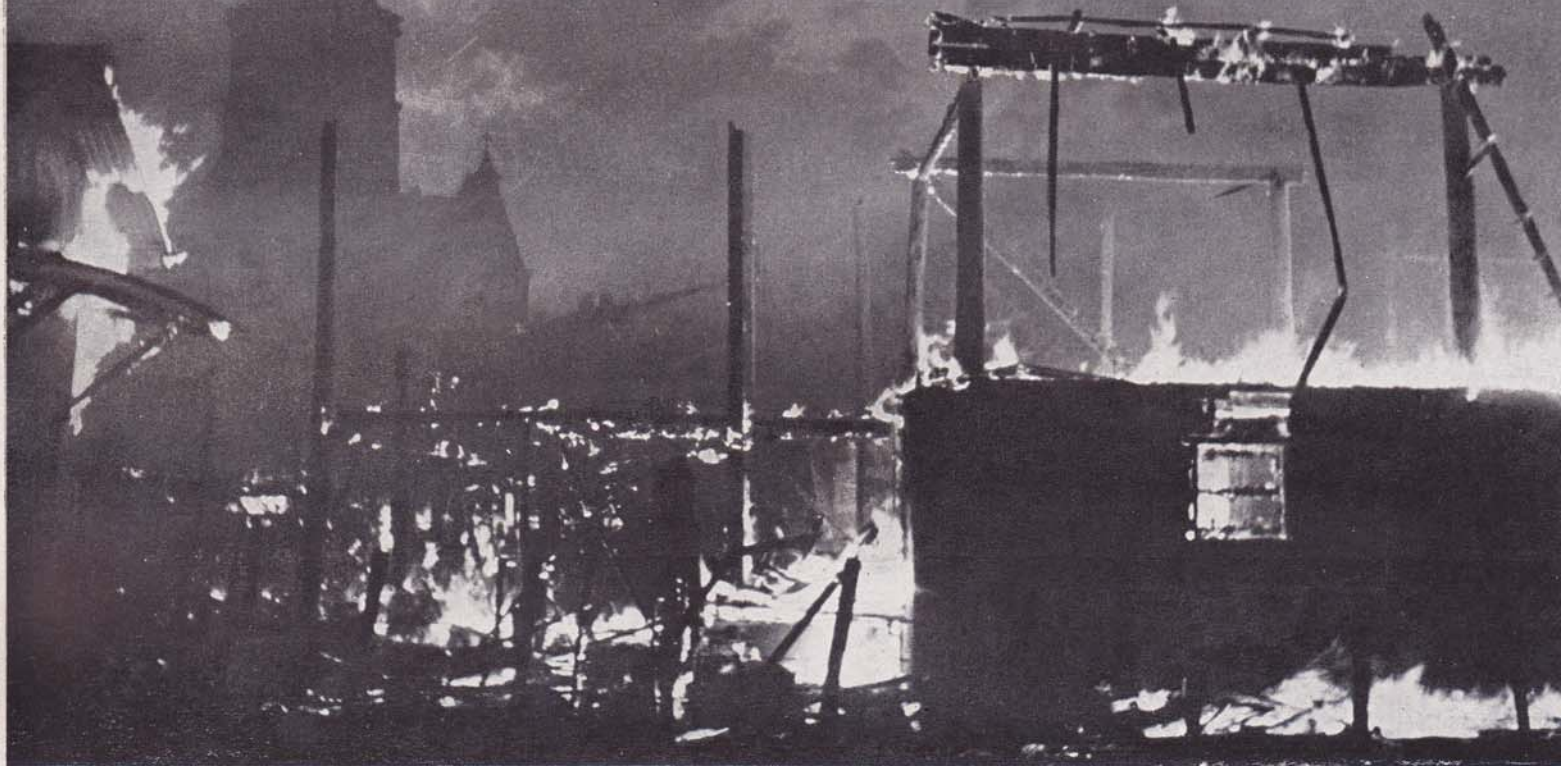
火の山なればとどろき騒ぐ。

しかはあれ、皇軍はたくましきかな。

銃とりて蹴決し、



川と椰子林
と火のなかを
行く進軍。自
らの家を焼き
住民を四散さ
せる不埒なる
戦術。いかな
るものもわれ
らの進撃を阻
止することは
できないの
だ。川のなか
をも、椰子林
のなかをも、
火のなかをも
笑ひながら兵
隊はゆくので
ある。





於ヘルモサー便衣の敗敵を土産に





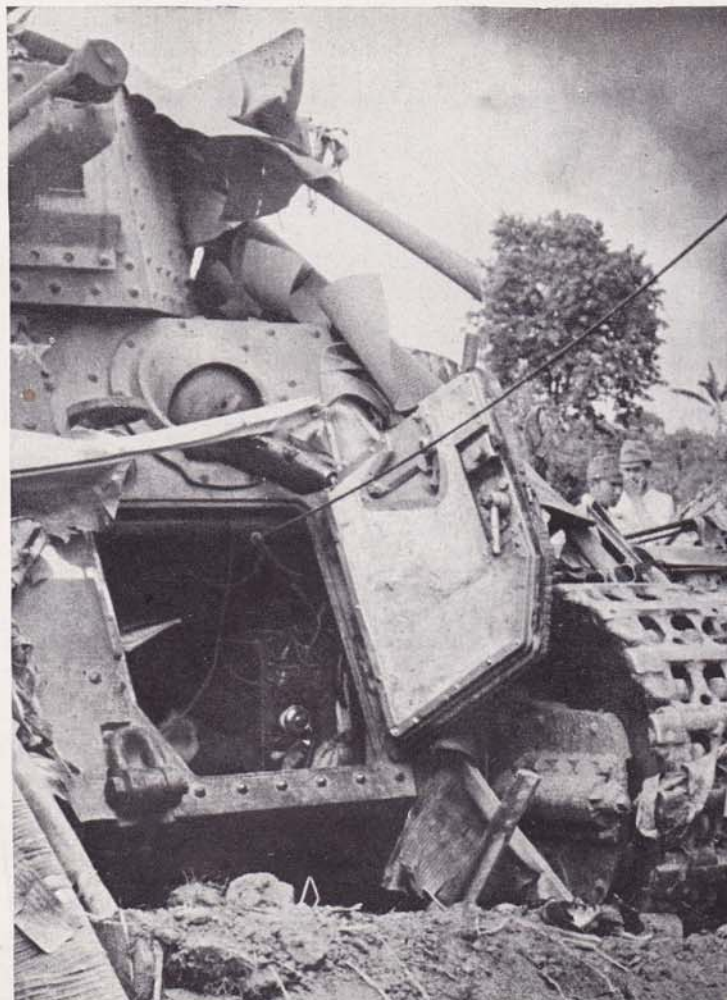
銃を腕にたくし、鐵兜を背にして靜かに夜を守る歩哨の黒い影。靜寂なる夜の戰場。とき折り小鳥が啼き、蜥蜴が鳴く。一年中、花と蚊と絶えない比島の夏。歩哨の守りに安堵して寝につく兵隊たち。思ひだしたやうに聞える銃聲。歩哨はしづかに歩き、警戒の腫をこらす。この毅然たる姿こそ、祖國を背負ひ、祖國を磐石に置く尊い防人の姿ではないであらうか。



オラニ近郊に待機する故

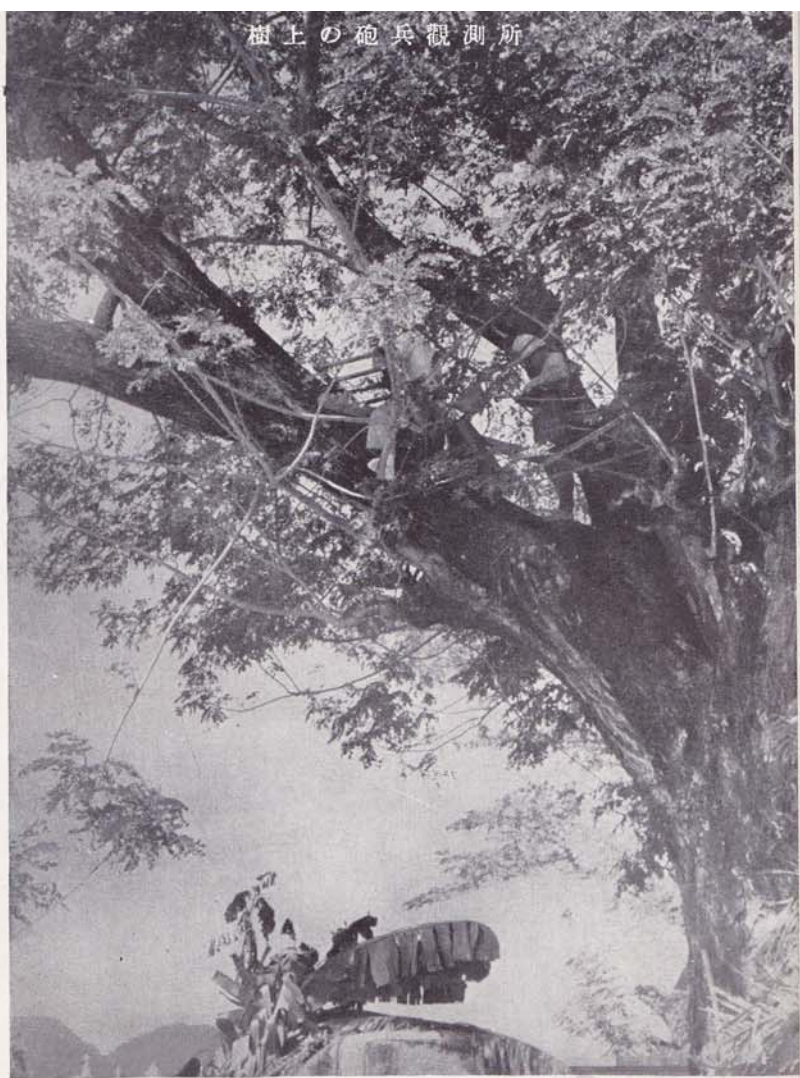


敵が遺棄した兵器

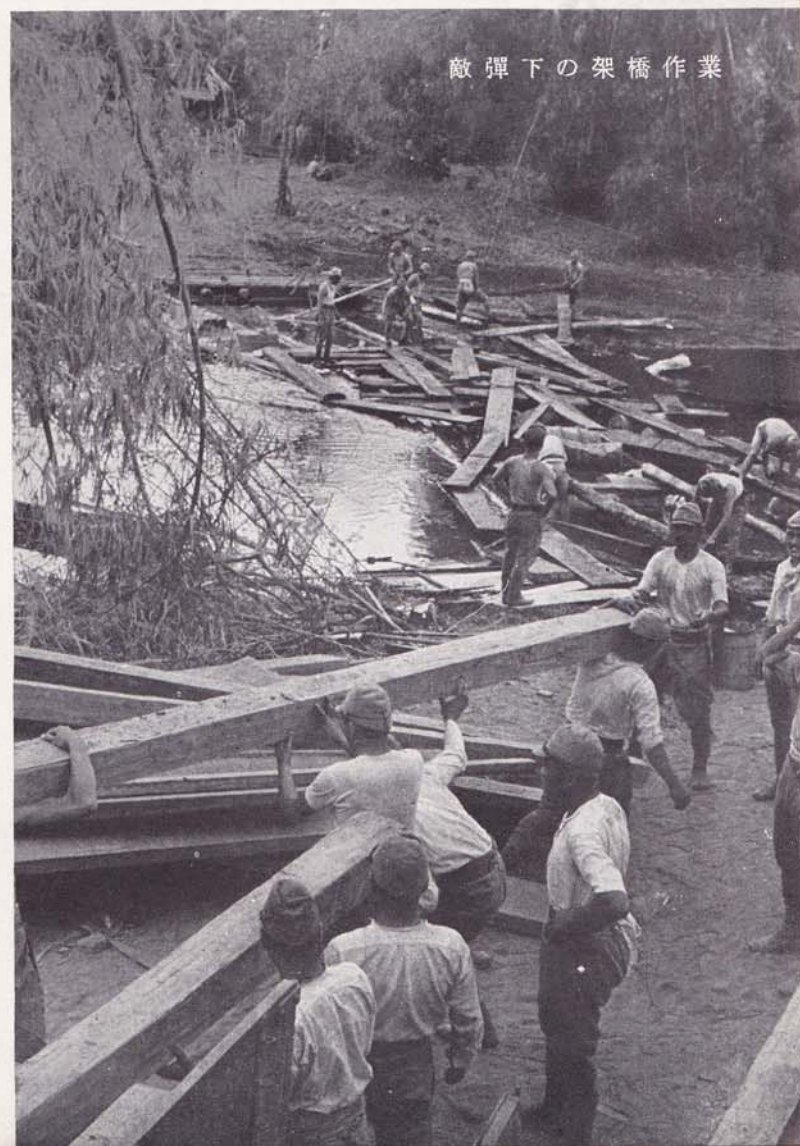




隊長を訪ねた報道班員



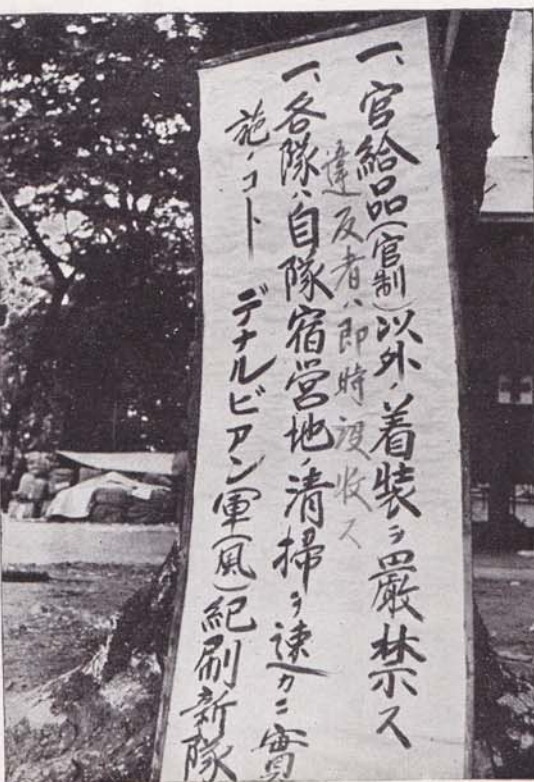
樹上の砲兵観測所



敵弾下の架橋作業



兵站基地となつたデナルピアン





三月は比
である。六
比島は一年
炎にもえた
総攻撃への
送られてゆ
結してゆく



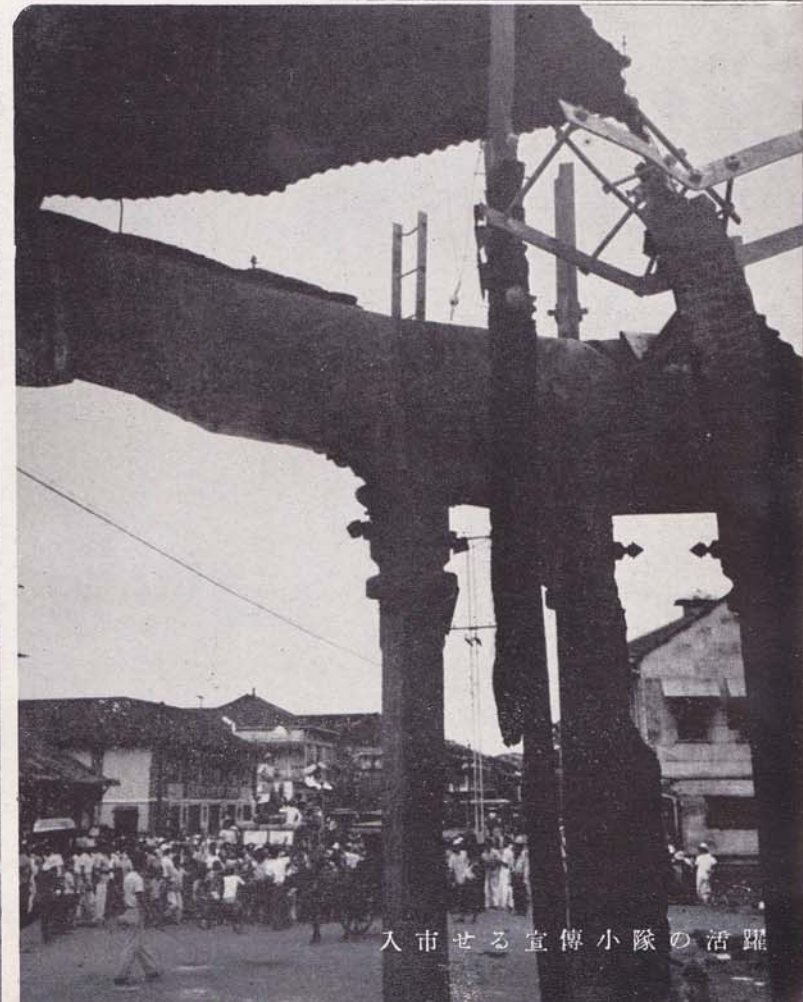
南サンフェルナンド驛の残骸



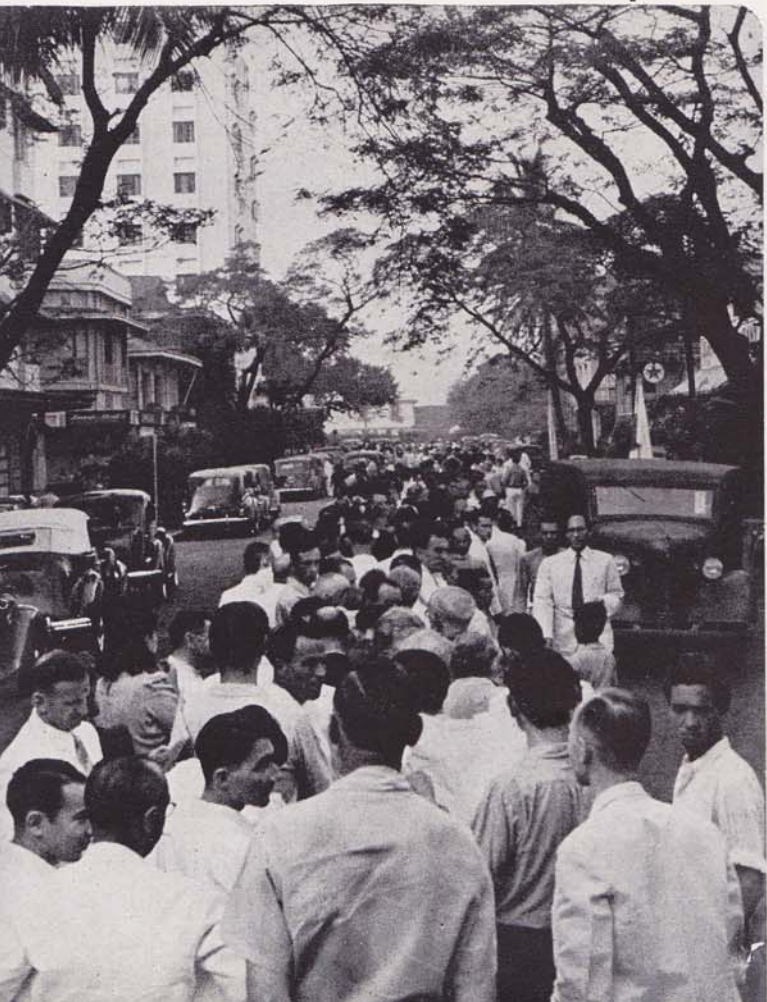
ある。四月も五月も夏
いはねばならぬほど、
である。バタアンは陽
あつた。そのなかで、
すすめられる。續々と
黙々として前線へ集
戦線にみなぎる鬼氣。







皇軍入市と同時に新しき軍政は布かれ
良民並びに第三國人の居住證明書發行が
行はれ急速に治安は回復されていつた。
ここにも戦争の一つの横顔がある。



入市せる宣傳小隊の活躍

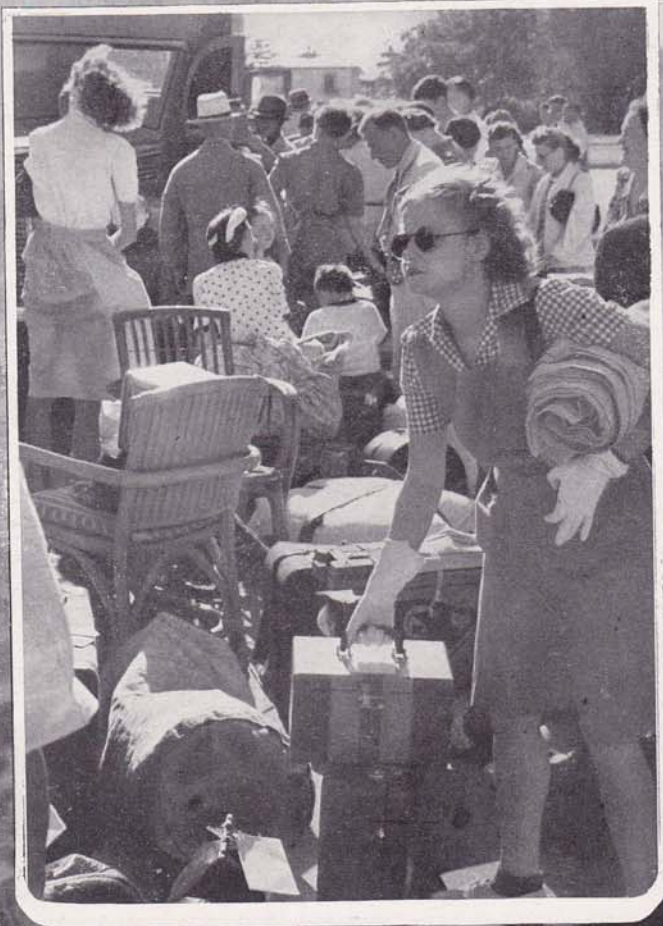
荒鷲の爆撃を喰つて敵の貨物船がのびてゐる。彼等の本國がぶざ



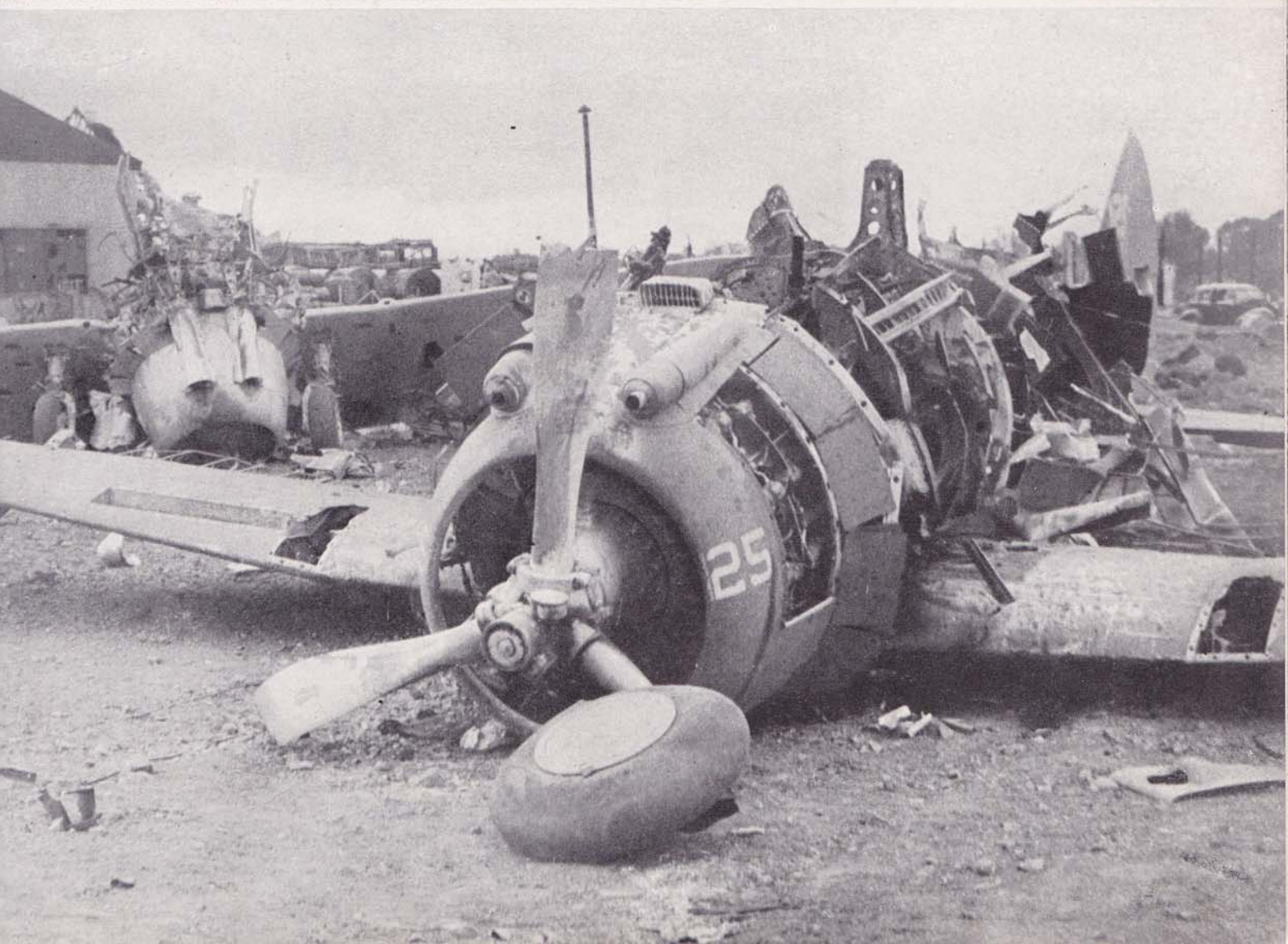
まに胴腹をかへず運命に陥る日もさう遠い将来ではあるまい。

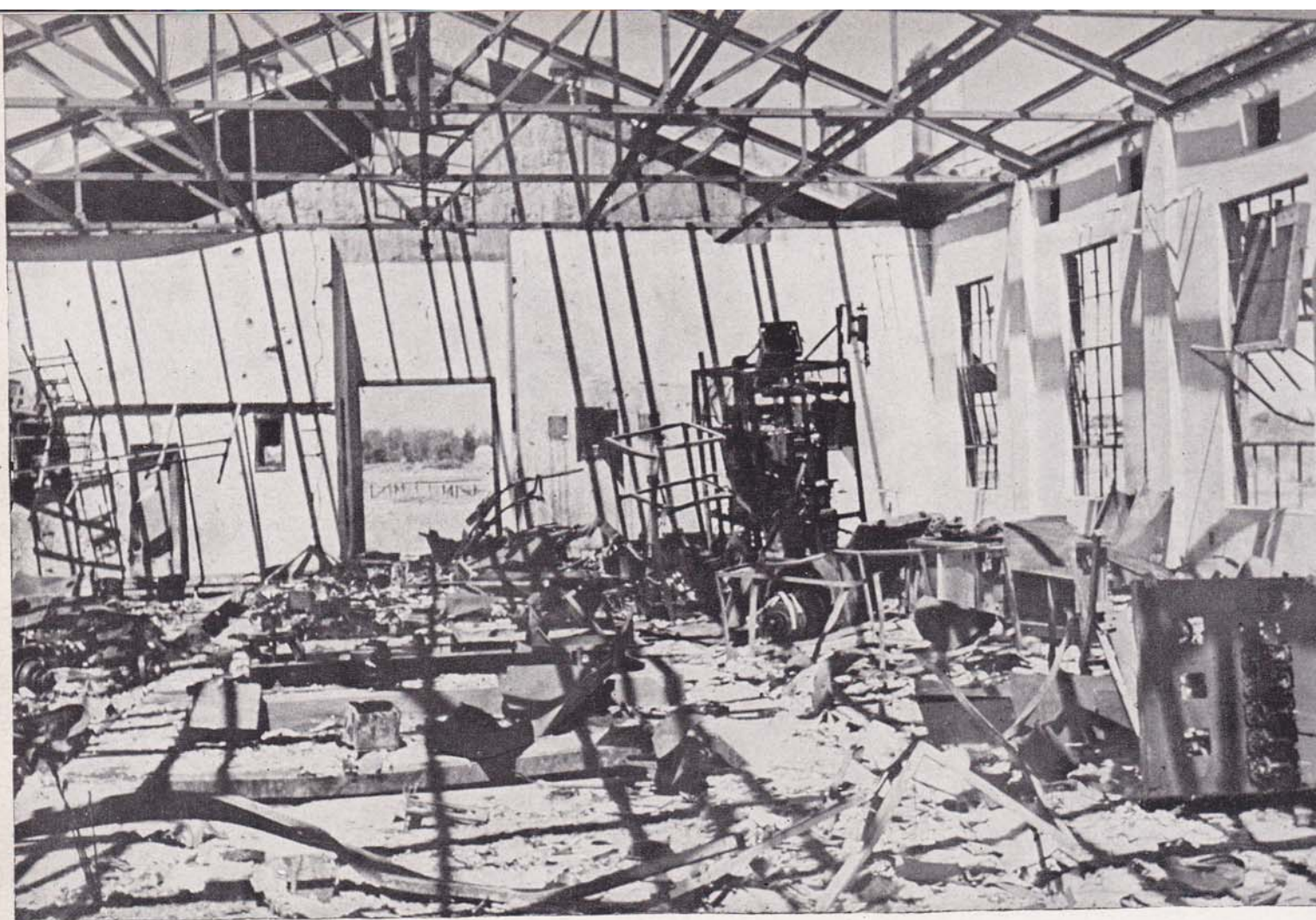


昨日まで傲然と市内をのし歩いてゐた英米人も、皇軍のマニラ入城と共に空軍の夢も覺め果て、「クワイ、ジョン・パワ―」君も「グロ―ドット・コルベール」嬢も「ジャッキー・タートガン」坊やもみんないつしよくだにセント・トマス大學の收容所に入れられることになつた。しかし皇軍の寛大なる處置は、嘗つて等しく收容の憂目に遭つた在留邦人をしめて彼等のは極樂の生活です」と嘆せしめたほどで、收容英米人も心から感謝してゐる。



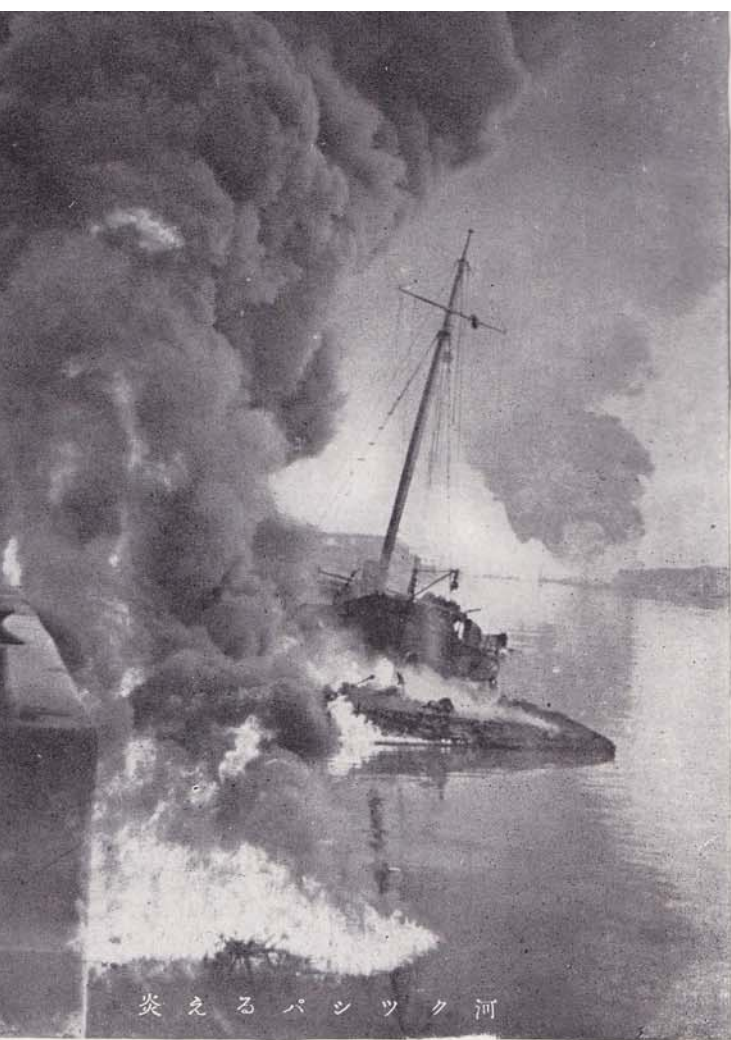
マニラ近郊 = コラス米空軍基地所見



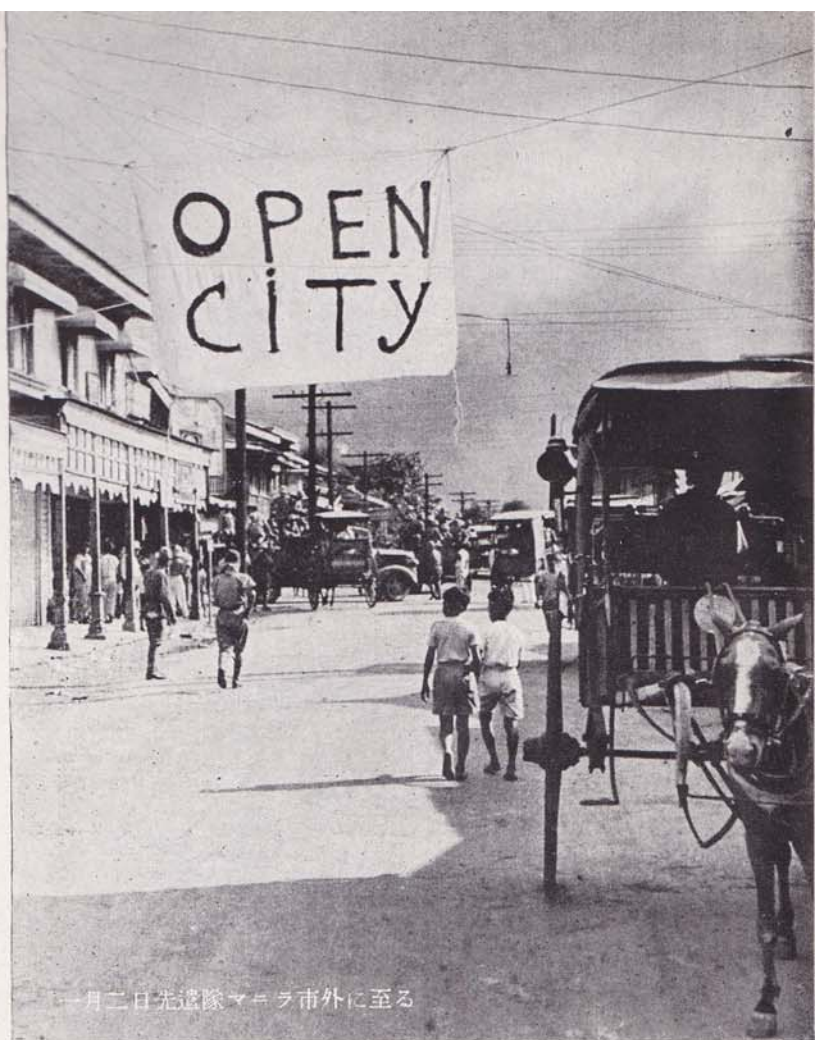


見よ、星條旗は惨として地に墜ちたり！

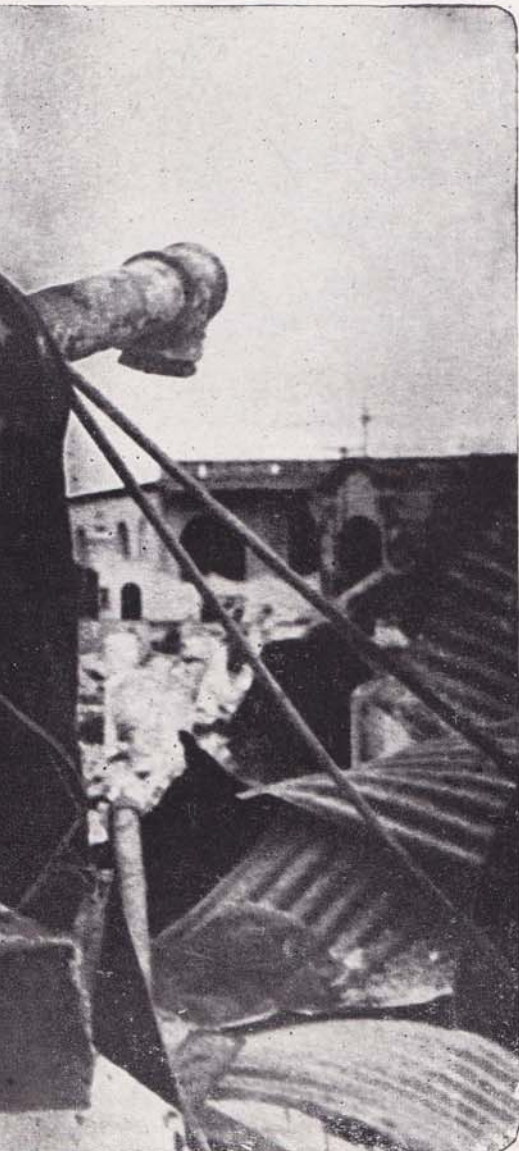




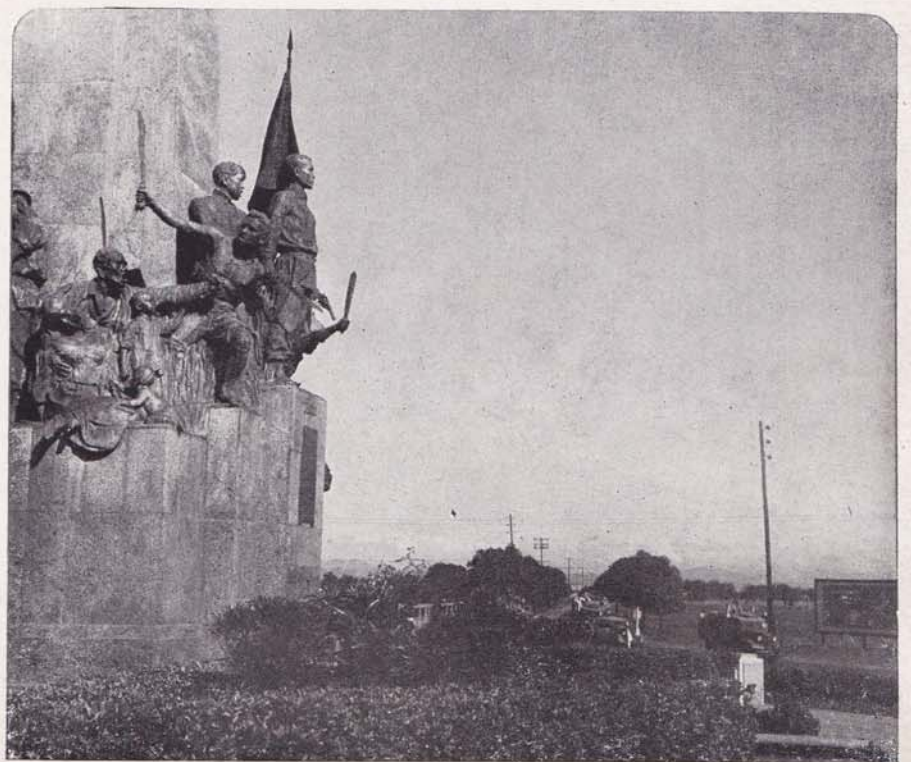
炎えるパシツク河

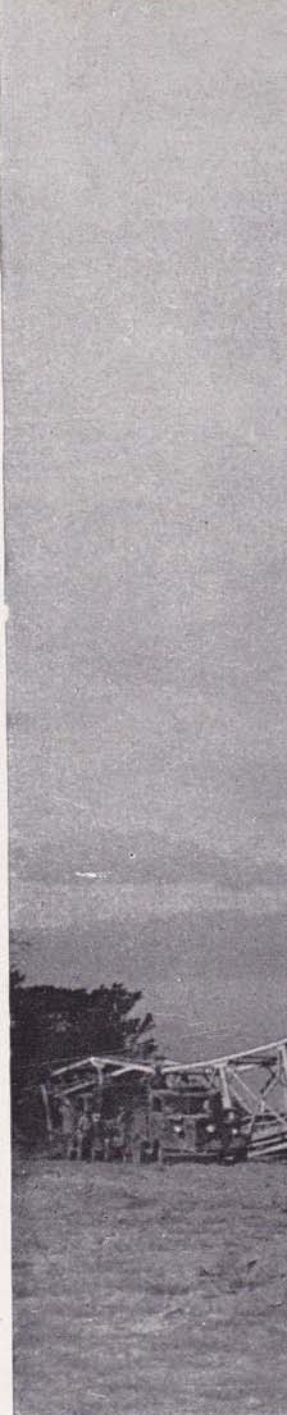


一月二日先遣隊マニラ市外に至る



一月二日、日本軍の先遣部隊は首都マニラに突入した。市の北方の郊外に獨立運動の志士ボニファツシオの記念塔があるが、一千八百九十六年、彼等のいはゆる「カチフーナン」黨が滿腔の恨を吞んで一敗地に塗れてから星霜茲に四十數年、今こそ民族解放の秋至れりと群像命あつて皇軍を歡迎するが如くである。





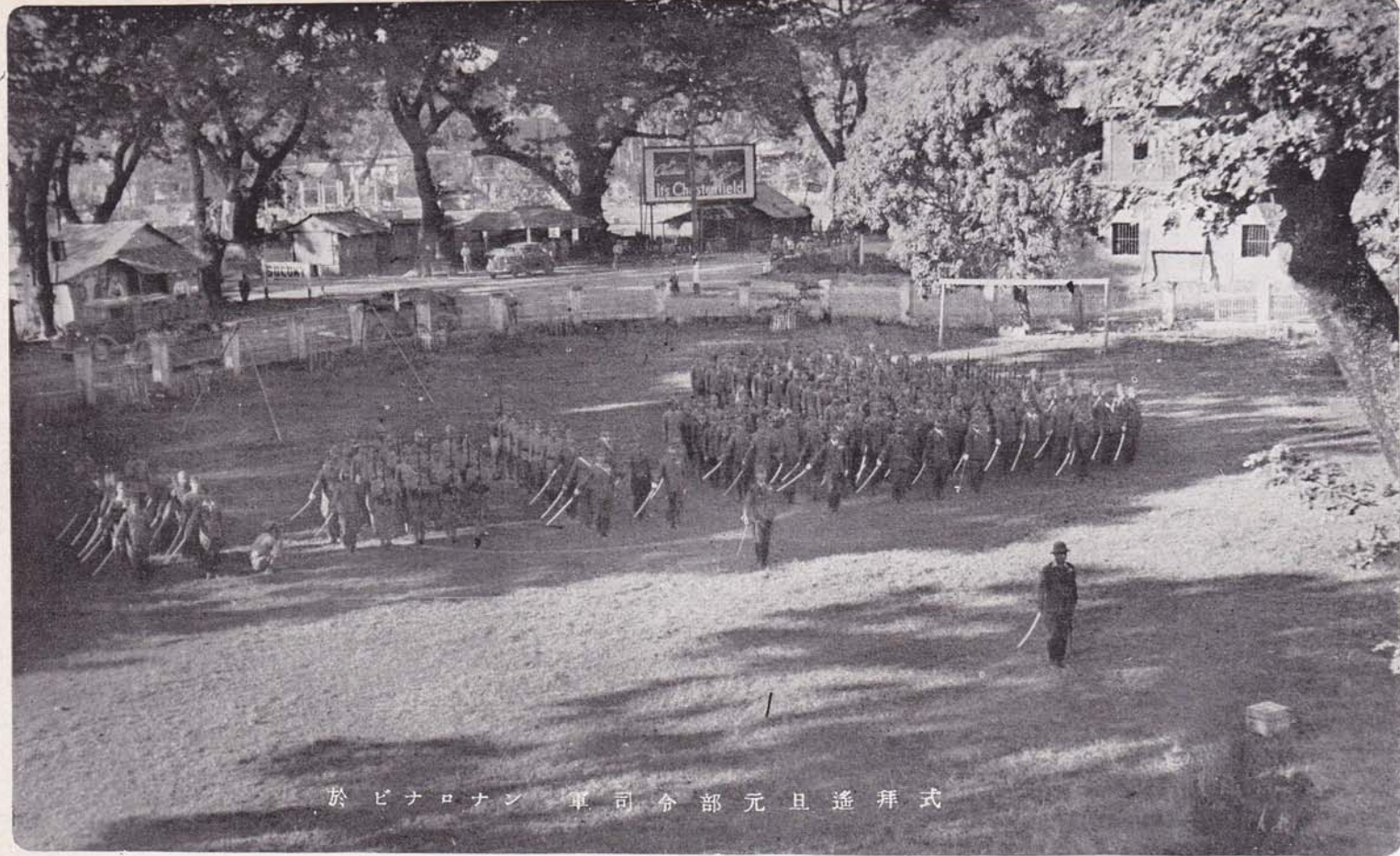
↑ バラニヤケを占領した種
 銳はマニラに囚迫す。



← 先遣隊と共にサリアヤへ
 突入した宣撫班は直ちに民
 衆宣撫に着手する。

敵が退却に際して行つた橋梁爆破の作業は計画甲を興へてもいいくらゐに見事なものだつた。それだけにこの敵を急追する日本軍の辛苦は言語に絶するものがあつた。しかし鐵壁の意志は何物も過ぎる能はず、震けるやうな炎天下に、深い砂地の川原を、人が自動車を押して、難行軍をつゞける。追撃、また追撃！



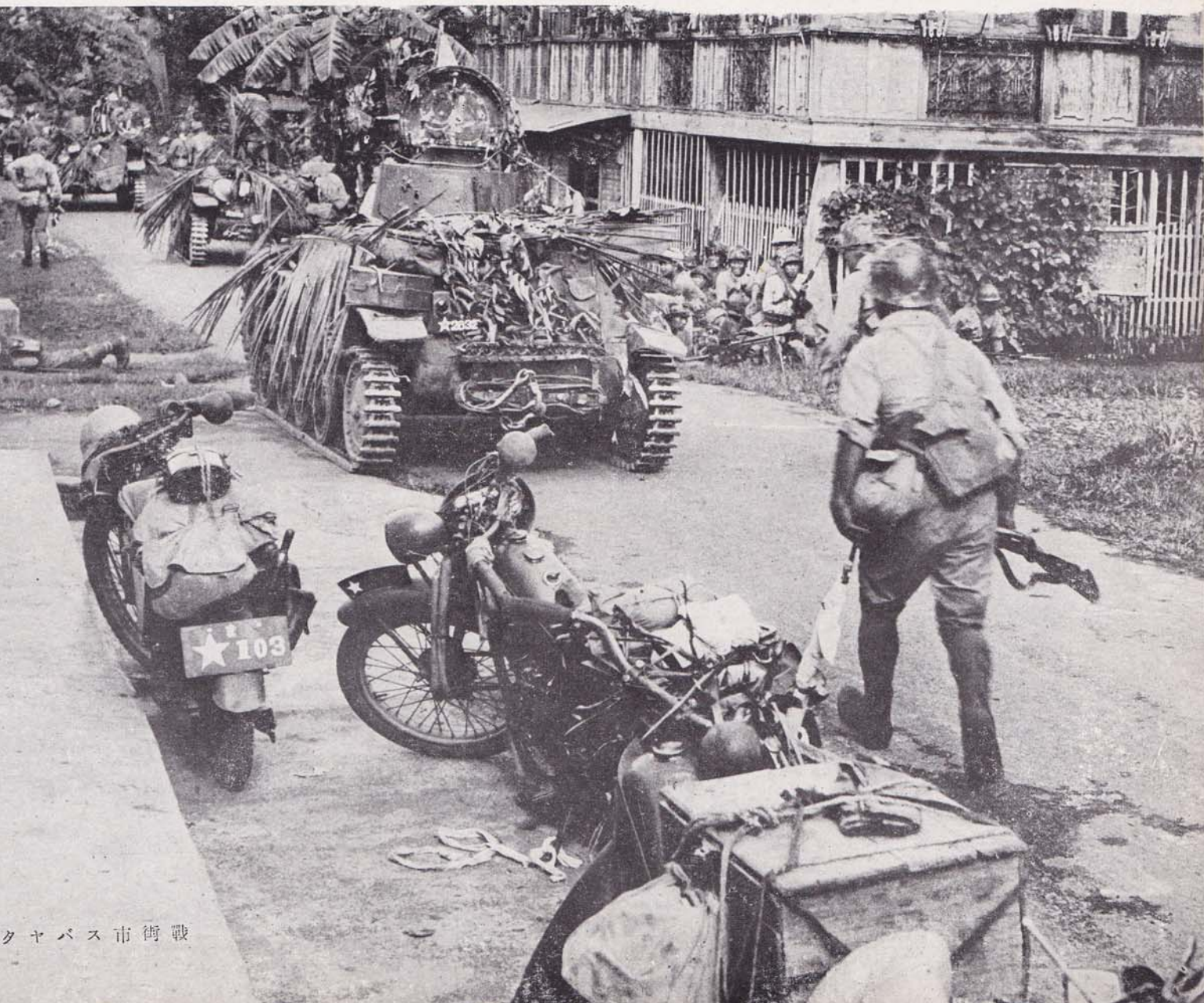


於ピナロナン 軍司令部元旦遙拜式





米軍の敗走する前に兵器を残す



戦市街バスヤタ





渡洋船團

十二月二十二日拂曉を
期して、米機來襲下に
リンガエン灣敵前上陸
は開始された。



軍司令官上陸第一歩 → マニラへ



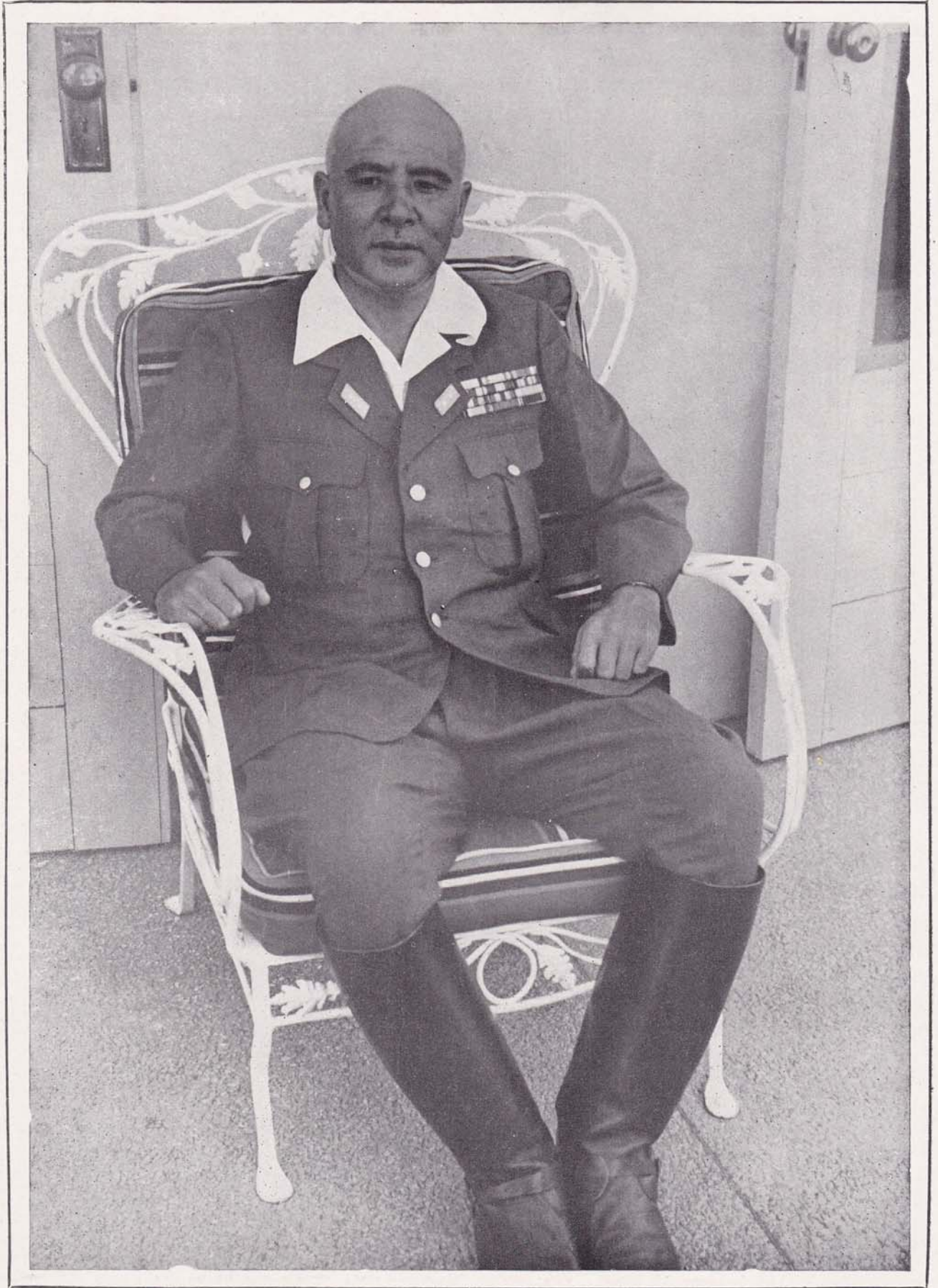
昭和十七年十二月
二十四日、比島派遣
軍軍司令官本間閣下
はリンガエン灣のサ
ンチャゴに上陸第一
歩を印した。

巨歩比島の土を振
動し、戦果はこれよ
り急速に擴大されて
首都マニラは旬日を
出でずして皇軍の掌
中に歸した。そして
また、堂々の巨艦が、
舟艇から工兵隊の架
した假棧橋に移され
たこの瞬間に、米比
軍の全面的降伏の運
命も定まつたのであ
る。



ルソン作戦圖





本間前軍司令官



田 中 軍 司 令 官

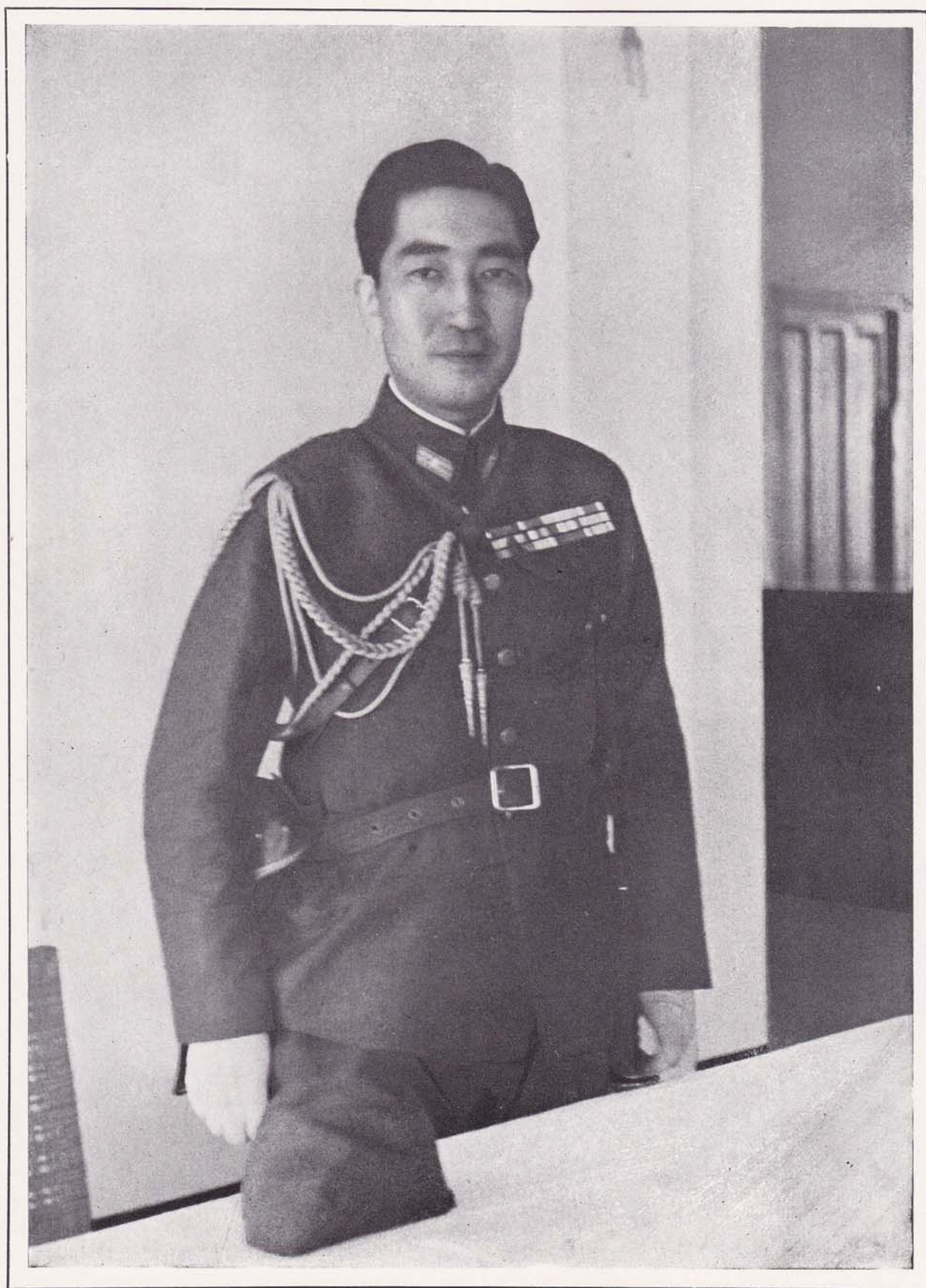


杉 山 參 謀 總 長

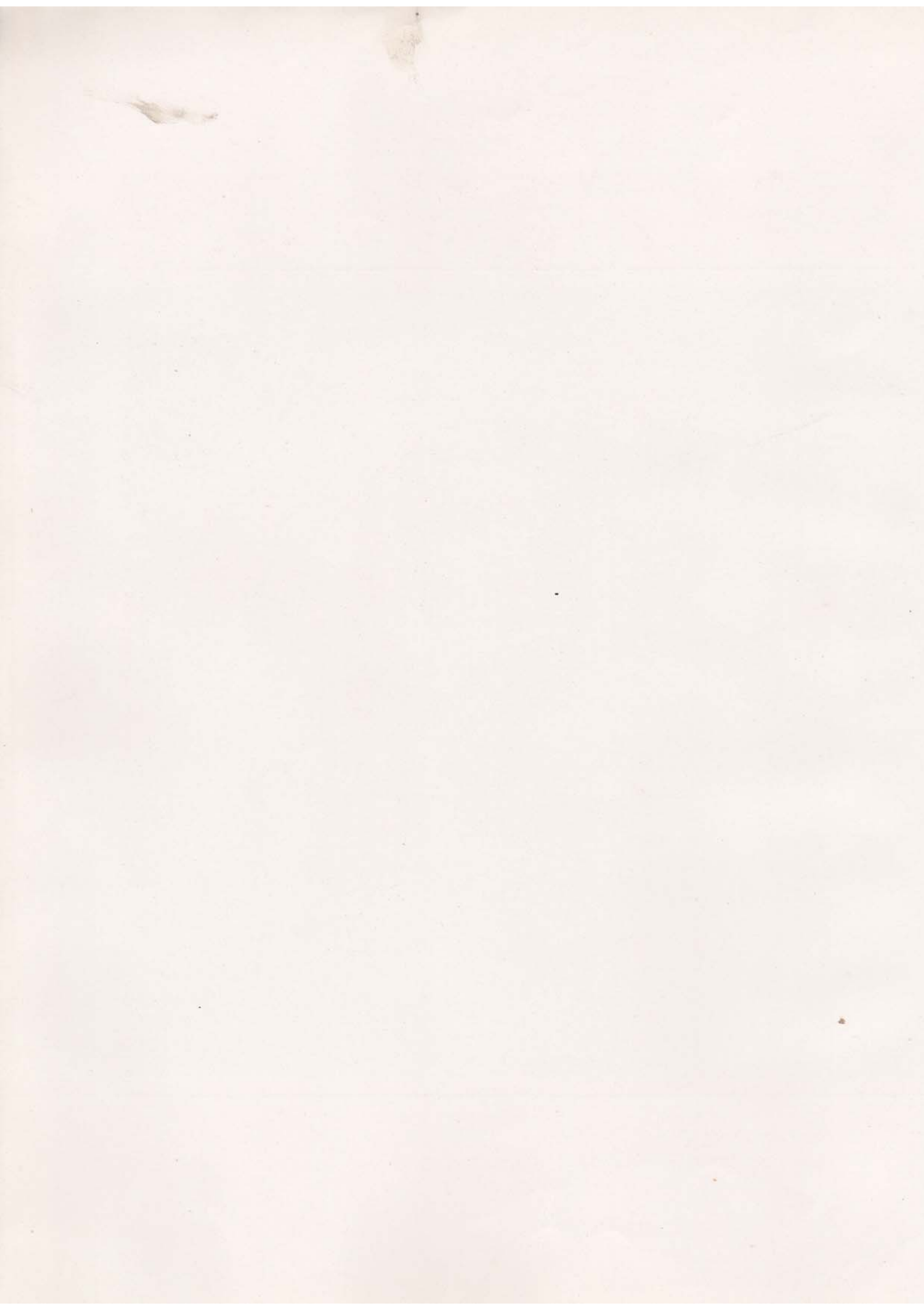


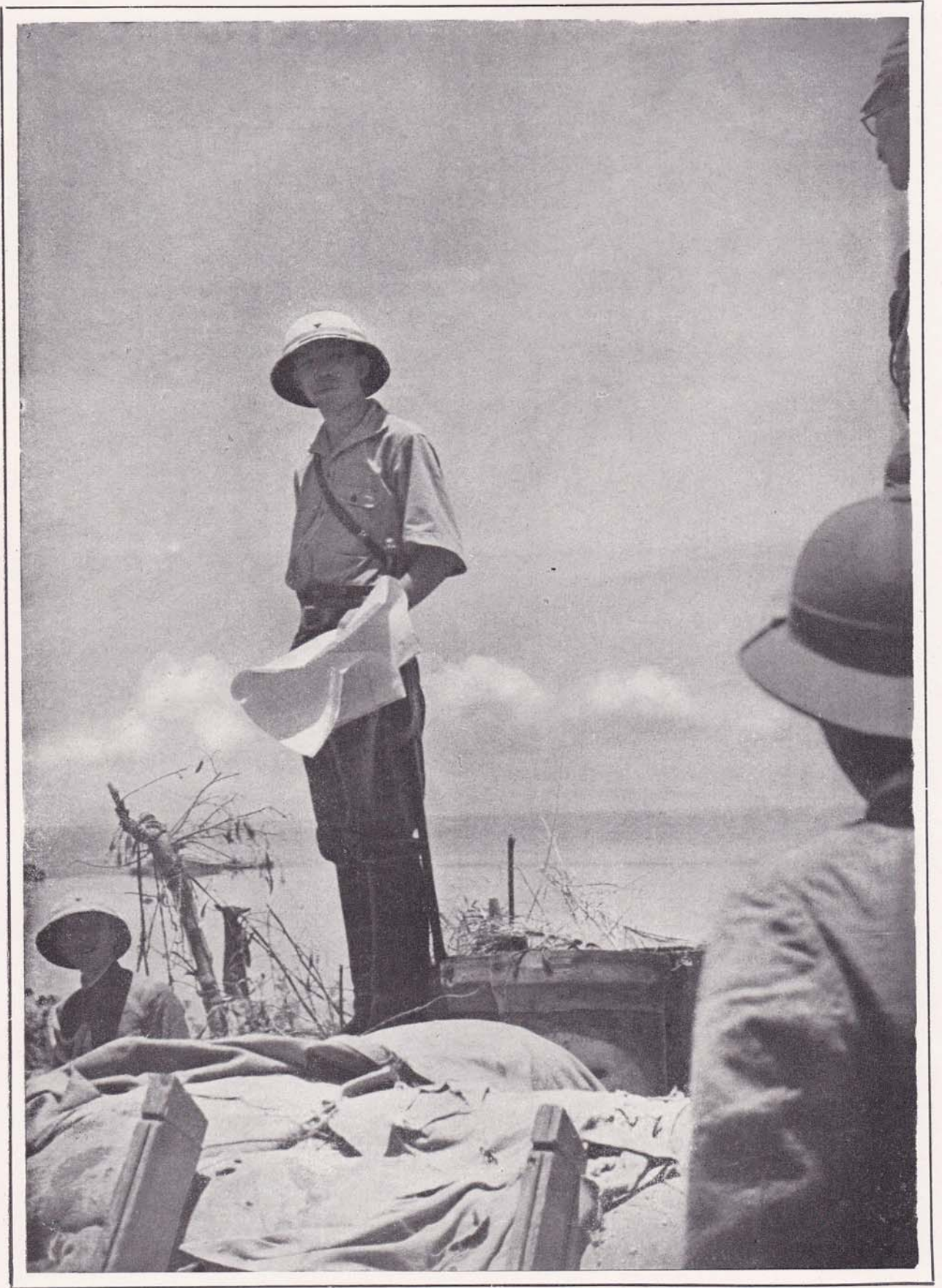


李 錫 公 殿 下

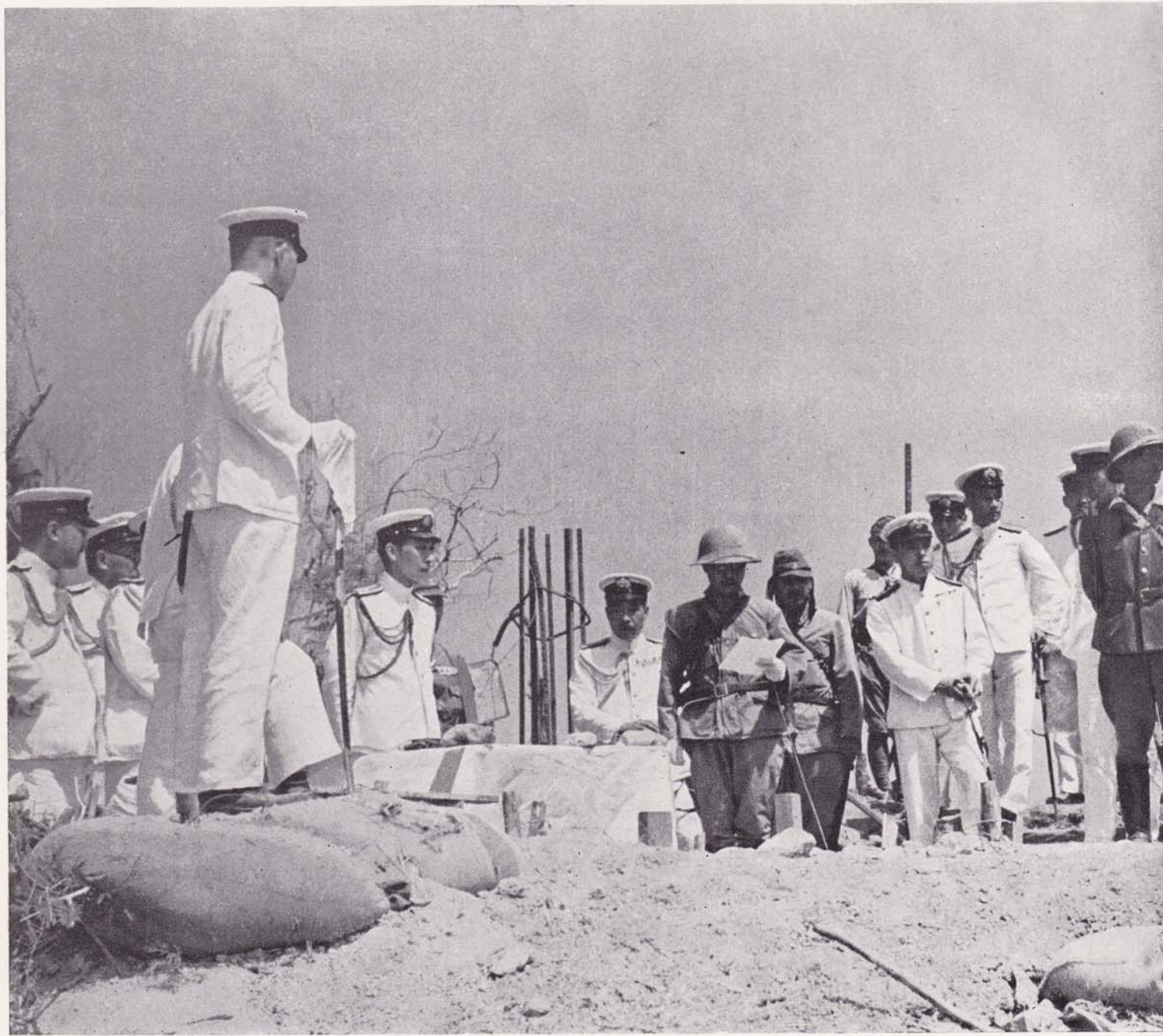


竹田宮恒徳王殿下

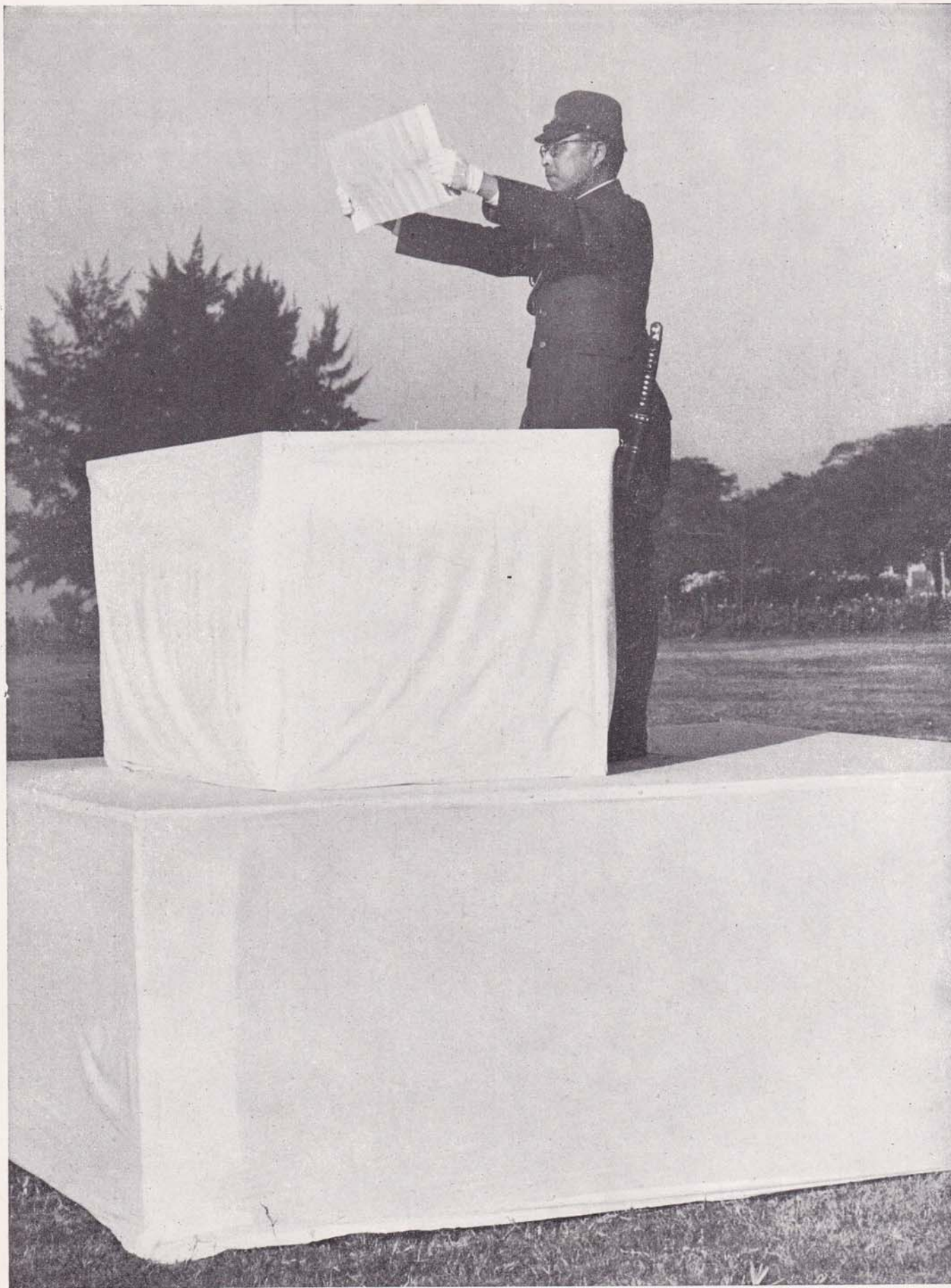




東久邇宮盛厚王殿下



高松宮宣仁親王殿下



長くも侍従武官を御差遣あらせらる。



比島派遣軍

程時





比島派遣遺軍

徐海



渡集團報道部編輯